

同窓生寄稿

あのことろ・このごろ



わが寿山会は、昭和十三年
岐阜中学校京町校舎最後の卒
業生の同窓会である。

その頃の京町は、岐阜高女、
富田高女もある文教地区で、男
女の学生で賑っていた。

定員一〇〇〇名の中学校舎は、
明治二四年の濃尾震災後に順
次建てられた木造建築で、大部
分は寿命が来ていた。

そんなオンボロの老朽校舎で、
全県下から集った二〇〇名の同
級生達は、五年間の中学生生活を
送った。優秀で個性溢れる諸先
生方にすっかり鍛えていただき、
おかげで現在があるものと深く
感謝申し上げている。当時は中
途退学が多く、卒業したのは一



平成20年10月16日 記念品の目録贈呈に母校を訪問(校長室にて・左から5人目が著者)

校が多くなった。

私も海軍機関学
校(海軍兵学校舞
鶴分校)へ進み、卒
業間もなく太平洋
戦争に突入した。
海軍航空隊ゼロ戦
部隊勤務となり、
ラバウルを始めとす
る南太平洋の最前
線の島々を東奔西
走する日々であった。
最後はマリアナ沖
海戦で、空母上に
て頭部に重傷を負
ったが奇跡的に生
還した。半年間の
病院生活の後、復
職し、教官、参謀
を歴任して終戦と
なった。

七六名であった。
卒業前年の昭和十二年に日華
事変が勃発して本格的な戦時
体制となり、進学も軍関係の学

激務の連続の軍隊生活であつ
たが、終戦となって、海軍士官
としての責任感と、大きな価値
観の変化による困惑状態の中に

おかれた。

戦争により前線各地に散在し
た旧友の犠牲者も多かったが、
混乱の中その情報把握は極めて
困難であった。

そんな中を、中島八郎君を中
心とする岐阜市在住諸君の骨折
により、昭和二三年数人である
が初めての同窓会が開催された。

その後は復興が進むにつれて
参加者も増え、昭和二七年三
〇余名出席の盛大な発会式を
挙げた。卒業年次の十三トッパツをも
じって父さん会と命名し、岐高
同窓会の中でも、その結束ぶり
が目立った。

昭和三十一年に、会の規約と家
族情報まで含めた名簿を作成し
た。その時点で会員数八七名で
五〇%の生存率であった。

平均年齢三五才の働き盛りで、
戦後復興の立役者として各方面
で活躍していた。
父さん会への出席も順調に増
加し、年一〜二回の会を重ね、

物故者追悼や松茸狩等の行事
も行って来た。

昭和六二年卒業五〇周年の
記念誌「干仞」を刊行し、半
世紀の想を記録に留めた。名称
も年相応に父さん会から爺さん
会と改称し、最終には寿山会に
なった。

この頃から体調を崩す者が出
始め、年を経るにつれ急速に増
加して来た。年一回では淋しく
ないかとの声で、年数回の小集
会も開いて来た。しかし寄る年
波には勝てず、平成一〇年には
幹事の諸君も次々と倒れ、囚ら
ずも私が最後の幹事としてお世
話をする事になった。

八〇歳を過ぎてよりいよいよ
淋しくなり、出席も一桁が統
くようになった。

相談の結果卒業七〇周年を
期して寿山会を解散することと
し、記念品を母校に贈呈するこ
とになった。
平成二〇年一〇月一六日折

柄改築中の母校を訪問し、校長先生に記念品の目録を贈呈、校内見学の後、長良川畔に席を移し出席者七名全員で校歌を斉唱して解散した。時あたかも米寿を迎え遙くも来つるものかなと感無量であった。

因みに記念品の内容は、岐阜中学校の象徴である山桜数本とその山桜を詠んだ国学者本居宣長の歌碑である。

新築工事の関係で、実際の贈呈は平成二三年春の予定で、目下慎重に準備中である。

現在は「寿山会を偲ぶ会」として少人数であるが随時会を重ねている次第である。

(株)KDM(旧カルコス) 会長

地域医療への思い

渡邊 正

昭和35年卒

卒業してから四七年ぶりに岐阜に戻り、現在各務原市にあります。中央病院の病院長をしています。どんなに長く離れていても、ふる里が体にしみ込んでいるせいか、



定年の年に、愛知県がんセンター愛知病院・緩和ケア病棟棟長と

すぐに岐阜県人になりました。私は消化器がんの外科を専門としてきましたが、母のがん治療に際して、痛みの取り方も分からず苦しい思いをさせた経験から、緩和ケアにも取り組んできましたので、その前の一年は、愛知県がんセンター愛知病院につくられたホスピス・緩和ケア病棟の立ち上げを依頼され、岡崎市で過ごしました。愛知県として初めての施設でもあり、絶対に成功させようと意気込んで取り組んだところ、素晴らしい職員と市民の方々に支えられ、無事に役割を果たすことができました。その後は嘱託医として三〇時間働けばよいとのことで、それではと週のなか日に休みを取

り、散歩がてら喫茶店に入ったりとゆったりした時間を過ごしました。定年後にこんな素晴らしい時間が待っていたのかと感動していましたが、それもわずか三か月で終止符をうち、世にいう「医療崩壊」の現実との戦いの中に身を投じることになりました。医師不足、看護師不足から地域医療を守る取り組みとともに、現在もがんを克服していく方々のケアを行っています。現場では、私の若いころ持っていた「家族」のイメージは様変わりし、少子高齢化がすでに社会の基盤を揺るがしていることを実感しています。

グローバル化と功利主義が、将来を託す若者を犠牲にしている現実を思うとき、貧しいながらも希望と活力を感じて六〇年代を送った者として、持続可能な社会にしていくために何らかの働きをしなければと考えています。今は、在宅、介護・福祉施設、病院がしっかり手を結んで、切れ目のない医療・福祉が提供できる地域のネットワークづくりに努めています。幸い当地には、長縄先生、小笠原先生が、地域医療の推進役と

してご活躍されていますので、仲間に入れていただき勉強しています。

青年期の自立葛藤について

黒田 弘彦

昭和39年卒



特に先輩に多かつたかも……)ものの、私は医学部受験時より、精神科専攻を決めていたので、さしたる迷いも無かつた。と言うのも岐高時代に、九州大心療内科教授(当時、国内に心療の著書である『催眠』(NHKブックス)を読み、心の在り様で身体機能にも影響があり、終には疾患にまでなりえることが記されていて、この心身相関に興味を覚えていたからである。そして精神科医としてスタート後は、心の在り様とかその成り立ちの分析や、更には心への治療的な働きかけ(精神療法)を学び、実践していった。

一〇数年の病院や行政機関での勤務の後に新岐阜のビルでメンタルクリニックを開業して早くも二七年目に入った。そもそもは岐高を昭和三九年に卒業、昭和四五年の岐大卒業とともに医師免許を取得し、精神科医としての第一歩をスタートしている。当時は昨今の精神科ブームとは程遠い世の情勢であり、精神科を専攻する者は少なく、場合によっては変人扱いされる雰囲気(「無きにしても非ず」であった(実際、やや変わった人が、

反発して自己主張を貫くほど自信があるわけではない。かと言って、あからさまに流されてしまふことにも抵抗がある。自分は何が向いているのか、何が出来るのか、どれくらい出来るのか：分らない事だらけ。そして精神科医になってからも、本当に間違った選択ではなかったのか、自分に適性はあるのか、この先やっていけるのか：不安でいっぱいであった。この頃に期外収縮（不整脈の一種）や、後に痕跡として発見された十二指腸潰瘍の発症があった。典型的な心身症である。まあ大きな選択ミスではなかったのではないか、そこそこ精神科医でやっていけるのではないか、この方向で今後もやっていこう、と何とか思えるようになったのは三〇歳前後だったと記憶している。

しかし、この体験が日常の診療に大いに役立ったと思っている。特に自立葛藤に基いて心身症とか神経症レベルで表現してきている患者さん達の診療に於いて、自分の体験が一つの基準になり、その症状の背景に在る問題の理解や治療的接近を容易にしてくれている。（但し、自分を基準にするといっても、自分が原点に

いると捉えてはならない）
更には、昨今業界内ではトピックスの一つである双極性障害（Ⅱ型）（うつ状態と軽躁状態の繰り返し）は混合したもので、比較的若者に多く、従来の鬱病には当てはまりにくい鬱病として一般には見られやすいの診療にも役立つことが稀ならずある。

話は変わるが、昨今の風潮として鬱病が「心の風邪」と言った表現で平凡なありふれた病気として扱われるようになってきている。啓蒙や偏見の解消に役立ち、専門医への受診を容易にして、早期発見・早期治療に結びつけられた点では非常に評価できるものの、一方では鬱病をあまりにも簡単、単純に理解してしまい、誤診（多くは先程の双極性障害〔Ⅱ型〕の見過ごし）とか増悪化させたりする例が増えてきているとの警鐘が鳴らされている。かかりつけ医（多くは内科医）のみならず、専門医に対しての警鐘である。



岐阜高校と私

荒木 登茂子
（旧姓：豊田）
昭和42年卒

私にとつての岐阜高校の思い出の一つは校庭に広がっている長い堤防である。二段になった堤防に座って声を張り上げた応援歌、両腕を広げる応援団長の眩しかった白い手袋と「アイン、ツバイ、ドライ」の掛け声、地の底からひびきわたってくるような一五〇〇人の校歌、夢中になって応援した野球の三岐大会、いつもどこかで流れていたプラスチックの鉄腕アトムメロデー、トラペットを吹いていた級友、寒風すさぶ冬の日に白い息を吐きながら長い堤防を駆けた持久走、

はるかかなたの伊吹山と眼下の長良川、友と語り合った昼下がり：懐かしい思い出が堤防をきっかけて走馬灯のように駆け巡る。私にとつてのあの堤防は校庭から見上げると空につながり、はるかかなたの見知らぬ世界への広がりを感じるものでもあった。

数年前に名古屋での四二年卒同窓会に参加した。互いに誰かな？と思いつながり話を進めていくうちに、突然高校時代の懐かしい顔が内側から躍り出てくる。「ちっとも変わってないね！」と言葉を交わしあう友は、確かにあの教室で共に学んだあの顔である。受験前の冬休みに登校して寒い教室で一緒に勉強した友、プールで泳いだ後の夏休みの昼下がり、勉強するはずが悩み相談になつて何時間も語り合ったことなどが思い出される。近況を語ればそれぞれの人生を歩んできた時の流れに、感慨深い。昔話に花が咲き、「還暦の時にはま

そんな思い出が詰まった故郷の岐阜を離れて博多の住人になつて久しい頃に、思いがけず岐阜という言葉が飛び込んできた。当時私は九州大学の心療内科で心理士として働いていた。心身医学の講座がある大学は少ないため（現在でも多くはないが：）九州以外からの心療内科への入局者は珍しくはなかったが、新しく入局したN先生が岐阜出身だということである。博多に来てから職場で岐阜出身の先生に出

会つたのは初めてであった。懐かしさに思わず出身高校を尋ねると、岐阜高校とのことである。何年卒かと互いに確認すると、なんと同じ「四二年卒」ということが判明した！奇遇に驚きながら話

会つたのは初めてであった。懐かしさに思わず出身高校を尋ねると、岐阜高校とのことである。何年卒かと互いに確認すると、なんと同じ「四二年卒」ということが判明した！奇遇に驚きながら話

会つたのは初めてであった。懐かしさに思わず出身高校を尋ねると、岐阜高校とのことである。何年卒かと互いに確認すると、なんと同じ「四二年卒」ということが判明した！奇遇に驚きながら話

「た会おうね！」を合図に同窓会
は終了した。

昨年、還暦を迎えて新たに生
まれ変わる年になった。私は臨
床を離れて、現在は若いゼミ生
と一緒に医療コミュニケーション
や医療従事者のストレスマネジ
メント関連の仕事や研究に従事し
ている。ゼミ生たちと一緒に過

ごすおかげか？不思議なこと
年をとった気がしない。マトリ
ョーシカ人形のように「今」の私
の内側のいくつかの人型を通り
抜けると、懐かしい高校生の私
がいる。世間知らずで向う見ず、
おっちょこちょいで走り回って
いた私がこの年になっても顔を
出す。メタボ対策に入会したス
ポーツジムでのダンスは若い人や
娘に交じって毎回汗びっしょり
である。元氣いっぱいインスト
ラクターのお嬢さん先生から「足
腰には一応気をつけて！ うまい
!! 大丈夫!! できる!!」と激
励されながら踊りまわり、おな
かの底から楽しく笑っていると
目ごころのストレスも疲れも身体
の重さも吹き飛んでしまう。ダン
ス教室の壁一面の大きな鏡を見
ないで踊りに没入すれば、何も
かも忘れて心は高校生である。
笑いと楽しさはどんな心理療法

のベースにもストレスマネジメント
にも必要だと実感する。ダンス
のおかげで体脂肪と体重は減り
始めてメタボ対策の成果は上が
りつつある。次には何を始めよ
うかとマトリョーシカ人形の中の
高校生の私は楽しみだ。

我が故郷岐阜と 原子力

井上 正
昭和42年卒



皆さん原子力という何を思
い浮かべますか？ 昨今話題とな
っているプルサーマルや高レベル
廃棄物処分場などでしょうか。
昔は原子の火として期待され、
昭和四五年には大阪万博で原
子力の電気で会場が輝いたのを
記憶されている方も多いと思
います。以来四〇年が経過して
その間原子力の利用は進みなが

ら、社会の見る目はその時々で
変遷してきました。いまは発電
設備容量の三〇％程度を背負い
ベース電源を担っていますが、
一九八六年にソ連（現ウクライ
ナ）でチェルノブイリ発電所の事
故が起きてから今世紀に入るま
で世界で新規に発電所が建設さ
れることはほとんどありません
でした。しかし今世紀に入ると
原油高騰に加えCO₂問題がクロ
ズアップされ、燃料費の影響が
少なくCO₂発生が極めて少ない原
子力が見直され（石炭火力に
比べCO₂発生量は四〇分の二）、今
後原子力発電の利用が発展途
上国を中心とされます。増加
することが予想されます。

このような原子力の潮流と時
を一にして、我が国の経済成長
も我々団塊の世代が四〇歳をす
ぎるまでほとんどまる勢いがな
い様相でしたが、一九九〇年のバ
ブル崩壊、さらには実体的な生
産を無視した虚構のマネーゲー
ムに踊り、我が国は一人当たり
のGDPが一九九〇年代には三
位であったものが二〇〇六年か
らは二〇位前後と低迷が続き、
世の中は閉塞感があふれるよう
な時代になってしまいました。
このような符合を見えますと、
物事には成長期、低迷期、変
革期（さらなる成長 or 衰退）が
あり、それがプラスのスパイラル
にできる物・活動だけが次の世
界へと展開できるのではないで
しょうか。さらなる成長を期す
るにはいかに低迷期を乗り切る
か（如何にエネルギーを蓄積するか）
にあるように思います。昨年我
が国でも政権が交代し、今まで
のシステムを変革して新しいレ
ジームを作ろうと各界あげて模
索が続いています。私が専門とし
ております原子力もその潮流を
大きくとらえると、次の技術革
新を受けた成長の入り口がプル
サーマルで始まるプルトリウム利
用であるように思います。これ
により化石燃料程度の原子力利
用期間が一〇〇年以上へと飛
躍的に伸び、我々社会に血液を
送り続けることができることは、
原子力関係者がいろいろな機会
に述べているとおりです。

我が国では青森県六ヶ所村の
再処理工場が間もなく稼働す
ることにより、商業規模でプル
トリウム利用の中核となる原子
燃料サイクルの輪が閉じられよ
うとしています。あとに続く
プルトリウムを燃焼させる高速炉
の時代の技術開発は、残念なが
ら二〇年続いた低迷期を我が国
では大きな成果もなく過ごして
きた影響が現れています。一九
八〇年から九〇年代にかけて他
の先端技術のように原子力開発
でも先頭を走っていたのですが、
今や軽水炉技術は別として、あ
との技術に関しては世界の先頭
からは後塵を拝する状況になっ
ています。従来から原子力先進
国であったフランスは言うにお
よばず、最近はいンドにも抜か
れようとしています（一部抜か
れています）。このように我が
国の原子力は新しいパラダイムを
提供できるかどうかという境界
にあるということを報告します。
このほか、原子力には放射性廃
棄物の処分や核物質の悪用など
忘れてはならない課題がありま
すがまたの機会とさせていただきます。
い。

ルが広がっているということになります。この場合、地産地消といつことにもなると思います。我々の誇りである長良川と金華山、濃尾平野など山紫水明の美しい岐阜がそのような人工物で満ちることになれば大きな問題になるに違いありません。ちなみに、スペイン アンダルシア地方のアルハンブラ宮殿近くのグラナダ市郊外に一〇万キロワットの太陽熱発電所が建設されましたがその太陽光パネルは幅五m、総延長二〇〇kmとのことです。

固いことばかり書きましたが最後に、私個人の紹介もさせていただきます。今趣味として、鉄道の旅、漁師（海釣り）、

テニスなど面白く続けております。なかでも私が自分の世界を満喫できるのは国内、海外の列車の旅です。昨年三月に廃止になった東海道線最後のブルトレイン「富士・はやぶさ」の寝台券をやってと入手し熊本まで乗車した時、途中岐阜に二・三時九分に停車したのですが、日頃帰郷する岐阜駅とはまた違う感覚を覚えました。皆さん、

子供のころ夜汽車の汽笛が遠くから聞こえ、なんとなく侘しさと遠い果ての国が重なり合った記憶はお持ちではないですか：（いまでは交通革新で遠い場所に対する距離感、隔絶感がなくなっているのが残念です）。もう一つの趣味として古代、中世ヨーロッパの歴史があります。人氣の高い塩野七生さん著の『ローマ人の物語』などに出てくる史跡などを巡りながら列車の旅をするのですが、その行程はすべて自分で設計して、その日の名所、旧跡訪問、列車、ホテルの予約と己でマネージすること

を無上の趣味としております。その土地の地理、歴史を思い浮かべながら車窓を眺めしばらく時間を費やすのに至福の喜びを感じます。同窓の士で、この方面への個人旅行をしたいのだが、スケジュール作りなど億劫でという方はいつでもご連絡ください。喜んでお手伝いさせていただきます。最後に、長良川の清流が岐阜並びにその畔の学び舎、岐阜高校の今後の繁栄を願って筆を置きます。



欧州最北端Narvikへ向かう列車（ストックホルム中央駅にて）

私の世界

岩村 春樹
昭和42年卒



私の世界はかなり狭い。まずひとつには小児科の開業医であり、自宅に併設のクリニックで診療をしているため通勤の必要がない。不覚にもアキレス腱を切って左

足をギプス固定したことがあり、その際には整形外科に通院する以外には六週間にわたって外出せずに過ごした。これを期に、一〇年以上足抜けができなかった医師会の雑務からも解放され、やれ嬉しやと喜んだのだが、外出の機会は激減した。現在は愛犬と毎日散歩にでかけるが、このわんこももうすぐ一二歳と老境に差し掛かっているせいか、

ようであったが、私は幸か不幸か真逆のほうに向かっている。もともと慎重な性格で、直ぐには人と打ち解けることが得手ではないのでこうなった訳だが、二〇年くらい前には母校名古屋大学小児科で小児血液の分野で、はかかなり活躍しており、これでも全国の先生方と広く交流があったのである。

はたまた生まれつき怠惰な性格が災いするのか町内一周がやっとなのである。また夜間のジョギングを週二・三回しているのだが、完全に息があがっているので他人と会話する余裕すらない。いたって外向的で友だちの多い細君に云わせれば、さみしい老後が待っているだけということなのだ、これはこれで特に淋しさ侘しさを毫も感じていないのである。

この小児血液の分野、とくに白血病の治療に興味を持った端緒は、岐阜高校を昭和二十七年に卒業された故箕島章先生との出会いであった。私が名古屋大学を卒業した当時、箕島先生は新設された愛知医大の小児科助教として赴任されたばかりであったが、ふとしたことからお互いが岐阜出身ということがわかり、そのまま何となくこのものの白血病の世界に入ってしまったのである。そのころ箕島先生は、小児リンパ性白血病の治療薬のひとつとして、

一昨年であったか文芸部出身者の集まりがあり、高校卒業以来はじめて同級の諸氏に再会することができたのだが、それぞれ社会的に活躍されており、いたって広い世界の中で楽しくお過ごしになっている様子であった。大概は歳を重ねるにつれ段々とお付き合いの輪が広がっていく

現在も使われているアスパラキナーゼという薬剤に関する研究に没頭されていたが、やや個人的な性格のためか文字通り孤軍奮闘の状態であった。私は約三カ月間にわたって箕島先生のもとで指導をしていただき、白血病のこどもたちの治療にも参加させ

ていただいた。また愛知医大には、当時としては画期的な無菌室・無菌ベッドも備わっていたが、実際に稼働させることが不可能で重症の細菌感染症で亡くなっていく子どもたちを救うことができず、チームで医療に当たる必要性を痛感したものである。

のちに名古屋大学で小児白血病の治療の一環として骨髄移植を始めるにあたって、チームの一員として大いに頼りになったのは、昭和四七年岐阜卒の堀部敬三君であった。わが国では骨髄移植は成人においてすら、まだ確立した治療となりにえていなかった三〇年前の時代であったが、そうした状況の中で文字通り手探りといった状態で、小児の骨髄移植を確立した治療法とするべく、二四時間ポケル（今の若い諸君は知らないだろう）に拘束されて頑張っていた。わがことながらあの時代は本当によくやっとならぬと褒めてやりたいが、それも堀部先生をはじめとする小児血液グループの一同が協力してくれたからである。いまや名古屋は白血病をはじめとする小児血液疾患の研究・治療に關して、本邦でもっとも先進的な地域となっている。

堀部先生は、現在は国立病院機構名古屋医療センターの臨床研究センター長の要職にあり、日本全国の小児白血病およびリンパ腫の子どもたちの治療研究の統括をする事務局の重責を担っている。岐阜出身者で名大小児科において色々とお世話になったほかの方々は、一年先輩の尾崎隆男先生（現江南厚生病院副院長・子ども医療センター長）と同級の山口英明先生（現公立陶生病院副院長）のおふたりである。尾崎先生は医局長（なんだか白い巨塔みたい）を務めていた頃に先輩として多くのアドバースを頂いた。また山口先生には結婚式の司会をしていただいたし、その話しやすい人柄に乗じて愚痴もいっぱい聞いてもらったものである。

こうして振り返ってみると、過去の折々に岐阜出身者の方々の良い出会いがあり、影響を受けたり助けていただいたりしている。もはや還暦を過ぎ、狭い世界のなかで日々を送っている私なのですが、これから何人の岐阜卒の人たちと巡り合うことができるのでしょうか。それを考えると、些か楽しみになりました。

ここに一枚の写真がある。新岐阜駅（現在の名鉄岐阜駅）前の歩道で砂遊びをしているわたしと友達のスナツだ。私たちの背後には昭和二五年当時の新岐阜駅前がはっきりと記録されている。

終戦の五年後、長良橋通りの歩道の整備工事が行われていた。工事用の砂は子供たちにとって格好の遊び道具。当時、わたしの家族は駅前の母の実家近くに住んでおり、新岐阜駅前広場や駅前商店街（新岐阜小路）、周辺の道路はわたしの行動半径だった。父はカメラがとても好きで、暇さえあれば、わたしや母、親戚の人たちを被写体に写



私もいた60年前の新岐阜駅前風景
大野 博良
昭和42年卒

真を撮っていた。

スナツ写真には当時の新岐阜駅前がそのままの姿で存在し、私たちが遊んでいる背後には岐阜乗合バスのバスセンターと岐阜商工奨励館が映し出されている。商工奨励館には当時、進駐軍のダンスホールがあり、灯ともしごろになると、そこに向かう着飾った女性たちの姿が見られたという。私たちが昭和二五年に本荘に家を買って引越すまでの二年間、新岐阜駅前の新岐阜小路の一隅に住んでおり、母はそこで小間物屋の店を開いていた。

二年前の平成二〇年、本荘の家で父母の遺品を整理していたら、階段下の小さな物置からネガ整理帳六冊が出てきた。このネガ整理帳には約三〇〇枚のネガが入っており、その一枚一枚に撮影年月と撮影対象・場所などのメモが記載されていた。ジャーナリストだった父は何でも記録することが癖だったようで、日常のス

ナツ写真ですら、きちんと整理保存していた。あとで岐阜新聞の専門家に見てもらったところ、ネガの保存状態が極めて良好で、戦後ほどない岐阜の貴重な記録写真ということだった。

残されていた写真は長男である私の成長の記録だが、ネガ写真には二〇代前半の母のほか、父、祖父母やおば、おじ、いとこが映っていた。特に母は若く、とてもきれいだった。大半は人物のスナツ写真だが、新岐阜駅前全景や長良橋通りの雪景色、新岐阜駅のプラットホームから



新岐阜駅前で砂遊びする筆者（左端：昭和25年）
大野さんの父上が遺された写真のネガ300枚は、岐阜市歴史博物館に預託されました

眺めた駅前商店街も含まれており、昭和二三年から二五年にかけての新岐阜駅前周辺が克明に記録されていた。

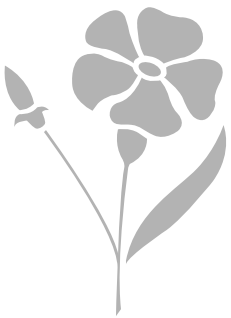
このころ日本は米軍の占領下に置かれ、駅前広場をかつ歩する米兵の姿も映し出されている。新岐阜駅前広場には英語の看板が据え付けられ、そこには「米軍第二四歩兵連隊第二四医療中隊」と記され、進駐軍の駐車スペースが設けられていた。また、新岐阜駅の駅長室も「ステーション・マスター」と英語で記されていた。この第二四歩兵連隊は昭和二五年、朝鮮戦争勃発とともに、岐阜の駐屯地から朝鮮半島に派遣された。

岐阜は終戦間際の昭和二〇年七月に大空襲を受け、柳ヶ瀬から新岐阜駅、国鉄岐阜駅にかけての広大な地域が焼失した。当時の新岐阜駅の駅舎は戦後再建されたもので、正面の建物こそ、木造二階建ての瀟洒な建物だが、プラットホームから見ると、改札口の建物など付属の建物は掘っ立て小屋同然の粗末なものだった。駅前広場に面する場所にあった病院も戦災に遭った当時のままに放置され、一部に戦争の傷跡が生々しく残っていた。

ところが、他方、戦後間もない時期なのに、スナップ写真に写っている人たちは皆、不思議なほど幸せそうな表情をしており、輝くような笑顔がとても印象的だ。戦後、「凱旋道路」が「平和通り」と改称されたように、平和な日々到来を心の底から喜んでいるようだ。人々の身なりは粗末で貧しく、長良橋通りには一台の乗用車も写っていないが、駅前には市電やボンネットバスが行き交い、大勢の人でにぎわいを見せている。駅前には平屋や二階建ての建物が並び、戦後の復興が着実に進んでいることをうかがわせている。

新岐阜駅前広場には私たちが家族が引越した後、昭和三二年にデパートやバスターミナルを併設した新駅舎が建てられたが、その駅舎もいつしか取り壊され、名鉄岐阜駅前の風景はすっかり変わってしまった。

〈在京(首都圏)岐阜高校同窓会理事〉



2009年、私の旅

小川眞里子
昭和42年卒

二〇〇九年一〇月半ばには私は韓国の天安市にある韓国独立記念館を訪れました。目的はまさにこの一件のためだけの旅でした。若いころと違って、仕事にでも関係しない限り、わざわざ外国に出向くことはほとんどしなくなり、西洋、とりわけイギリス一九世紀の科学史を専門とする私は、韓国にあまり縁がなく国際ワークシヨップで二度訪れたことがあるのみでした。

記念館の所在地がソウルではないので結局二泊三日の旅となり、仕事に関係しない旅として例外的なものでした。それなのに、どうしても日程をやりくりして出かけてみなければという思いに駆られていました。それは本当に偶然なことでも人に勧められた事からだったのですが。

名古屋とイギリスの往復にはいつもフルトハンザ航空を利用しますが、お盆の直前にフラנקフルトで乗り継いだ飛行機は満

席で、私は幸運なことにエコノミーからビジネスにアップグレードしてもらってちょっと良い気分でした。隣の席はドイツの会社勤務する日本人エンジニアで、お盆休みを利用して帰国するところでした。その晩は食事を楽しみ、自動車に関するおしゃべりをして過ぎました。翌朝目覚めたころにはもう食事が始まっていて、朝の挨拶もそこそこに再び隣のその方と話を始めたのですが、昨夜と違って話題がやや重いものとなりました。けっしていやな雰囲気ではないのですが、どこか生き方を問われているような気持ちになりました。

時期がお盆ということもあり、話は戦後処理についてドイツと日本の違いに及びました。ドイツの国歌は、終戦後まもなく覇権を正当化する一番と女性に関する表現に適切さを欠く二番を廃止し、高い理想を掲げた三番のみになったこと、またドイツの青年たちが祖国の過去の過ちをどれほどか深い自責の念とともに叩き込まれてきたことかを

伺うことになりました。世界に冠たる科学技術を誇るドイツの若者についてそのような話を聞くのは初めてのことでした。自信をもてぬままに過ごしてきた彼らに、それが戻ってきたのはサッカーのワールドカップの開催となり優勝してからなんだと。

私の仕事はドイツに関係する部分もあつて、ミュンヘンに滞在すればタツハウ強制収容所を訪れ、ベルリンならユダヤ博物館を訪れ、コール首相が建てた追



韓国独立記念館

悼所「ノイエ・ヴァッヘ」にも何
度も行きました。その度に戦争
の愚かさを深く胸に刻み、広島
や長崎についても人並み以上の想
いを寄せてきたつもりでした。

しかし、私は機中でその方と
話をするうちに、自分はドイツ
人が過ちを犯した場所を訪れて
いただけで、日本人が犯した過
ちについてはきわめて無知であっ
たことを思い知らされたのです。

広島、長崎は重大な場所ですが、
原爆については、日本はあくまで
も犠牲者の立場です。このとき
私は、日本人が加害者であった
場面から無意識に目を逸らして
きた自分を痛いほどに自覚しま
した。そして彼から、中国の南
京市とこの韓国天安市の記念館
は一度は訪れる価値ある場所と
して教えられました。関西国際
空港への便が満席のため名古屋
に回ったというその方に再びお
目にかかることはないでしょうが、
それ以来私は居ても立っても居
られない気持ちで過ごし、とう
とう一〇月に背中を押されるよ
うに、秋の一日を独立記念館で
過ごすことにしたのです。

それは重い経験でした。記念
館は七つもあり、昼食をはさん
で休みなく回っても最後は駆け

足にならざるをえない展示の多
さでした。折しも伊藤博文を暗
殺した安重根の生誕一〇〇年と
いうことで、広場にはプラット
ホームで暗殺された伊藤ら一行
を模したセットが組まれ、子ど
もたちは伊藤の頭を指でつきな
がら写真を取ってもらっていま
した。

KTX(韓国の新幹線)の時刻
が迫り、タクシーを呼んでもら
って待っている間のことでした。
向こうから白人の男性と韓国人
らしき二人連れが、私が記念に
買い求めたいと思っていたトート
バッグを肩から下げて歩いて来た
ので、どこで買えるのか聞いてみ
ました。バッグはサイクリング参
加者の記念品で非売品でした。

逆に韓国人らしき人は、私にど
こから来たのかと尋ねるので、
項垂れて日本から来た事を伝え、
お詫びの気持ちでいっばいだと伝
えました。胸がつかえて消え入
りそうな私を白人男性は、取
りなすように「これは僕から君へ
のプレゼントだよ」と言って、そ
のトートバッグを私に差し出し
てくれたのです。本当に言葉も
ありませんでした。ありがたく
頂いてタクシーに乗り、駅に戻
ったのでした。

トートバッグには安重根の手形
がついています。彼の右手の薬指
は、血文字を書くために切り落
としていたので、小指と同じ長
さになっているのです。書齋にぶ
ら下げたバッグはタクシーに乗り
込むまでの短い時間のやり取り
と一日の重い体験を鮮やかに思
い起こさせてくれます。被害者
の地に向いて初めて知りうるこ
とが山とあることを学んだ旅で
した。そして二〇〇九年のかけ
がえのない出会いを、しみじみと
想うのです。



生き二百年曆
片山 良広
昭和42年卒

岐高時代から、私には三つの
特技がありました。一つめは、
アルファベットを逆順に「ゼツ
ト、ワイ、エックス……シー、

ビー、エイ」と所要四秒ほどで
暗唱すること。二つめは、 $\sqrt{2}$ を
「ヒトヨヒトヨニヒトミゴロ」
の先、小数点以下四一桁まで暗
記していること。なお、これら
は努力しさえすれば、だれでも
身に付けることができます。

そして、三つめが秘伝ウォー
キング・カレンダーとでもいいま
しょうか、「〇年〇月〇日は何
曜日か？」を、その場で何も見
ないで言い当てるというもの。こ
れは努力というよりは多少の技
術が必要ですし、役に立つこと
もありそうなので、この際、岐
高同窓会の皆さんには、特別に
無料でご披露したいと思います。
対象期間は一九〇〇年〜二〇
九九年の二〇〇年間です(現
行の太陽暦でない時代には無縁
ですし、二二世紀のことを今か
ら考えても仕方がないので、当
面はこれで十分かと思えます)。

さて、その暗算方法とはいえ
ば、別掲の「あの日は何曜日?」
のとおり。当然のことながら手
品と同じで、そんなに複雑な仕
掛けがあるはずはありません。
かつては有していた豆單暗記力
をもってすれば、経年変化を考
慮しても実に造作ないことです。
あとはトレーニングのみ。

元号は、すぐに西暦に直せる
ようにすること。月ナンバーが
ちよつと面倒ですが、「左手」
をイメージしてすぐに出てくる
ようにすること。これが最大の
秘訣です(閏年の一月・二月は
要注意)。そして、それぞれの
数はその都度7で割って、余り
だけを指折りで数えていくこと。
これでスピードアップが図れます。

一度、お試しく下さい。パソ
コンで曜日を確認したお孫さん
から「すごい。教えて教えて」
と尊敬のまなざしでせがまれる
こと、請け合いです。もっとも、
例えばビートルズが来日した日
が何曜日であっても「例1」、あ
るいは小西真奈美さんが生まれ
た日が何曜日であっても「例2」、
「それがどうした」と言われてし
まえば、それだけ。これまでの
実践経験で、そんなこともまま
ありました。

でも、めげる必要はありません。
今はやりの脳の活性化には、
ちゃんと役立っていると思いま
すから。

最後に、職場からのPRです。
裁判員制度が始まって一年がた
ちました。すでに裁判員を経験
された方もあるかもしれませんが
いろいろご負担をおかけします

あの日は何曜日?

〈1900年代〉

年月日からA～Dの4つの数を取り出し、その合計数を7で割って「余り」を出す。

- A 年：西暦の下2桁
- B : その4分の1(端数切り捨て)
- C 月：月ナンバー
- D 日：日の数そのまま (A+B+C+D)÷7 = ○余り○

計算式はこれだけ。出てきた余り○の数から、曜日が導かれる。

- 1：日 2：月 3：火 4：水
- 5：木 6：金 0：土

Aで、年が元号で示されたときは、次のようにして西暦に換算する。

- 明治：-33 大正：+11
- 昭和：+25 平成：+88 or -12

Cの月ナンバーは、次のとおり。これだけは、理屈ぬきで記憶する必要がある。

- 1月：①(閏年は②) 2月：④(閏年は③) 3月：④
- 4月：② 5月：② 6月：⑤ 7月：② 8月：③
- 9月：⑥ 10月：① 11月：④ 12月：⑥

こんなもん覚えられるわけない、と怒らない。ちゃんと秘訣がある。

図のように、「左手」の人差指からタテに節ごとに①～⑥の番号をつける。これが月ナンバー。そこに対応する月を割り付けると、ほぼ規則的に並ぶので覚えやすい。

人差指の頭から、1列目をヨコに1月→2月→3月→4月と進む。次に2列目をヨコに5月→6月と進み、その右はないので、近くの斜め右上へ進み、7月。そして3列目をヨコに8月→9月と進むと、行き止まり。ではじめに戻り、もう一度1列目をヨコに10月→11月と進み、最後だけストーンと下へ落ちて、↓12月。

この左手を脳裏に刻めば、もう怖いものなし(ただし、閏年の1月・2月は-1)。

〔例1〕昭和41年6月29日

- A：昭和41年→西暦に換算し66
 - B：66÷4→16
 - C：6月→⑤
 - D：29日→29
- (66+16+5+29)÷7=16余り4
だから、水曜日

しかし、これでは暗算はややこしい。要は余りが必要なんだから、その都度7で割って余りだけを数えていくのが賢い。

〔例2〕1978年10月27日

- A：78→7で割ると余り1
- B：19→余り5→Aに足して6
- C：①→足して7→余り0
- D：27→余り6→金曜日

〈2000年代〉

計算式は1900年代と同じ。ただ、出てきた余りの数から「マイナス1」とする。

〔例3〕平成22年6月20日

- A：平成22年→西暦で10→余り3
- B：2→Aに足して5
- C：⑤→足して10→余り3
- D：20→足して23→余り2だが
-1で余り1→きょうは日曜日

が、主権者に認められたせっかくのチャンスです。低い確率です。運よく抽選に当たったときは、進んで参加し、次の世代に誇れるものとなるよう育てていただきたいと思います。

静岡家裁所長



齢六一歳と六カ月と二四日(一月三一日現在)、それに母親の胎内での期間を入れれば六二歳と二カ月一四日の命を生きている。

大概の事には驚かず、ドキドキキやときめきを感じることは、自分の健康に関して不安を感じる時ぐらいいったつままらぬ老人になりかけている己に驚いたりする。とは言え、昨年夏の選挙で政権交代した時は、久しぶりで興奮した。二〇歳以降何十回の選挙にほとんど革新系に投票してきた人間として「革命」が起きた感じであった。ところがそれから半年足らずで、なんと幻滅するような事件や実態



なにを、いままさら

金川 昇平

昭和42年卒

が続く。一番の幻滅は、政権が交代しても前政権の『負債』が簡単になくならない以上新政策を実行しようにも予算措置がうまくできない。兎に角国債の元利払いだけで二〇兆円余あり、一方税収は三八兆しかないという実態のおぞましき。いやはや何とも恐ろしいことで、よくぞここまで借金してくれたわい、と不思議に感じ入ったりする。

翻って自分の人生と借金のことを思い起こせば、よくまあ借金し、返してきたなあと思うばかり。本当に長い借金生活だった。二九歳のときに愛知県の新興住宅都市高蔵寺ニュータウンで連棟式の戸建て住宅を借金で、つまり住宅ローンを借りて購入し、それから五年毎に瀬戸の田舎町の戸建て、名古屋の現住所に中古住宅購入、一〇年後に築三五年の木造住宅を、阪神・淡路大震災の惨事を見て、建て替えを決意。その間、三人の子供を”お江戸”の私立大学に通わせるなど、借金の山また山の三〇年であったことは確か。こんなに真面目に返してきたのに、一体国の役人はいかなる感覚で借金を計画し、政治家は借金の取り分をふんだくりに行っていたとい

うのか。

モラル破壊、モラル不感症、借金誇示症候群ともいふべき、いわば狂気の連続。また、親方日の丸体質は、なにも政治家だけではなく、我々庶民も一緒に、国が何とかしてくれる、時代がそのうち変わるわいと知らんぷり見ざる・聞かざる・言わざるを決め込み、本当に政治を他人事の如く無関心、無判断の状態で続いた。

よく考えてみると、私の年収は有難いことに九〇年代中ごろまでは上がっていき、その後横ばいから低下傾向に転じている。その時代変化と個人の借金生活のしんどさが比較的うまくマツチングしていて、大借金を返せたのであるから「運」が良かったといふべきである。つまり結構長い間インフレが続き、この一〇年余はデフレ傾向が定着したといふことだ。最近の若い人たちの元気のなさはデフレが影響している。右肩上がりとは簡単にいえば「インフレ」経済である。インフレになれば借金も軽くなり、未来を夢見て借金もできる。このデフレはいつまで続くのか、日本の物価が高かったのは確かだが、かなり低下しただろう。

不動産はバブル以降大幅低下したが、給与がもともと低く、かつ上がっていないから親の助けでもない限り、家をもつのも夢のまた夢という若い人が多い。

こんな日本には見切りをつけて、暮らしやすい海外へでも出たほうがという若者や年金生活者も増えてくるだろう。

「こんな日本にしてしまつて、我々「団塊」の世代は老後をゆつたりと全うしてもいいものだろうか。否、否、否である。「なにを、いまさら」と言われようが、いまこそ孫・子のために、未来の社会のために、地球温暖化も大事だが、社会の安定感と元氣を取り戻すために、このグローバル経済の闇深く降りて、再活性化の道を探していく試みを大切にすべきだと思ふのだが。特に、若い人たちに自分の人生の主人公として、社会に対して「異議申し立て」をし、人としての幸福追求の権利があることを、ちゃんと教えなければならぬのではないか。今の若い人は、優しい性格の人が多い。そのことは成熟化社会としてある種の豊かさの繁榮を感じるし、民主主義自体の成長を感じるが、「闘うこと」「自分の正当な要求を訴え

ること」について、あまりにも訓練されていない。闘う民主主義を知らない、教えられていないのである。

団塊のわれら世代の皆さん、これからのまだ少し元気な一〇年を、若い人と社会のために、最後のエネルギーの一部を注ぐべきだと思ふのですが、皆さん如何。

東京テレビストリー 「モーターランド2」泣き笑い 面白うてやがて 哀しきモーターランド

神谷 龍彦
昭和42年卒



「今回だけ、オレの代わりに、お前やってくれよ」

きっかけは担当役員のこの言葉だった。初回はたしかポルシェだったと思う。初めてにして

は自分でもうまくできた。周りの評価も悪くなかった。そんなところに「けっこううまいじゃん。これからも頼む」と、くだんの役員。ま、いいか——元来おつちよこちよいのほくは安易に引き受けた。テレビにも少し興味があつたし……。しかし、そのあとは後悔の連続だった。「次はやらない！」と何度思ったことか。TV番組「モーターランド2」との最初の関わりはこんな具合だった。“2”というからには“1”がある（実際には1は付かないけれど）。その担当が前述の役員だった。当時、ほくはモーターマガジンという自動車専門誌の編集長をやっており、TVの方はモーターランドから同2への端境期だった。日曜日の深夜放映の三〇分番組で、キーステーションは、東京ではテレビ東京、中部地方ではテレビ愛知。声高に言うほどメジャーな番組ではないけど、いわゆるモータージャーナリストを相手にキャストを務めるといのがほくの役どころ。内容は新車の試乗紹介が中心で、そのほかに内外のモーターショーや年に一度のイヤーカー選びなどもやった。オリエント急行がらみの取材やエジプトでの試乗と

かも。バブル崩壊後も自動車業界はまだパワーに溢れていた。ロケ地に行けばクルマは用意されているし、一応台本はあるけど自分の好きなように現場で変えても文句は言われない。出演者はまさに王様である。本業の雑誌作りではこうはゆかない。筆者はもちろん、時にはスタッフのご機嫌も取らなきゃならないし、何かと鬱陶しい上司もいる。その点、TVのロケは解放区みたいなものだった。もつとも、良いことづくめではない。AD(アシスタント・ディレクター)は奴隷みたいな使われ方をしていた。そんな苦労を経てディレクターになればいけど、なれなかつたら悲しいなあ。何より、ADが怒鳴られているのって気分がいいものじゃない。

それはともかく、なぜイヤだったのか？ その理由はとつても単純。自分が期待していたほどうまくできなかったからだ。第一回はよかった。後で考えてみれば、あのときは無欲だった。どうせ一回こっきりの仕事だし、しかも代役なのだからソコソコなせばいいや、としか思っていなかった。ところが、準レギュラーとなった途端に欲が出た。いかに的確に伝えられるかという、目に見えないプレッシャーにもさいなまれた。

もつとも気を使わされたのは、アクセント(なまり)だ。ほくはどちらかと言うと関東系の静岡と、逆に関西系に近い岐阜を何度か往復して育つたから、自身自身のアクセントが正しいかどうか、いや正確に言えば標準語に沿っているかどうか元々よく分らない。でも、手品師のミスター・マリックの言葉がびんびんの岐卓なまりであることくらいは分かる。

こういう細かいことはフツーは誰も指摘してくれない。別に間違いないから。でも、ウチの場合はカミさんが半分東京だったから、やたらうるさかつた。たとえば“かなり”は“り”にアクセントを置いて発音する。と、すかさず妻からチェックが入る。“か”を強く発音するべきだと。まあね、TVではその方がいいか、と次からは妥協する。そのたびにどーんと疲れる。自分が日常使っていた言葉が必ずしも標準語じゃなかったと思ひ知らされるのは心地いいものではない。そんな単語が想像したよりはるかに多かつた。

ほかに、滑舌の悪さや早口、トチリ。これらも最後まで直らなかつたなあ。もう一つ思い知らされたのは、雑誌の原稿とTVのトークでは詰め込める情報の量が全然違うこと。最初はアレもコレもという雑誌感覚だったから、編集段階でトークが随分カットされた。他人の原稿は躊躇せずにスパッと切るくせに自分のトークは切られたくないという身勝手さ。自分に編集権のない悲しさ。

もつとも、二、三年たったころ、ぼくはあることにハタと気付いた。要するに、ぼくはプロじゃないのだ。うまくできなくて当然なのだ、と。それから随分ラクになった。肩のチカラが抜けたというのかな。考えてみれば、自動車業界がもつとも元氣だった時代に、雑誌にもTVにもめぐりあえた。海外メーカーの社長を歴任した中島義和くんに会ったのもそのころだ。これからどういう時代になるか予想はむずかしいが、おそらくあんな時代の再来はないだろう。幸運だったと思う。

約一〇年間続いたモーターランド2は一〇年ほど前に終わったけど、今でも初めて会う自動車

業界の人に「モーターランド、見てましたよ」と言われることがたまにある。そんなときは「いやあ、あんなの昔の話ですよ」と答えるけど、心の奥に小さな灯がぼつと一瞬ともる。

岐高時代の思い出

栗本 幸子

昭和42年卒



私は、あの東京オリンピックが開催された年、昭和三十九年に岐高に入学しました。

そして大学卒業後、昭和四十六年に愛知県庁に就職し、昨年三月、三八年間の公務員生活に終止符をうち定年退職して一年が経とうとしています。

入学から四六年、卒業してからも四三年の歳月が流れました。

高校生活三年間を振り返っ

てみると楽しかったこと、つらかったこと、いろいろあったはずですが、今でも強烈な印象として残っているのは、入学してすぐの頃のことです。

そのひとつは、英語の担任、愛称「マメちゃん」こと殿岡辰雄先生です。体は小さいものの古武士の雰囲気を漂わせ、授業の始まりは、入室されるまで目を瞑って待つよう指示され、授業も大変厳しいものがありました。当初は怖いという印象で緊張していました。またよく立たされましたが、女子には「○子：泣かなくていい（泣いていいのにもう座ってよろしい）」などと言われるのを聞いて（私も言われました）、先生は女子に甘いということがわかり少し余裕がでてきました。私は当時美術を選

びませんでした。誰かが、先生は詩人だからと言っていました。卒業後、先生が詩の分野で賞をもらわれたことを知り、どこかは記憶にないのですが先生を尋ねていき、自筆で詩が書かれた色紙をいただきました。裏書に「為幸子様 1970.7.12」と書いてあります。色紙は、今も大事に取っており、これを見ると先生のお顔が浮かんできます。しかし、そのとき以来お会いしたことはなく、風の便りで亡くなられたことを知りました。私たちが教えを受けた最後の生徒であったのではないのでしょうか。

習が終わった後は、校庭につながる長良川の堤防で「アイン・ツバイ・ドライ」の掛け声のもと応援の手拍子を習いました。こうしたこともやはり旧制中学からの長い伝統の名残であったのでしよう。

今振り返ってみると殿岡先生に教えをうけたことは本当に幸運なことであつたし、応援歌等の練習も貴重な体験であつたと思います。当時の大縄場の校舎や校庭が今どのように変わったかは存じませんが、今は無くなつてしまったものの通学に利用したあのなつかしい市電とともに私の脳裡からはいつまでも消えることはないでしょう。

還暦新人

小島 哲朗

昭和42年卒

私、あの東京オリンピックが開催された年、昭和三十九年に岐高に入学しました。そして大学卒業後、昭和四十六年に愛知県庁に就職し、昨年三月、三八年間の公務員生活に終止符をうち定年退職して一年が経とうとしています。入学から四六年、卒業してからも四三年の歳月が流れました。高校生活三年間を振り返ってみると楽しかったこと、つらかったこと、いろいろあったはずですが、今でも強烈な印象として残っているのは、入学してすぐの頃のことです。そのひとつは、英語の担任、愛称「マメちゃん」こと殿岡辰雄先生です。体は小さいものの古武士の雰囲気を漂わせ、授業の始まりは、入室されるまで目を瞑って待つよう指示され、授業も大変厳しいものがありました。当初は怖いという印象で緊張していました。またよく立たされましたが、女子には「○子：泣かなくていい（泣いていいのにもう座ってよろしい）」などと言われるのを聞いて（私も言われました）、先生は女子に甘いということがわかり少し余裕がでてきました。私は当時美術を選

本年還暦をむかえ、仕事の方も定年退職しほっとしていたところへ年長の友人が現れた。友人から「これからは時間の使い方が大切だ。狂俳でもやらなにか」と誘いを受けた。



狂俳？俳句とも川柳とも違うようだ。友人によれば、美濃地方は昔から狂俳が盛んな地域であり、明治大正時代には人が集まれば狂俳が始まったという。我々の世代が丁度カラオケや麻雀大会に興じていたのと同じである。座が出来ると「お題」が示され、作句に入る。例えば「大穴」という題に対し大穴を使わずそれを連想させる句を、七五調又は五七調でつくるのである。「走らぬ馬がよく走る」とか。句がうけて座に笑いが生ずれば成功である。最近では健康的な笑いが少ない社会にあつて楽しい文化である。

誘われるままに、あるサークルの会員となる。しかし、過去には盛んであつた狂俳も現在では斜陽気味で、必然会員も減少高齢化している。年配者の仲間入りした小生、ここでは新人なのである。例会のたびに狂俳の文学性・娯楽性に惹かれていくが、

何よりも快いのは、つい先頃までベテランだ先輩だと煙たがられていた人間が、再び新人としてデビューできることである。しかし、新人の辛さもある。例会には自分なりに推敲した作品を投句するが、発表された我句は少々違っている。「小鳥さんの句、言葉を入替えてみました」と選者が平然とおっしゃる。(いくら下手な句でも勝手に添削されては)と心の中ではつぶやいても、「なるほど、その方が句が活きてきます。大変勉強になります」と言わざるを得ない雰囲気。きつと、やっと入会した奇特(?)な新人を、早く一人前にしてやろうという選者の親心である。

長くやれば、小生もいずれ会の運営や選句のお手伝いをすることになるかもしれない。いや、きつとその前に年々減っていく会員を補充するため、会員募集をしなければならぬだろう。勧誘の殺し文句は「金がかららず、ボケ防止」である。学生の頃、入学の季節になると各サークルが必死に新入生を勧誘する姿が思い出されてくる。四〇年も前の光景である。そして、今又、還暦新人が一步を踏み出したのである。

六年前、三三年間勤めていた外資系コンピュータ会社を退職し、岐阜に戻り公務員に天上がりしました。そこから第二の人生です。前の会社ではほぼ最年長者でしたが、岐阜に来たら周りには人生の先輩方が大勢いらっしゃいます。いきなり若造になつてしまいました。なぜか一〇年ほど若返つた感じでした。岐阜高校の素晴らしい人的ネットワークにも助けられながら、四年強勤務し、そして一昨年フルタイム勤務をやめて晴れてパートタイマーに。年金生活者でかつ個人事業主、第三の人生の始まりです。責任も権限もなく、経験者という事で口だけ出し、言いたい事をいい、ボランティアと趣味に精を出すという、一見夢のような生活です。

最近時々、日本の社会は我々団塊の世代が中心で主役ではないかという場面に出合い、勝手な思い込みと期待も込めて綴ってみました。

まず趣味の話です。トレッキング(山歩き)が好きで、岐阜の低山へ良く行きますが、山は中高齢者で溢れかえっています。夫婦どちらかが登山が好きで明らかに無理やり連れ出されているような二人づれ、この山の住人だ！というような偉そうな風貌で歩いている単独登山者、ハイ(昔流行つた合同ハイキング)気分の集団、修験者のように黙々と歩くハイカー、飲み会の延長のようなグループ、いろいろです。時間はあまる、金は(あまり)かからない、健康の証拠である、何も考えなくて良い、ストレスの発散になる、ということ、本当に大勢の中高齢者が山歩きを楽しんでいるようです。昨年福井県境の夜叉ヶ池に登りました。徒歩往復三時間程度の辺鄙なところなのですが、駐車場は一〇〇台近い車でごつたがえし、大阪からの観光バスもきていました。池の周りには中高年で溢れ、団塊の世代と思われる一〇〇〜二〇〇人の女性グループに何組も会いました。夜叉ヶ池保存会らしき腕章をつけた同世代のお兄さんが、これダメ、あれダメとやたら元気に怒鳴り散らしていました。山は明らかに団塊の世代(および先輩)が占領しています。

次に仕事の話です。これだけ不況になると、企業にとって正社員を長期に雇うことは難しくなり且つ、新人を研修する余裕は無くなります。必要な時だけ経験者を安く雇いたい、というニーズが非常に高く、団塊の世代がまさにこの条件にピッタリです。子育ても終わり、住宅ローンの支払いも終了し、頭の回転はチョット鈍ってきているが経験豊富でまだまだ働ける。大学の先生(客員教授、非常勤講師など)や政府の緊急雇用対策

団塊の世代、只今絶好調！か？

後藤 三郎
昭和42年卒



池ヶ叉夜

と歩くハイカー、飲み会の延長のようなグループ、いろいろです。時間はあまる、金は(あまり)かからない、健康の証拠である、何も

の雇用相談員もまさにこの世代にピッタリの職種ではないでしょうか。まだまだ主役。

最後にボランティアの話です。ボランティアといえば、災害、育児、清掃、福祉などのボランティアが思い浮かびますが、何と云ってもこれからは地域貢献ボランティアか。団塊の世代は、見た目元気で時間があり、日本の高度成長を支えてきたという変な自負もある。今こそ地域に貢献する時だ、家族の崩壊を地域で救おう、七〇年安保の世代だ、などと意気込んでいる人も少なくないようです。「ボランティアも団塊の世代が主役！」かな？

現実には、体力・気力・知力が衰えガタがきて「生きていくだけでしんどい」との思いが正直なところ。しかし敢えて叫び続けたい。気分だけでもいい、カラ元気でもいい、「団塊の世代、ただいま絶好調！」



楽器好き

篠田 陽子

(旧姓・沢村)
昭和42年卒



入学時、美術・音楽・書道のうち、美術を選びました。今となっては、音楽生まれの楽器好きの自分を納得させての寂しい選択だったのです。音楽

を選択していれば、もっと早く憧れの楽器に近づけたかもしれません。(あるいは、さっさと悟って、大いなる無駄遣いをせず

に済んだかもしれません) 楽器を手にした、手元に置いて磨いたり眺めたり、時に妙な素敵なことだろうと、ズーっと思っていました。社会人になって、職場に楽器店の出張販売があり、そこでやっと手にしたのが、フルートです。当時はラン

バルの黄金のフルートが話題となっていて、何となく惹かれたのだと思います。先生について一生懸命練習するのですが、唇の形状のせいかなかなか柔らかい音が出ません。それでもパワーと感情移入だけでまさに吹きまくっていました。習い事にはつきものの発表会があつて、人前で演奏することになり、結果は悲惨の一言。途中から緊張のあまり唇がこわばって、全く音が出なくなりました。ピアノの独奏になりました。「なき王女の

パヴァーヌ」を聴くと今でも曲ゆえではなく、涙が出ます。それ以来ケースに収まったままのフルートを久しぶりに見たら、錆が出ていました。

シヨックから立ち直り、今度は和楽器に鞍替えです。近所に青森出身の女将が居る小料理屋がありました。そこで、三味線を教えているのを伝え聞き早速弟子入りです。初めは、師匠に三味線を貸していただき、おだてられながらペンペンとやっておりましたが、当然、自分の楽器が欲しくなり、奨められるままに買いました。本当は、そのころから世間で大流行の津軽三味線が欲しかったのですが、た

き六年とか言われて、まずは中棹ということになったのです。暫くは楽しい稽古が続き、ひよっとしたら退職後、三味線抱えてボランティアなど夢を描いていたら、師匠が亡くなってしまわれました。

そして、今は津軽三味線の教室を職場近くに見つけ、ペンペンとやっています。念願の津軽三味線もボーナスはたいて手に入れました。綺麗な物です。お約束の発表会も今度は大丈夫。なにせ三〇人のなかの一人です。音が出ないことはありませんし、違う音が出てても耳だたない？でしょうから。とにかく楽器は楽しいし、美しい。次はなにに挑戦しましょうか。

ちなみに子どもは、高校で、音楽を選んだものの、初めての授業で多くの同級生がピアノを弾き、中にはappassionatoをサラリと弾いたツワモノもいてシヨックを受けたとききます。「彼は縦笛を吹いたとか。」悔しさからか、バンドを結成。「フセインズ」・「ドイモイ」などと妙な名前前で学園祭ではけっこう派手に活動したらしい。社会人になってもサラリーマンの傍らバンド活動に励み、野外音楽祭に

も出演、CDも出してしまいました。もちろん部屋にはギターが五、六本大事そうに立て掛けてあり、給料もボーナスもつぎ込んでいる様子。楽器好きだけで留まってくればいいのですが、煽られてプロデビューを言い出さないかと気を揉むこのころです。

名古屋市高齢者療養サーピス
事業団理事長

『若菜』のすゝめ

杉戸 千洋

(旧姓・嶋)
昭和42年卒



去る平成二〇年(二〇〇八年)は『源氏物語』千年紀。もちろん『源氏物語』が書かれた年次の詳細は不明ですし、五十四帖に及ぶこの大作がはたして『桐壺』の巻から書き始められたのか、『若紫』の巻からだろう、いや、近江石山寺で構想を練って

いた紫式部が、折から琵琶湖に映る中秋の名月を眺めてへ今宵は十五夜なりけり、須磨にはいとど心尽くしの秋風が〜と『須磨』の巻から書き始めたとする説などもあり、そもそも作者は紫式部なのかも含め、いろいろわからぬ点も多い物語ではありませんが、一〇〇〇年を経てもなお現代への示唆に富む物語です。

その『源氏物語』というところ、光源氏が女漁りをしてまったくしからん、父の皇妃と密通するとは不敬の極みなどの非難から、主人公は光源氏かもしれないが、次々登場する女性達が魅力的で面白い、権力争いもすごいなど、種々の切り口で読むことのできる物語です。中学高校の、ちんぷん漢文・こてん古典?の授業では、『夕顔』や『若紫』の巻がよく取り上げられるせい、『源氏物語』の中で好きな女性は何の間に、特に男性では、夕顔や紫上の名を挙げるものが多く、生霊になった六条御息所が妖しい魅力を放つたりします。薫が、大君や浮舟などの魅力的な女性を前にうじうじするから? 『宇治十帖』は、現代の青年群像にも通ずる興味深い巻々です。

ところで、この千年紀にちなみ、

還暦を控え、また迎えた方々に、あらためて人生を考えるヒントを与えてくれる巻として、『若菜』(第三十四巻)以降の巻はいかがでしようか。偉大な主人公の終焉に向けて、彼と深くかわつた人々が再登場し、それぞれの役割を果たしながら去ってゆく巻々です。

四〇代(今でいえば五〇代)になった光源氏と紫上はこの上ない栄華を得、六条院に暮らしています。そんな折、光源氏は思いがけぬ成行きで、永遠の恋人藤壺の血を引く女三宮を正妻としますが、その期待は見事裏切られ、やはり紫上こそわが伴侶との思いを強くします。一方、紫上自身も静かに我身を振り返ります。

北山での垣間見のあと、まだ幼い紫上を手許に引き取り、理想とも言えるまでに育て上げ、お互いに理解しあえていると思ってきた紫上に、「女三宮のことで上を大切にしてきたから、あなたは何の物思いもないでしょう」と呑気に言う光源氏。それに對し、(姫宮の御ことのちは何ごととも過ぎぬるかたのやうにはあらず、すこし隔つる心添ひ

て、見知らぬやうにて/心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」と、心中に生じた埋め様のない隔てやこの上ない嘆きをさりげなく隠して微笑む紫上。女三宮降嫁がどれほど深い傷を紫上に与えたかがわかります。後見もなく、子も持てず、ただ光源氏の愛情だけが結婚生活の支えでしたが、若き姫宮に徐々に思いを深めていく光源氏の愛情はもう信じられない、いつそ出家を願ひ出ても、孤独を恐れる光源氏の身勝手からそれも許されません。現世での愛も信じられぬ、出家もままならぬ、紫上の選択はすべて光源氏により否定されてしまします。そして当の本人は、「貴女は私がいるから幸せな人生でしたでしょう」と言うのです。紫上の絶望感はいかほどであったでしょう。この二人の間の断絶、これが苦楽をとものに数十年を過ごしてきた夫婦の終着点です。紫上が病に陥るのもむべなるかな、終に生涯を終え、追慕の涙に明け暮れる光源氏の夢にさえ紫上は現れることなく、ただ日々が過ぎていくのです。

呑気な戯言を言う夫と、現

代で言えば熟年離婚?の出家を願ひ出る妻。それも自分なきあとの夫の心情まで思いやる、言わば子を思う母のような一面すら見せています。夫の方は、妻はあくまで自分の庇護下にあると思ひ込んでいます。長年一緒に暮した二人の筈ですのに気持ちばかりあいません。「えっ、うちらみたい」と胸に手が当たると、

『若菜』?という方もありましよう。けれども、物語でも小説でも、いつも冒頭から読まなければいけないことではありません。そもそも冒頭から順序立てて書かれてあるとも限りません。その時の自分・興味に応じて好きな巻から頁を開けてみてはいかがでしょう。『源氏物語』では、どの巻を開けても、多種多様ないろいろな女性達・男性陣に出会えます。

なるほど『源氏物語』の原文はやはりむづかしいかも。けれども有難いことに現代はたくさん

和紀さんの『あさきゆめみし』、これは漫画とあなごるなかれ、すぐれもの!! 私は寂聴訳は敬してゝですが、それでも構いません、一度手に取ってみませんか。『源氏物語』の彼ら彼女らは、たまたま一〇〇〇年前にも生きていた私達、その今を精一杯生きていた私達でもあったと思っています。

『源氏物語千年紀』:『紫式部日記』の寛弘五年(一〇〇八年)十一月一日の記事に、藤原道長待望の男児外孫(後の後一条天皇)が誕生し、五十日の祝宴の折に、宮廷随一の貴公子藤原公任が、中宮彰子の女房紫式部に「このわりにわかむらさきや候ふ」と呼び掛けたとあることにちなんでのことです。これが『源氏物語』に関する現存最古の資料で、この時点ですでに『源氏物語』が書かれ、宮中に広まっていた証として、その一〇〇〇年後に『源氏物語』千年紀を謳い、十一月一日が、今上天皇皇后両陛下ご臨席のもとに「古典の日」に制定されました。

た。



コミュニティと 共同体

住 明正
昭和42年卒



最近、サステイナビリティに関する仕事を行っている。サステイナビリティとは、持続可能性と訳されているが、数多くの定義があり、それぞれの考えで仕事を行っている。筆者は、できる限り多くの人が幸せに暮らせるように二一世紀の社会を設計し、実現することと想っている。具体的には、地球温暖化対策としての、低炭素社会、大量生産・大量消費・大量廃棄の二〇世紀型パラダイムに代わる循環型社会、そして、生物多様性を尊重した自然調和社会の三社会統合モデルを提唱している。

歴史的に見ても、人類は、自

然環境の脅威の中で生きていた

と言っていた。気候の変動に伴

う飢餓や疫病、戦争など常に

災難が襲ってきていたのである。

したがって、人類が持った知恵

とは、自然環境・社会環境の変

動を想定し、自分の身の丈を考

慮して、欲望を抑えて生きてい

く、ということであった。つまり、

「分をわきまえて」ということ

である。しかし、このような状況

に我慢が出来なかつたのも人類

である。知恵を使ってこのよう

な状況を突破しようとしたのが、

産業革命以降の科学・技術によ

る困難の克服である。確かに、

科学技術によって大きな変化が

起きたし、我々の生活は昔に比

べれば格段に良くなったことは

間違いない。しかし、問題は、

このような状態が永久に続く

と思うことなのである。

大学に入学して物理学を学ぶ

と、最初に出てくるのは、安定・

不安定・中立という概念である。

ここでは、時間的に成長する解

を不安定な解と呼んでいる。安

定な解とは、時間とともに減少

してゆく解のことなのである。

そして、中立解は、振動解なの

である。したがって、無限に成

長するというのは、原理的にあ

り得ないということになる。

実は、有限の空間の中で無限

に運動ができるのは、振り子で

見られるような振動なのである。

したがって、我々の社会では、

個人にとっては、山あり谷あり

の一生があり、次から次と新し

い産業・会社が生まれ、成長し、

成熟し、やがて、衰退してゆく

という変動を通して持続的な発

展が起こるのであろう。ここで、

発展というのは、物質的な発展

だけではないということに留意

する必要がある。

「唐様で売家と書く三代目」

という川柳があるが、むしろ、

これが理想といえる。ずっと自

分の家を発展させたいというのは、

執着、欲ということもできる。

金を稼ぐのは、それ自身が目的

なのではなく、何かをするとい

うことなのであるから、三代目

が「唐様」で字が書けるほどの

教養を身につけたとすれば、そ

れでよしとしなければならぬ、

ということであらう。

さて、それでは、我々は、二

代目なのか？三代目なのか？と

いう質問が浮かぶであらう。決

して、「初代」と言いきれないと

ころが限界かもしれない。高度

成長期を兵隊として担ったとい

う意味では、二代目に対応する

のであろう。そして、三代目を

どう育てるかにについて悩んでいる

というのが実情であらう。それ

は、次の社会のイメージがつかめ

ていないからである。

二一世紀の社会は、人々が幸

せに生きていける社会のことであ

る。それでは、人々の幸せとは

何なのであろうか？確かに、戦

後の我々は、焼け跡、闇市から

出発してきた。その時代には、

第一次近似として、お金が人々

の幸せを保証するものであった。

しかし、現在では、多くの人が、

お金が必ずしも幸福を担保する

ものではない、と気が付いている。

実際、人間は、一人で生きて

いくことは困難である。社会と

いう人為的な環境の中で生きて

いるのである。この中では、人々

の幸福観とは、生きがいを持つ

こと、社会の中で認められるこ

とによる場合が多い。それは、

人と人との会話、コミュニティ

ションによって実現される。し

かし、コミュニティを成立

させるためには、何らかの場が

必要であらう。それが、コミュ

ニティ、共同体である。昔は、

家族、血族、地域共同体や、

組織が共同体であった。それが、

封建的として、一時期、市場

合理性の下に、運動会や独身寮

を廃止した会社が多くあったが、

現在では、それらを復活させて

いるところが多いと聞く。昔から、

言われている「同じ釜の飯を食

う」というのは、信頼できる人

間関係を作る基本なのである。

同じ土地に住み、同じ状況、

同じ時代を経験したのが同窓生

ということが出来る。その後の

人生は多様であらうとも、その

縁を軸に、共同体と豊かなコミ

ュニケーションを実現し、幸せ

な人生を構築してゆくべきであ

らう。それが、「三代目」に対

する我々のメッセージとならう。

東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ

統括ディレクター・教授





自家用機G109Bの機内におけるセルフポートレート

見かねた先輩ジャーナリストが、「おまえ、飛行機に詳しそうだな」

東京でいえば上野の安宿に泊

参加もした。その後、航空機輸入販売会社を設立し、グライ

国にも飛んでいった。アマチュアで飛ぶ人は少数民族であるから、こうした経験は、国や行政とい

空を飛ぶこと

瀬尾 央
昭和42年卒

「合格です」と岐高の職員室で報告したら、どの教師も信じない。まぐれ中のまぐれで、入っちゃいけないヤツが大学に入っちゃったからか、五月の「難関突破報告会(?)」には「来なくていい」とさえ言われたのであった。まあよい。東京の私学に

入れさえすれば、写真家への道はオレのものだとうぬぼれた。そして、その通りになった。大学入学の翌年頃から大学紛争が激しくなる。いわゆる全共闘運動のさなか、運動の主体となる学生と同年代の、写真を撮れる若者をマスメディアは重宝してくれられた。連載の一翼を担わせてくれたりしたものだから、簡単に原稿料生活者になった。仕送りの二倍も稼ぐとなると有頂天になる。親は嘆いたが、大学には行かなくなった。そりゃ取材現場の方が面白いに決まっている。

と新たな仕事を紹介してくれた。そりゃ筋金入りだ。小学校に入るころから航空専門誌をとっていた。三年生のときは、航空自衛隊の次期主力戦闘機選定のロッキード・グラマン論争の最中だが、「グラマンなんか決まるわけはない」と教師を泣かせたこともあった。

腰を抜かした。二五歳の若造に空軍機があてがわれたのである。それに同乗し、同国が独自開発した当時の最新鋭戦闘機サーブ・ビゲンの配備された基地へ飛んでいった。帰路には、その専用機を使いビゲンの空撮も行った。夢のようであった。

いま、「空へ、空から」をテーマに、航空機の撮影をしたり、自家用機を使い地上の空撮をしたり、それらの経験を元に年刊滑空誌を編集発行したり、という仕事をしている。稚内から与那国までほぼすべての空港を訪れ、飛行経験は四〇〇〇時間になった。この程度の飛行時間はプロにはいくらもいるが、身銭四〇〇〇時間は、しかもVFR ON LY(有視界飛行)は、それほど多くないはずである。



滑空は山岳スポーツ。南アルプス世界選手権日本代表を撮る

うものがいやおうなく実体として壁になって見え、いい勉強になるし、突き抜けていくと快感も感じる。

その種のことでは岐阜県内にも話題がある。高山市郊外の飛騨スカイパーク、いわゆる農道空港であるが、県人として開設が嬉しく、運用開始直後に一番乗りで飛んで行った。しかしこれが、離陸前に着陸料の先取りをする、世界に唯一(?)の不思議な運用をしている。県営体育館を貸すセンスなのだ。当日

悪天になればどうなるのか。行政的不勉強の典型だし、運航者には理不尽だから、後日管理する県庁に乗り込んで抗議したこともある。

最後に結論的なことを言うならば、自ら飛ぶことは、現代に残された最後の冒険のような気がするのである。最近はないが、主に気象を原因として、「やばいなあ、明日の新聞記事かあ……」と厳しい状況をつきつけられる。

同乗者が白目を剥いたり、膝が震えコクピットの床から音がすることもある。そのとき機長がうるたえたら負けだから、例えば交信する管制官には

「頑張って落ち着いた無線ボイスを出す。声を震わせない、何があっても動じない、そのためには自分をもう一人の自分が常に見つめる、そういうことを自分自身のフライトでは学んだと思う。これからも、他人に迷惑をかけないフライトを心して続けていきたいと思う。」

最近の関心ごと

瀬川 和朗

昭和42年卒



「現生人類は、約二〇万年前の一人のアフリカ女性から始まった」というミトコンドリア・イブ説が一九八七年に発表され、一大センセーションを巻き起こしたことはまだ記憶に新しい。これは分析技術の不十分さが問題となつたが、その後技術水準も

格段に進歩し、二〇〇三年には人間の全ゲノムの解読に成功、人類史の分野にも革命的ともいえる変化が生じてきた。すなわち、DNA分析のもと、現生人類がアフリカを経て全世界に拡散していった道筋を、年代を含めかなりたどれるようになったのである(ミトコンドリアDNAの配列の決定は一九九九年)。し

かも、当初のミトコンドリアDNAによる女性の系統のみでなく、Y染色体による男性の拡散の道筋も可能となった。これまでの人類史が考古学による点と点をつなぐものであったとすれば、分子生物学的成果は、DNAの現在の分布状況をもとに、拡散の流れを線でつなぐことを可能にしたと言つてよい。それは、DNAそのものの中に変異の歴史が刻まれており、ミトコンドリアDNA、Y染色体それぞれに系統分類が可能になったからだ。

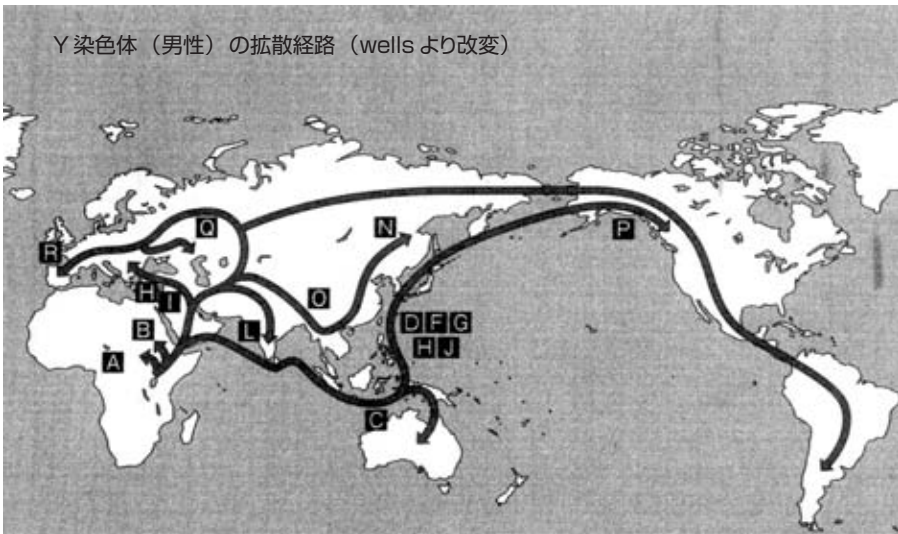
ただ、その分岐年代の測定にはまだかなりの誤差もあるため、考古学、環境考古学、形質人類学などを駆使し、より緻密で誤差の少ない数値と足跡の解明が心がけられている。

ところで、司馬遼太郎は『翔ぶが如く』の中で、条約改正と視察をかねて欧米に旅立った大久保、岩倉、伊藤たちが、海外から日本を見ることにより初めて、藩が国ではなく日本全体が一つの国家となった、と書いた。立花隆は『宇宙からの帰還』の中で、宇宙飛行士たちが宇宙から地球を見た瞬間、一様に深い感動に襲われ、全宇宙を運行する絶大な力(神)を意識し、

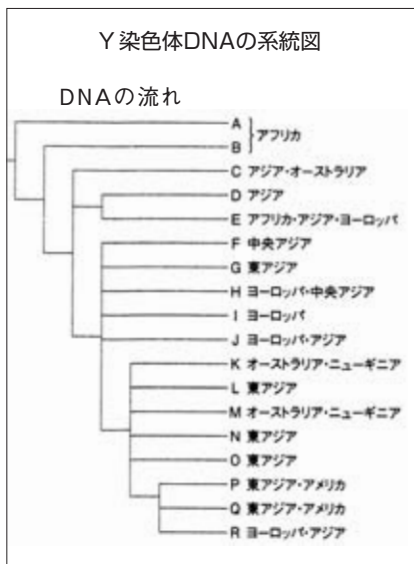
地球上に存在するすべてが運命共同体「宇宙船地球号」の中にあり、この奇跡のように存在する地球を守つていかなければならないと直感した、と書いている。この二つに共通することは、視点が変われば意識が変わり、意識のレベルが変わることにより世界観そのものが変わる、ということだ。明治という時代が、海外から日本を見る時代とすれば、二一世紀は世界中の人々が、宇宙から地球を見る時代なのではないだろうか。『宇宙からの帰還』は、私にとってはベートーヴェンの「第九」の世界そのものだった。それ故に深く感動でき、ベートーヴェンの「第九」の意味を改めて知つた。人間関係に

苦しんだベートーヴェンも、音楽には深く強い確信を持ち、こころの深奥に広がる崇高・壮大な宇宙は、かれの音楽の重要なテーマであった。かれは宇宙的視点からの世界観を音楽の中に創造しえたのである。

横道が長くなつたが、DNAによる人類史には『宇宙からの帰還』と同様の感動を覚える。宇宙飛行士が「宇宙から地球を見ればどこにも国境は無い」と語つたように、DNAのレベル



↑ ↓ 二図とも『日本人になった祖先たち』篠田謙一（日本放送出版協会）より



くの生命を尊重し、ほかの地域から逃れてきた人たちをも無慈悲に追い払うようなことはしなかった。そして日本列島は、世界の中でもDNAの多様性に満ちた地

このような知識を無条件に与えることができたなら、と夢想する。人類が意識のレベルで共通の基盤にたてるようになれば、難問も解決への道筋がかなり見えてくるように思えるのだが…。

で人類を見れば、国境も人種も民族も宗教の壁さえも無いからだ。われわれは遺伝子レベルではつながっているのである。つい数万年前までは、現生人類はみなアフリカにいた。約六万余年前頃にアフリカを出て世界に拡散し、それぞれの地域の自然環境に適応しながら分化していったので

ある。日本列島にもいくつものグループがやってきた。大陸で負け組となったDNAの多くもたどりついた。日本列島には同化しやすい自然環境があった。縄文時代にこの列島で生きた人たちは、自然に深く感謝し、自然の中に多くの神を見出した。心優しきかれらは、大自然や多

域となったのである。人類はいま、拡散の時代から融合の時代を迎えている。しかし、現状は民族紛争や宗教的対立が絶えない。さらに環境問題を解決しない限り、人類の未来は無いとさえ言われる。このような重要問題を考えるとき、「宇宙から地球を見る視点」の重みが増してくる。「キリスト教徒・イスラム教徒の子どもたちはいない。親がキリスト教徒・イスラム教徒の子どもたちがいるだけだ」とある本に書いてあった。無垢な世界中の子どもたちに、

昭和四二年岐阜高等学校を卒業し、医学部をめざしていた。当時交通地獄といわれ、交通事故にあって死亡する人々が多数みられた。医学の道に入りこれらの人々を少しでも救うことができるといふ気持ちであった。当時の米国のテレビ映画でベン・ケーシーなる脳神経外科医の活躍にも大いに刺激され、強いエネルギーを受けたものであった。また片田舎で育った私にとって地域医療を担っておられた町医者（開業医）は神様の様でもあった。

一年間の浪人生活後医学部に入り六年間を経て、出身地の岐阜県に近い名古屋大学脳神経外科へ入局し、名古屋第一赤十字病院、名古屋大学病院、その後国立病院機構名古屋医療センター（旧国立名古屋病院）で二〇数年を経て勤務医師生活三六年の大半を送っている。

日本の救急医療体制は平成三年の救急救命士法の成立以来、少しずつ進歩しており、特に病院前救護（プレホスピタルケア）の改善と病院外心肺停止など重篤な救急患者の救命率の向上を目的としている。それ以前の救急車は傷病者の単なる公的搬送（輸送）車に過ぎなかったのが、特別な教育訓練を受けた救急救命士が救急処置を現場で施しながら病状に応じて病院を選定し、迅速に搬送することになった。当時の欧米での病院前救護の内容が著しく進んでいる一方、日本では遅れていること一端を発したものである。限定された医療行為が医師の監督下に許される救急救命士を養成するには、行政区分の枠にまたがった調整が必要であったが、総務省消防庁と厚生省（今は厚生労働省）、更に医師会との協力のもとにできたものである。平成一五年には救急救命士は、現場に到着し患者が心室細動（心



救急勤務医の現状
高橋 立夫
昭和42年卒

昭和四二年岐阜高等学校を卒業し、医学部をめざしていた。当時交通地獄といわれ、交通事故にあって死亡する人々が多数みられた。医学の道に入りこれらの人々を少しでも救うことができるといふ気持ちであった。当時の米国のテレビ映画でベン・ケーシーなる脳神経外科医の活躍にも大いに刺激され、強いエネルギーを受けたものであった。また片田舎で育った私にとって地域医療を担っておられた町医者（開業医）は神様の様でもあった。



2009.3.名古屋医療センター救急救命センターにて 右端が筆者

調整役をやっている。また同時に救急救命士の医学知識、技術の維持向上のためのシステム維持にも加わっている。

ところが、この一〇年くらい前より病院勤務医の仕事が著しく増加し（急性期病院での入院期間の短縮義務、診断書類の急増、中等・重症患者の基幹病院への集中）、卒業後一〇年から二〇年の働き盛りの医師が新天地を求めて開業することが多くなり、中規模の病院では医師不足が深刻化している。当時は患者側の過度（医療制度を無視した）な要求や期待が強く、また

医学の限界のあることも納得しようにとしないモンスター患者、家族も多く、クレーム対策に多大な時間を費やしたり訴訟事件に巻き込まれたりすることが多くなっていた。マスコミにも多大なる責任があると思われるが医師バッシングが途絶えなかった。日本の救急医療はボランティアで、特におこなわれているのが現実で、特に急を要する外科系医師（脳神経外科、心臓血管外科、外科、産科、麻酔科）が昼間は通常の予定手術をおこない、その上に夜間、休日には緊急手術を要請されているのが実情で

ある。人によっては何日も眠れず居眠り運転ならず居眠り手術、治療もやらざるを得ないこともある。日本でも関東（特に大都市の東京）、大阪地区では医療機関の救急車の受け入れが非常に悪く、何箇所もの救急救命センターへ照会してやつと収容できたといいことが多く、患者搬送時間が著しく伸びており、緊急事態となっている。

外科系医師はそれぞれの経験年数に応じて特殊技術を習得しており、誰でも交代して、事が終わるといいうものではない。日本ではいわゆる技術料は手術手技料としてはあるがあまりにも安すぎて個人にまで還元されていないのも問題であり、手術技術を一生懸命に研鑽しようとする人達が少なくなってしまう。今は大病院集中型であるが、これらで懸命に働いている外科系医師の多くは、月に一〇〇時間前後の超過勤務をしているがわずかな時間外手当である。外科系をあらたに希望する若手医師がこの数年激減している。脳神経外科、外科などは学会をあげて医療崩壊をくい止める為に色々な所へ働きかけている。この数年の産科救急の間

題や、麻酔科医師、救急医の集団退職などは、働いても働かなくても均一の評価しかされない日本の医療制度に対する苦情と、苛酷な勤務体制で何とか我慢して耐えてきているのに、患者側から過度の要求やクレーム、更には訴訟にも至るといいうことが耐えられなくなったというのが現状である。

幸いにこの愛知県中心部ではまだ医療崩壊の深刻さは少ない。しかし中部地方でも三重県では中規模病院から救急医療の撤退が起こり、ヘリコプター等による広域搬送が必要となりそうである。ベビーブームに生まれた私自身、六五歳の停年退職まであと三、四年であるが例年のごとく二〇〇九年から二〇一〇年の年末年始も休めたのは一月一日のみで、その他の日は耐えて頑張ってくれている若き脳神経外科医と共に緊急手術や重症管理に明け暮れていた。若き勤務医達の生活意識も変わりつつある中で医療崩壊を何とかくい止めるためにはならないと思いつつ、病院前救護体制の発達と共に医療制度の改善を願っている日々である。

名古屋医療センター救急救命センター、脳神経外科



還暦を三人三脚で
恒川 量嗣
昭和42年卒

私が中学二年生の時、学校から授業の一環として全員が電車に乗って映画「ベン・ハー」を観賞に行った。当時田舎ではそんな事もあったのです。帰校後クラスの感想会で担任に先頭で指名された。その時生意気にも「ベン・ハーは冒険主義者ではないか。ローマ社会に溶け込んで、その内でユダヤ人の権利向上を獲得した方が確実だったのでは」と発言した時の先生の顔は忘れられない。「若々しい情熱を期待したのに案外な奴!!」という感情がありであった。壮絶な海戦シーン、勇壮な戦車レースを観て、ついつい自ら興奮を鎮静させる意味もあったのだが。

爾来うらはらな発言を後悔し常に自分が歩む道の理想と現実のギャップに迷い続けている。毎年歳末に四二年卒業生の同窓会がある。還暦を過ぎて尚勉学・

来て何処へ行くのか」というテーマに進んでいる。先日三重大の小川眞里子教授の「ダーウィンの進化論」の話を聴き、ヒヨ

と思う。

歯科医師

力・幸運と三拍子揃って社会に影響力を持つ人も一部いるが、大多数は自分のようにOne of themだろう。現行の雇用状況だと五五才位を境に人生区切りの門をくぐり第二の人生指針が必要だ。この齢になると自由業の有難さが身に染みる。「敬語は尊敬する人にだけ使えほしい」というのが亡父から教わった家訓(?)で自分の三人の子供も長女が公認会計士、次女と長男は家からの通学を義務づけて歯科医師となった。それぞれが巣立って今残るは夫婦と柴犬二匹(長寿)。還暦すぎて人生航路を捜すのでは遅いと思

ンなことから彼女が岐高の同級生である事が判りビックリした。「高校生の時の勉強量の差が演者と受講生の差」かと、つくづく思い苦笑したものです。大学受験の頃本気でめざした歴史学、地球科学への道は紆余曲折あつて高校生ながら兄弟姉との将来の生活水準の格差を嫌った超若年寄的・世俗的選択をした為、せっかくな合格した国立文系の道を放棄してフラックと歯科医になつてしまった。それが今となつては痛恨のロスだ。四〇年となつている。幸い公平な事に「どんな人間にも一日は二四時間、一年は三六五日」と決っている。一度だけの人生をどう生きるかは本人が決める事だ。あと千支一廻りは読書・歴史・宇宙・ゴルフ・夫婦での写真etc、もつと食欲に学んでいきたいと思つて

第三の人生
中島 義和
昭和42年卒



もう三〇年も前の米国留学時、級友の米人の家族にクリスマスに招かれ、その父親から人生三

せ社会に送り出す。第三段階のその後一〇年は、リタイアして悠々自適に暮すのではなく、お世話になった社会に自分の出来る形で恩返しをする時期であるという。私が五五歳で仕事リタイアは早いのではと尋ねると、第三の人生は気力体力も充実しているうちにこの段階に入ることが大切だという。そしてこの第三の人生をどんな形で過ごすのか早めに準備をすることの大切さを諄々と説かれた。

し、自分の不勉強さを思い知らされた。経済経営のほかに日本及びアジア(特に中国)の歴史文化について勉強を始めた。四〇歳になっていた。五年前日本GMの社長を退任した。五七歳になる前で当初の予定より一年半程遅れたが、第二段階を無事終了した。大病を患い四ヶ月入院したり、米本社の事情でリストラを余儀なくされたりと想定外のことも出来したが、充分仕事をしたという満足感で一杯だった。第三段階に進む前に少し充電が必要だと感じていたので、その前から始めていた琉球沖縄の歴史文化の勉強を、この機会に集中的に行うこととした。沖縄に渡り琉球大学・沖縄国際大学の聴講生となり、琉球沖縄の歴史・文化・言語・伝統芸能・琉中交流史などを学んだ。充実した充電期間を終え東京に戻り、自分のノウハウがお役に立つコンサルティングやネットワークを後輩へ引継ぐお手伝いを始めた。しばらくして駐日アフガニスタン大使から、自国経済復興のために日本の復興モデルを手本にしたい、そのためにアフガン企業と自動車を中心とした日

生航路を捜すのでは遅いと思

る。「何かに迷わない唯一の方法は迷い続ける事だ」というフレーズを読んだが、やはり文字通り夫婦二人で三脚を担ぎながら普段に歩いていくと光線がナビを示してくれるのではないか

に育ててもらった時期。この時期に自分の進む道を選択し目標を立てる。次の三〇年間は自立し自分の目標に向かつて邁進しその実現に全力を尽くす時期。この時期は同時に家族を持ち子供を育て独立さ

そのとおりに行かない。それまで勤めていたトヨタ自動車を退職し、外資系に転職した際も一度プランを作成しなおした。三七歳の時だった。外資系に働き出して大きな悩みに捉われた。日本の経営者に比し欧米のトップマネージメント層の教養の厚さを痛感する場面を何度も経験

を後輩へ引継ぐお手伝いを始めた。しばらくして駐日アフガニスタン大使から、自国経済復興のために日本の復興モデルを手本にしたい、そのためにアフガン企業と自動車を中心とした日

本企業との橋渡しを手伝って欲しいと頼まれた。アフガニスタンは当時（今もそうだが）外務省からは渡航危険地域に指定されており、世界に冠たる日本の商社員さえ一人も駐在していなかった。東京在住のカナダ人弁護士とパートナーを組み、二人で首都カブールにまで出張して現地調査を行い、先方との打ち合わせを重ね準備を進めた。計画案に基づいて日本企業と話し合いをはじめ、商社・輸送公社・メーカーなどが調査団派遣を検討するところまで進んだが、残念ながら一時安定していたアフガン治安情勢がその後再び悪化し、動きがストップしてしまっ

た。その直後日本科学未来館が経営者OBの副館長を公募するとの記事が日経はじめ各紙に載った。国の行財政改革で毎年予算が削減される中で、民間のノウハウを逸速く取入れ館の経営を効率化したいという、館長毛利衛さんの強い願いで公募となったものだという。これを読んだ私の元部下や友人が応募するよう強く勧めてくれた。科学とは余り縁のない仕事をしてきたの

ためらいはあったが、「科学のことは（科学者の）私がやりますから経営のほうを是非みてく

ださい」という毛利さんの言葉で最終決断した。着任して三年半、この間収支改善・経営効率向上・コスト意識のアップに全館一体で取り組み、着実に収支差は改善されつつある。昨年の事業仕分けでも取り上げられたが、未来館は過去九年連続で予算削減の一方入館者は連続増加

自己収入も増やし続けている。海外からの要人の訪問も数多く科学外交の一端をも担っている。未来館で、自分の過去の経験を生かしささやかに貢献できていることを嬉しく思う。また住明正君・小川眞里子さんら岐高の同級生が、科学の先端の分野で研究や研究者育成に大いに活躍

していることをとても誇らしく思う。私の任期は五年（来年九月まで）なので、その後は大好きな沖繩のためにお役に立ちたいと、今も琉球沖繩の勉強を続け、このところ年一〇回ほど沖繩通

いを続けている。体力と相談し無理のないペースで、家族と一緒の時間をも確保しながら、これからも前向きに第三の人生に挑戦して行きたい。



還暦の悪あがき
中山 恭一
昭和42年卒



父は国鉄でトンネルの技師をしていました。安月給の代名詞のような国鉄職員で、三人の子供を育てていましたから母は内職をしていました。高校生の私は新岐阜のバーラーで制服のままレモンティーを飲むというような不良っぽい快感を得たり、お好み焼きやおでんを食べるといような他愛無い出費のために、母に本を買うからと言ってお金をもらって

いました。本を買うと言えは必ずお金をくれました。証拠の本を見せなさいと言われたことは一度もありませんが、今になって思えば、これは信用されていたからではなく私の嘘を承知して

いたからでしょう。これは母がくれた大切な財産で、私も自分の子供の教育については全てを肯定し受入れるように心がけました。この歴史はわが子にも引き継がれているようで、どのような孫を育てるのか私の密かな楽しみになっています。



初任地
下関の思い出
野田 豊範
昭和42年卒



当時の私は劣等生でありながら常に勉強しなくてはという強迫観念にとらわれていました。映画を見たり音楽をやったりして傍目には気ままな高校生に見えたのですが、いつも鉛を呑んだような重苦しさに責められていました。今になればそれが向上心というものであり、砂を噛むような勉強も自分を鍛えたのだということが分かります。

二五年間小さな会社を経営し六〇歳になった昨年、思い立って法科大学院を受験し合格しました。若い受験生に混じって入試問題と取組むのは照れくさくもあり、また喜びでもありました。まともな勉強は三〇年もしたことがありませんし、酒もたっぷり飲みました。付け焼刃の勉強が通用するとは思っていませんでした。自分の能力がまだ残っていたことは驚きですが、若い時に鍛えられた方はそれほど衰えることもないのだと実感しています。今年四月から学生に戻りますが、寿命と競争しながらどこまで進めるか挑戦してみようと思っています。

ました。

山陽新幹線の建設に着手して間もない頃で、本州と九州を結ぶ新関門トンネルの海底区間の建設を担当することになりました。新関門トンネルは長さ約一九km、そのうち海底区間は約九〇〇mあり、関門海峡の真下、水深は七〇m程度で、海底からトンネルまでの土被りが二五m程度しかなく、本州側には断層があり、工事中のトンネルには岩の割れ目から海水が雨のように降り注いでいました。初任者として工事のイロハを学ぶため毎日現場に通いましたが、制服はすぐに塩で真っ白になりました。工事は技術の進んだ今から見ても相当な難工事で、その克服のために新しい技術や材料を開発し採用しました。取材のテレビ局を案内して工事が休みの静かな休日の現場に入ると、海上を通る船のスクリーンの音が近づいては遠ざかっていくのが聞こえました。

下関は源平合戦の最終決戦、壇ノ浦の戦いの地であり、武蔵と小次郎が決闘をした巖流島があり、長州藩の討幕運動の前線基地ともなりました。工事の現場は関門海峡の早瀬の瀬戸を挟

んで本州側に火の山、九州側には神事で有名な和布刈神社がある景勝地で、近くには平家を祀る赤間神宮や下関条約の結ばれた春帆楼がありました。また、山陽新幹線の建設と併行して山陽自動車道の関門橋の吊橋も建設中で土木工事のメッカの様相を呈しており、視察者が多く、友人も数多く訪れてくれました。二年ほどの勤務で東京に戻りましたが、印象強く、当時のことがつい昨日のように思い出されます。

その後も東北新幹線の計画、建設に従事し、JR東海発足後も新幹線品川駅を建設し、現在は東海道新幹線バイパスの計画を進めています。今後も高速鉄道の整備を通じて日本の経済社会の発展に、そしてその省エネルギー特性を生かして地球環境の保全にも寄与できればと思っています。

東海旅客鉄道株式会社
代表取締役副社長



岐高3年間の重み

半田 喜久美
雅号 幸堂 法名 喜励
昭和42年卒



三年というのは基本的に短期間だが、後になってその重みを次第に感じる場合がある。岐阜高校在学中はまさにそれだ。あつという間で、早く過ぎて欲しい受験期ではあったが、さまざまなことが自己形成の基盤になつてきていることを今になつて感じる。

忘れもしない初めての英語の授業。第一章の初めのページの上半分は絵だったが、そこだけを受習するのに精一杯でむかえた授業で、最初にあてられた生徒があと二ページ半もある一章全部をすらすらとひとりで訳してしまった。とてもついていけない。数学もまるでついていけ

ない。地元大垣北高の数学の先生の指導を受けて、一年半かかってやっと見えてきた。どんな状況でもめげずに初歩から地道にやる姿勢を培うことができたのは、岐高へ行ったなによりのおかげだ。

単なる日本語と思っていた国語の奥深さを知ったのも、その後役立ってきた。文章や言葉に注意を払えるようになり、周囲から重宝されたり場合によってはおもてなされたりしている。言語が思考回路にたいせつなことは言うまでもないが、これこれ、ゆえにこれこれ：“という数学の考え方も加わって、いつの間にか自分を形成してしまっていることも岐高生としての後遺症であろう。

古文は中学の時から好きだったが、漢文のおもしろさと雄大さにも接することができた。難しい漢字を多く知っているクラスメートに畏敬の念を持ち、さすが岐阜市の子は違うなあと思っていたが、五〇才過ぎに始めた東洋医学の勉強で、古書を抵抗なく手に取ることができ、し、經典も漢文として親しみを感じることができた。語彙が多い優秀な友との接触は刺激になった。

好きだと思えたのは地学だったが、受験科目になくてがっかり。しかし、様々な興味をもち続けられ、人間の存在と宇宙を思い巡らすことが今楽しい。

朝は各務原の川崎重工勤務の父が送ってくれた。今から思えばその苦労がわかるが、当時は私のせいではしばしば八時出勤に間に合わなかったようだ。おとうちゃん、ごめんなさい。家庭科の佐久間先生と朝しばしばいっしょになったが、料理は化学だとの思いで興味を持ち、料理クラブに入った。しかし実際には、学校の経費でお菓子を食べることが目的となっていた。梅林公園近くの料理の先生宅に岐阜薬科大学の学生ふたりと下宿したことも楽しい思い出。

一時期、学校のすぐそばの岐阜大学眼科の清水教授宅に下宿した。庭に白樺がある猫だらけの家で、先生と差し向かいでNHKのニュースを見ながら夕食の後は勉強しかやることのない日々だった。この時、清水先生が『眼は体の窓だけでなく心の窓だ』と話されたことが、よく理解できぬままに頭に残った。地学か家政科で身を立てることも頭をよぎったが、現実的な

進路を決めた。夢でなく現実を捉えることができたのも、自分の実力の程度を知ることができ、優秀な仲間にも囲まれていたおかげだ。



五五才の時に『寛永七年刊和歌食物本草 現代語訳』を、そして六〇才で『私の漢方眼科学』を出版した。岐高時代に興味を持ったことがここに至って自分なりに集大成されてきた。また、「人生は忙しい」と言う英語の近松先生の声は、なにかにつけて背中を押してきてくれた。個性豊かな先生方の生き方や人柄までが、自分形成にすりこまれてきていることを今になって感じる。今後とも、磨かないと光らない玉である。登壇として、喜びと共に励み続けな

がら、仏法繁盛と漢方眼科学の提唱に尽くし、少しでも多くの人々に幸をとどけていきたい。みなさまありがとうございます。

多治見眼科院院長・眼科専門医・東洋医学専門医



一九九四年八月二八日、いつも夫が運転していた車をケネディ空港から自分で運転して家に向かっています。子供達は後ろの座席でぐったりとしています。これから五年間、夫のいな

いニューヨーク生活が始まると思うと、緊張と不安で、この先どうなるか心配でたまりませんでした。

この年、夫は二〇年間の米国駐在勤務を終えて、日本に単身で帰国しました。

日本へ帰国の話が出たのがその一年前一九九三年の八月、長女はちょうど大学が決まってこれから寮に引越しをするところでした。長男は中学一年生でした。いつかは、日本に帰国するというのは、頭の中では分かっていたのですが、いざ現実になってくると、何から手を付けたらいいのか。やることがたくさんありました。

子供達に夫が話を始めました。「お父さんは来年日本に帰るよ」。長女は、「私は大学の寮に住むから大丈夫。勉強するよ」。長男は、「いいよ。お父さんは日本に行けばいいよ。僕はここに残るからね」。長女は生後三ヶ月で渡米。日本での生活は皆無かったです。子供達にとっては、日本は自分達の国ではなくお父さんとお母さんの国、自分達の国は実はアメリカだったのです。

夫が日本に帰国してしまうと、

長女は大学の寮生活ですから、ふだんは、私と長男との二人暮らしになります。そのために安全で、こじんまりしたアパートを近くに見つけました。

引越は八月の初めでした。私がアメリカに来てから、すでに引越しを六回経験していましたが、引越しには慣れてはいませんでした。でも、夜中まで荷造りに追われる日々が続き、もう引越はこれで最後にしたいと思っただけです。

夫が日本に帰国して、長男との二人暮らしが始まりました。当時アメリカでは、多くの家庭がシングルマザーや、再婚同士であったので、長男は自分の環境を不思議にも感じていなかったようです。それよりも、私は長男が勉強から目をそらさないよう願っていました。

初めの一年間は、特に外で働くこともしないで、毎日家事で気を紛らわせ、テレビが日々の楽しみでした。テニスやショッピングをして気分転換をはかっていたのですが、家の中には何か欠けている気がしてなりません。

一年も経つと、こんな生活をこれから先何年もするのかと思

うと、いてもたってもいられなくなりしました。夫から生活費の仕送りはあるものの、それが減る一方の生活は不安でした。自分で何かできることが無いかと思いはじめました。運よく、家の近くの日系企業で仕事を見つけました。日本から来た役員の秘書兼経理部のアシスタントの仕事です。これなら家庭と両立できそうでした。

日本からの駐在員と現地採用の日本人とは、職種も待遇も賃金も、それなりに差が有ることを耳にしていました。いざ自分が働き始めて、その現実を体験することになるなんて夢にも思っていませんでした。

日本から赴任して来た私のボスは、現地法人の副社長でしたが、細かいことは私に任せてくれました。書類作りから、電話の応対、そしてニューヨーク生活のノウハウの伝授まで、何でも期待されていました。

ありがたい事に、職場ではあまり困ったことはありませんでした。決められたことをきちんと進めればよかったです。それよりも、こんな年のおばさん雇ってくれるだけでもラッキーと思うことがたびたびでした。

でも給料はアパートの家賃で消えてしまつて、あとは夫の仕送り頼りでした。

家の中では、何が大変かという、まず自分ですべてを取り仕切らなければならなかったことです。今までは色々な契約、支払い、運転、車の点検も、すべて夫まかせ。車が故障したらどうしよう、子供達が怪我や病気になったらどうしよう、確定申告はどうやってやるのかしらと不安になることばかりでした。その中でも一番の不安はお金でした。

できるだけやりくりしなくてはいけないと思つていましたので、とにかく、お金を使わないように、といつも考えながら生活をしていました。買物に行っても少しでも安いスーパーに行く。クーポンは大事に財布の中に入れて、クーポンのある商品を買う。お財布はクーポンと色々な店のカードでパンパンでした。外食はめつたにしないで、節約につとめました。自分では生活をきちんと支えている大黒柱だと思つていました。

毎年、夫は私たちに会いに来ました。そのときは、大学に行つてい

る長女も家に戻つて、家族四人で近くの日本レストランに行くのが楽しみでした。子供達は、夫が来ると何でも食べさせてくれるので、「今日は自由にしているのね！」と朝から楽しみにはいでいました。一ドル、一セントに汲々としている私にしてみ

と、いいのかなーと思ひながらも、「今日は美味しいもの食べようねー」と話を合わせたものです。夫からは年に三、四回の送金。後から聞くと夏冬のボーナスは勿論、貯金を取り崩していたそうです。確かに日本にいる、もう一本の大黒柱のおかげで、安心な生活ができていたのです。

一九九九年八月、長男が無事大学に入学しました。夫が日本から来て、長男の入学、入寮、私たちのアパートの引き揚げと一緒にやつてくれました。長女は大学を卒業後、就職して既に独立していました。これで私の大黒柱の役割はやつと終りました。

一九九九年九月二日、日本への帰国の日が来ました。ケネディ空港から飛行機が飛びたつた時、五年前のあの日のことが目に浮かびました。今、子供達がどんな気持ちで

家に向かつているのかと思うと、なんともいえない複雑な気持ちになりました。

今、こうして当時をふり返ると、五年間の逆単身生活が夢の中の出来事だったような気がします。

就職指導も、結構楽しい

平野 泰朗
昭和42年卒



と、自治体の審議会委員などによくなります。は、それにいくつ時間を割こうとも、わたしにとつては周辺のな仕事でした。しかし、六、七年前から研究にあまり時間が割けなくなりました。最初の四年くらいは、大学運営に深く携わりました。大学の独立行政法人化を推進する役割を担いました。その仕事をする中で、地方の公立大学の第一の社会的使命は教育にあると、強く知らされました。それを機に、自分の教育法を省みしました。良い教師でないことは、十分分かつていましたが、どう教育法を改善するかは手探りでした。学生による授業評価なども参考にしましたが、もっぱら頼つたのは、人気の同僚に話を聞くことでした。

話をするうちに、わたしにも

授業方法のアイデアが出てくるようになりました。そのうちのひとつを紹介します。ゼミで、学生に企画書を書かせます。取り扱うのは、身の回りにある事柄の改善案です。最初は、単なるコミュニケーションでしたが、そのうちに企画を実行する者が出てきました。例えば、一日スポーツ大会を開催したことがあり

ました。事前にアンケートをと

りました。事前にアンケートをと

り、日時や競技内容を決めます。スタッフを募り、役割分担を決めます。また、体育館を借りるのに大学の事務局と交渉します。こうして見事にスポーツ大会を成功させました。わたしとしては、こうしたことを通じて、学生に課題発見と課題解決の方法を考えさせようとしたのです。ただ、この過程で気づいたことがあります。一人の企画にゼミの仲間が質問したり、アイデアをだしたりする中で企画が練り上げられていくのですが、これには、ゼミ生同士仲が良いということが前提になければなりません。別の角度から言えば、集団で仲が良いと一人一人も伸びると言うことです。個人主義者のわたしには、これは思わぬ発見でした。

今年の三年生は、三人ずつ二グループに分かれて企画を立て、それを実施しています。テーマは、大学周辺の生活便利マップ作成と近所の小学校で大学生と小学生の遊び交流です。どちらも、完成間近です。

そんな三年生が、そろそろ就職活動を始めました。今年も、昨年にも増して厳しい状況が予

想されます。彼らのうちの何人かが、エントリーシート（出願書）の書き方を相談に来ました。彼らはほとんど例外なく、これをうまく書けません。例えば、「あなたの強みは何ですか」という問があります。これは、最近の定番の質問です。これに、「わたしの強みは、諦めないことです。最後までやり抜く姿勢は、きつと御社に貢献します」といったことを書いてきます。彼女にそうした一面があることは事実ですが、これでは、当人の良さを少しも表現していません。そこで、質問してみます。「あなたは、自分の長所と短所はどういうものだと思いますか」すると、「友達からは、気配りが利くとか言われます。短所は、頼まれると断れないことです」という答が返ってきます。「だったら、そういうことを書きなさい」「でも、そんなこと、どうやって書けばいいのですか?」

「例えば、友達同士で旅行に行きませんか?そのとき、みんなの意見が違ったらどうしますか?」「何とかまとめます」「友達から恋愛の相談を受けませんか?」「自分では経験がないのに、よく受けます」「そういうことを織

り交せて自分をアピールすればいいですよ」

学生の就職活動は、大抵の場合、すぐには良い結果がでません。とくに女性はそうです。その意味では、就職指導はしんどいのですが、学生に自分の良さを気づかせ、それをうまく表現させるといふことは、結構楽しいことです。

最近、研究時間が少なくなりなりましたが、大学教員として別の楽しみがもてるようになりました。

大学教員

岐高の皆さん

伏屋 芳文

昭和42年卒



奈良県天理市石上神宮にて

一緒に鉄棒をしたり遊んだりして、あまり考えもなく岐高に入学したのだ。入学したら男子組で片山良広君、住明正君、美男の滝雅夫君が

じやうりりのなをなつかしみゆきふる はるのやまべをひとりゆくなり (會津八二)

京都の南、浄瑠璃寺には、人のたけより大きな九体の阿弥陀像があり、平安貴族の浄土への憧れがみてとれます。私は何度も訪れ、そのたたずまいに感動します。藤原道長の法成寺九体阿弥陀堂の建立以後、京には百棟ほどの阿弥陀堂が造られ、九体阿弥陀堂は三〇をこしたという事です。今は、浄瑠璃寺のみに残っています。

どうして私はこんな事に興味を持つんだろう。ふり返れば、岐高の時 枕草子の世界に憧れていたんだ。そうだ私は加納中学の五〇人位の同窓とともに岐高に入学したのだ。中三の勝野恵子さんは美しい鶴の一声でクラスをうまくまとめていたんだ。神経質だった私は藤井信博君と

いて、大変な所に来たもんだ。何はさておきクラブをと思いいテ

ニス部に行くも相手にされず、藤井信博君と共に体操部に入るも、床運動は怖いし鉄棒では手の皮はむけるし、いい加減な部員で早川先生にはいつもに

らまれていたつけ。この頃は服部真治君といつも一緒だった。服部真治君は大学でアイスホッケーをし私はスピードスケート部で、京都岡崎アリーナでよく会った。なんと北海道から信田朝次君がアイスホッケーの試合に来て会った事もある。

古田君よくやった 声なくて 十万の眼は君の上 今し燃え継ぐ聖火の焰 (岩田雀)

皆さんよくござんじの国体のせいで、高二になると突然男女クラス、よく遊びました。森岡恭子さんは勝手に仕切るし、足立潤君は音楽の道に進むし(今もハンブルグにいるのでしょうか)、修学旅行は本当に楽しい時で山田滋子さん 山下由美子さんとはいしゃいでいたね。白須賀佳世子さんはフリルの清楚なブラウスを着ていたね。ナシを食べに戸



京都府加茂町/浄瑠璃寺

部直清君の家へ行くわ、竹市力君にバリカンで髪を刈ってもらいわ、授業中、心を寄せる人の横顔をみてポーツとするわ、担任の勝野裕先生はほとんど手を焼かれたと思います。そうそう「スペインの雨は平野によく降る」を即答できた木方真知子さん、きつと近松先生もみた、「マイフェアレディ」を鑑賞していただくでしょう。犬飼直子さんといつも一緒でしたね。

我ながら、これではいけない、三年は男子クラスにと申し込むも、ふたを開ければ理系の男女クラス、これでは浪人もやむなしか。豆单暗記競争をした堀江正明君、安田化成(株)の社長になると夢みた安田孝司君、私の心の中を見すかした加藤雄二君、ああ青春、ホールムーム時のフォークダンスですつと手を握っていた田辺雅子さん、授

業のプールで中央まで泳いでいた神谷富美子さんの勇姿、前の席の純白のブラウスの藤掛八千代さん、えくぼの素敵な森田緑さん、今もまぶたに残ります。通学の私を追い抜く自転車村瀬久子さん、自信を持ってアドバイスしてくれた越部幸子さん、一緒に受験した日野大順くん、法起寺の苔むす庭に蝉しぐれと歌った佐守啓子さん、およい、みんな元気か！。

小学の時より天文学にこつていた三宅和豊君、卒業生総代をした三宅寛君、授業中の英文すべてを黒板に書けた近藤君、始まる前から廊下で待機していた近松先生（『山貞』ヤメテー）、映画の字幕を訳したかったモガ鮫島先生、ケケケルケルケルケレケヨの飯尾先生、『月と六ペンス』の井上先生、大日本土木と高橋コレキヨの寺本先生、ソクラテスを熱く語った今村先生、野田一人活躍するもついでゆけなしい林の数学（これだけは夢になさされる）、森香代子さんに無理を言いお見舞に行った成瀬美春さんは若くして亡くなり残念です。
恥をかいたり 失敗したり、チヨークを投げられたりの岐高

時代を、私はずっと心の片隅に追いやつていました。今静かに思いをめぐらせば、楽しいことのみ鮮やかによみがえります。これらの多くの友と先生のおかげで今の自分があるをつくづく思います。皆のことを思い起こすと、突然、青春時代に戻れます。その心地良い時を大切に！皆さんに会いたいと思つています（少しとまごいつつも）。

年ふればよきは
老いぬ しかはあれど
友をし見れば物思ひもなし
小児科医

「世界糖尿病デー」記念
セミナーin郡上」
を開催して
堀谷 登美子
昭和42年卒

私が、郡上踊りで知られている郡上市八幡町で堀谷医院を開業し、地域医療に携わり一四年目になります。

平成二二年一月一四日に、第三回世界糖尿病デーに医院の患者さん達と一緒に、郡上八幡城をブルーにライトアップすることができました。



きっかけは、堀谷医院の糖尿病友の会の森前会長が、平成二〇年に骨折で郡上市民病院入院され、病棟の窓から眺めたお城をブルーに染めたいと考えられて、郡上市に相談に行かれました。「できそうだよ、やりたね。せっかくやるなら講演会もやりたいね。」という話になって、講演を岐阜大学の武田教授にお願いしましたところ快諾していただきました。

郡上市医師会と友の会が主催となり、郡上市、教育委員会、お城を管理する産業公社、歯科医師会、看護協会、薬剤師会、栄養士会に共催していただき、実行委員会を組織しました。
郡上八幡には全国シェアが七

〇%を占める食品サンプル製造会社の岩崎模型があります。糖尿病のフードモデルや、パソコンを使用し食品サンプルを置くだけでカロリー計算ができるサットシステム等、画期的な製品の開発をされており、展示とデモをお願いしました。製薬会社がお自己血糖測定器やパンフレットの展示を、食品会社がアイスクリームや寒天などの低カロリーの食品や試供品を提供していただけになりました。看護

師さん達は、年に数回行っている「町の保健室」の活動の中に一月一四日の糖尿病デーを入れて下さいました。郡上八幡城は、一月に入ると「もみじ祭り」のため、お城周辺の紅葉のライトアップが始まります。また平成二二年は築城四五〇周年の記念事業も計画しているので、岐阜城のような七日間のブルーライトアップは無理だけれど、二日間のみなら可能だと許可され、点灯式は城山天守閣前広場で行われることになりました。そして、平成二二年一月一四日「世界糖尿病デー」記念セミナーin郡上、郡上八幡城のブルーライトアップは一四日、一五日と決定しました。

私がこの会で訴えたかった事は、郡上市の特定健診は空腹時血糖の測定のみなので、血糖値の1〜2カ月の平均値を示すヘモグロビンA1cを是非入れて欲しい事と、糖尿病の治療は、患者さんが中心の、主治医を始めとする眼科医、歯科医、看護師、薬剤師、栄養士などのチーム医療であるという事です。それでテーマは「身近な病気糖尿病と一緒に考え、一緒に闘おう」にしました。会場では、血糖とヘモグロビンA1cを測定しその場で結果を伝え、医師に説明してもらうようにしました。セミナーでは武田教授の「糖尿病の予防と上手な生活」についての講演と、患者さんを含めた糖尿病チームによるパネルディスカッションを計画しました。

当日は、午前一〇時集合で二時間開催でしたが、八〇個の用意した昼食の弁当がびったり無くなり多くの人が準備に参加していたのだと感激しました。講演とパネルディスカッションの間に、郡上八幡少年少女合唱団のコーラスもあり、入場者は二〇〇人近くあり盛会でした。心配した雨もやみ、シャトルバスで郡上八幡城天守閣広場に登



11月14日の夜、ブルーにライトアップされた郡上八幡城

表すブルーと、団結を表すサークルをあわせました。郡上市の保健師さんが「先生やっだね、良かったね」と両手で私の手を握ってください、感慨深いものがありました。すべてが初めての経験で戸惑う事ばかりでしたが、多くの人達の御協力のもとに、友の会の患者さん達と、医院の職員と一緒にライトアップとセミナーを郡上八幡で

開催する事ができました。会長さんと来年はお城のライトアップは継続したいがセミナーは大変だからもういいね」と話していたのですが、最後の実行委員会の反省会で、皆さんが今回限りで終えるのは惜しい、是非来年も続けて欲しいと言つて下さり、平成二二年度も開催することとなりそうです。なによりその後、平成二二年度の郡上市の特定健診にヘモグロビンA1cが採用されたとの報告を聞き、堀谷医院のスタッフ皆でえらかったけど、やって良かったねと喜び合いました。

って点灯式を行いました。どれだけの人がこの寒い中お城山まで登って下さるか心配しましたが、郡上市長や市議会議員さん、観光客の人達でいっぱいでした。婦人会のさつき合唱団のコーラスの間に、空もだんだん暗くなりみんなのカウントダウンの声の後、郡上八幡城がブルーに染まっていきました。友の会の戸田会長は「十一月四日はインスリンを発見したフレデリック・バンディングの誕生日です。世界糖尿病デーのシンボルマークのブルーサークルは国連や空を

堀谷医院

私の「将来」

松浦 以津子
(旧姓：中島)
昭和42年卒



医者さんになる」という夢を捨て切れずに、高校では理数コースを選択したりした。あの頃には、限らない時間と夢があった。「将来何になりたいか」が通常どおり職業を尋ねる質問であるとしたら、それは、私にとって、もう無意味な質問である。このまま、定年まで現職を続けることができたなら、与えられた健康と気力に感謝、感謝の一言に尽きる。

私が専門とする法律学の分野では、司法改革の一つの柱として、二〇〇四年に法科大学院という新しい専門職大学院が創設された。当時は、学問と実務をつなぐ高度な教育を行い幅広い素養を持った法律家を養成することを、どの法科大学院も目指していた。卒業生の七割から八割が法律家になるものと制度設計され、そこでさまざまな専門分野に精通する法律家を養成することが目標とされた。しかし、設立認可の時点で、申請した大学院のほとんどが設立を認められなかったために、在学定員数は膨れ上がり、現在では、卒業生の三割程度しか法律家になることができない。そのために、在学生の関心は、どうしても、

大学院修了後の試験に合格する力をいかに付けるか、に向かうこととなる。

法科大学院制度は、司法試験受験生を予備校から大学および大学院へ呼び戻したが、他方では、大学院の予備校化をもたらす虞を抱えていると言つても、言い過ぎではない。すでに法科大学院のなかには、司法試験の合格率だけを競い、予備校化してしまっているものもある。このようななかで、社会的弱者に目を向け人間の尊厳のために働く法律家を養成するという目標を見据えて教育に力を注ぐのは、かなりの体力と気力を必要とする。この職務を最後まで全うできれば、目に見えない力に守られた、まったくの幸運である。

しかしながら、「将来何をしたいか」は、私にとってまだまだ意味のある質問である。これから、まったく新しいことを始めるのは無理であるから、今の自分が持っている限られた能力を前提にしなければならぬ。私ができることは何であろうか、から出発するしかないことになる。法律学の分野にも、この時代にあっては、私たちがキラキ

「将来何になりたいか」。「将来何をしたいか」。かつては何度も何度も尋ねられた質問であるが、今では私に尋ねるような人はいない。定年がそんなに遠くなくやってくる年齢に達した以上、当然のことである。病弱な幼年期を過ごしたために、布団の中でどれくらい往診の医者を心待ちにしただろう。「大きくなったからお医者さんになる」と答えたものである。そのたびに、「へえー」と、驚かされた。関心が、自分の健康から、心理へ、そして、社会へ、と移るにしたがつて、高校に入るころには、裁判官になる、と決めていた。しかし、一方で、「お

ラとしていた六〇年代七〇年代の雰囲気をもった学究の徒が日本の大学院で大勢学んでいる。東南アジアや中部アジアからの留学生たちである。名古屋だけでも、法学の分野での大学院への外国人留学生は、一〇〇人を超えるということである。私が今までに得た専門知識とコミュニケーション能力を東南アジアや中部アジアの法整備のために生かすにはどうしたらいいのだろうか。何をどうしようかと、定年を樂しみにしながら、考えている。

南山大学教授



一五年前、夫(三九年岐阜卒)を癌で亡くしました。夫の闘病中は当時出来たばかりの介護休暇制度を使い、望み通り最後まで自宅で過ごす事ができました。闘病中の夫の手記・家族との関わりの様子『生命燦燦・長良』



岐阜岩田坂の実家にて地唄の勉強会をしているところ。左端が著者

川へ還る日のために』安田秀士著を現代創造社からその頃出版しました。

夫の生き方に強く影響を受けていた私は、今思うと亡くなつた直後暫くはうつ状態だったかと思ひます。誰とも会いたくない。いつ死んでもいいと考えていました。救ってくれたのは三人の子ども(末が小六でした)と仕事だと思ひます。自分の気持ちに関係なく有無を言わさず現実の生活に引き戻されるからです。仕事があつて本当に有難いと思ひました。

この原稿を書くに当たつて少

し振り返ってみました。

高校卒業後上京しました。学生時代は大学紛争が始まり授業中でも怪我が担架で運ばれていくような日々で、間もなく大学は封鎖され授業が受けられなくなつてしまいました。私は保育士の国家試験を受け大学を中退する事に決め東京の公立保育園に就職しました。女性が社会に進出し結婚・出産してもやめずに働き続ける時代の始まりの頃でした。女も経済的な自立が必要と思ひました。子ども達

保育園に戻つてから大変役に立つたと思ひます。「子育て交流会」や「お父さんと語る会」等を作りみんなで子育てについて考えあひました。保育園はあらゆる可能性をもつた子ども達のエネルギーのかたまりのような所です。そこから私自身も元気をもらひ、自身の子育てにも役に立つて忙しい中にも充実した年月を送りました。今後保育園は地域の子育ての拠点として益々重要な役割を担つていくと思ひます。

さて、我が子達も皆社会人となり、退職した私は今、全く別の道を歩いています。

小さい頃やつていた琴と新たにお三味線も加えて邦楽に励んでいます。三〇年以上のブランクがあつたのですが、両親がやつていた世界でもありこれからじっくり勉強していきたいと思ひています。時々演奏会に出た

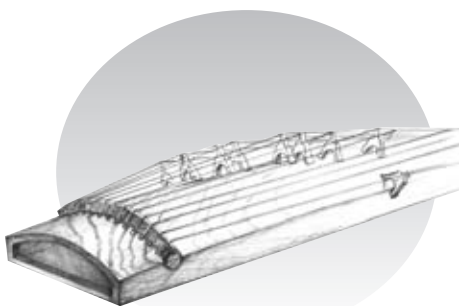
良さが味わえるようになってきました。又合間をみて小学校の放課後教室や科学未来館等でボランティアもやつています。こ

こでも小中高生達から元氣力をもらつています。子育てしながら仕事をしてい

る頃には全くといっていい程なかつた「自分のためにだけ使える時間」があることの幸せをしみじみかみしめています。悲しい事、辛い事等の思ひ出は心のどこかに仕舞い込み、たまにそこからあふれ出てきても、また整理して戻せるようになってきました。還暦もすぎるとそういう術も身についてくるのでしょうか。

一日一日を大切に、人生まだこれから。青春(秋?)を樂しもうと思つているところです。〈宣伝を少しさせて下さい〉

時々岐阜市岩田坂の実家に帰つて何人か集まり、琴・尺八・三味線の合奏の勉強会をしています。仲間が増えていくといいなあと思つています。参加してみたい方・詳しく知りたい方は安田にご連絡下さい。



西洋医学と漢方

山口 英明
昭和42年卒

小児科勤務医として三五年、漢方医として二〇年、西洋と東洋、二つの医学に携わって暮らしてきた。扱うのは同じ人体だが、面白いことに二つの医学の内容は全くと言っていいほど異なっている。

現在、一般的な意味で医療と言えば欧米を起源とするいわゆる西洋医学である。この医学は過去一〇〇年で著しい発展を遂げ、現在でも猛烈なスピードで進んでいる。進歩の理由はサイエンス全体、すなわち生物学、物理学、化学、統計学など様々な学問とクロスオーバーしている



タマスフライフィッシング

そして、専門家達はそれぞれの分野には有能だが、相対的に人体全体が見えにくい構造に陥ってしまった。勿論このような現象に対する反省から、人体を総合的に診る分野を設立されたが、必ずしも成

る事があり、他領域で得られた

成果は速やかに医学に活用されてきた。例えば、人体の深部まで立体画像化するCTやMRI、

低侵襲で精緻な手術を可能とする内視鏡、微生物や悪性細胞

を選択的に攻撃する化学物質などは、決して医療界だけで作り

出された訳ではない。そして、多くの研究者たちは科学の方法

を駆使して日々限りなく細部を追求し、今や遺伝子操作に依

って臓器そのものを作り出すことさえ可能にしようとしている。

しかし、このような発展の課程で医学に関する情報はあまりにも膨大になったため、一人の医

療者の内部で処理できる限界を遙かに超えてしまったのである。

結果、医学は人体の各パーツの機能を基準に数多くの分野に分

けられ、それぞれの分野に専門家が必要とする体制となった。

功しているわけではない。

一方、漢方は二〇〇〇年程前には既に三大古典と言われる医学書が著され医学の骨組みが作

られている。日進月歩の西洋医学からみれば信じがたいことだが、後漢時代の『傷寒・雜病論』

は現在でも座右の臨床医学書として用いられている。その後、新しい考え方が加えられたもの

の、中国では清時代、日本では江戸時代にほぼ完成されている。その医学体系は決して単純ではないが、努力すればひとつの脳で何とか扱える範囲内である。

優れており、科学的に説明できない漢方などとうの昔に消滅してもしかるべきであった。事実、西欧化を急いだ明治政府は、文明化を阻害するものとして漢方を事実上禁止したのである。しかし、東洋の医学は草の根で生き残って徐々に再認識され、今や医学部の授業にも取り入れられている。その理由はひとえに西洋医学と漢方の異質性にある。西洋医学は細部を追求し続ける事により素晴らしい体系を作り上げたが、その分全体を捉えにくくなった。他方、漢方は細部を追求する科学的な方法・技術と関わりを持ってなかった分、生体全体のバランス調節に千年単位で習熟した。つまり、この旧態依然さが逆に再評価されたのである。どうも無用は有用の芽を孕み、欠点は長所の裏に張り付いているものらしい。これは医学という狭い世界の事柄であるが、政治制度、経済システム、芸術・文化など我々の社会を構成する様々な事象も恐らく同様であろう。世界標準、大都市集中、マス・メディアの一方向性など、主に経済効率という理由から、時代は我々にますます単一な思考・行動を強いてくる

漢方の特徴は、治療薬として生薬・漢方薬を使用することにある。生薬とは自然界に存在する植物、小動物、鉱物などを簡単に加工し薬物としたもので、複数の生薬を組み合わせて治療の方向性を持たせたものが漢方薬である。従って、一つの漢方薬には無数の成分が含まれ、その効果も多面的である。漢方の理論も漢方薬の薬効も、千年単位の経験の産物（恐らく幾多の人体実験を含む）で、最新のサイエンスを持ってしても全貌の解明は困難である。

医療全体の診断・治療効率からみれば、西洋医学が圧倒的に

私とポートとの出会いは、岐阜高校在学中に、同級生で一緒

2007年クロアチアにて妻と共に

ポート人生
世界への挑戦と
後輩指導

山田 賢治
昭和42年卒

公立陶生病院副院長

ように見える。しかし人間が関わることに「完璧」があり得ない以上、多様性の種は常に残しておく必要があると思う。個人においても社会においても。

根は百合(ビャクゴウ)という漢方生薬になります



根は百合(ビャクゴウ)という漢方生薬になります



2007年クロアチアにて妻と共に

にバレーボールをやっていた松野康衛君より、「兄がボートの試合を愛知池でやっているのを見に行こう」と誘われたことが始まりである。愛知池で見たボートは、水に映えて優雅に華麗に漕いでいたので、これこそやりたいスポーツだと直感し、「この思いがその後の私の人生を決めた」と言っても過言ではない。大学に行ったらぜひともボートをやるう！と心に決め、慶応義塾大学の合格が判明するや否や、埼玉県戸田の大学合宿所に向き、直ちにボート部（慶応では端艇部と言います）に入部した。

大学時代はまさにボート一筋の生活で、日々の激しいトレーニングにより、心身とも大いに鍛えられた。早慶戦、全日本選手権、更に国内の試合に、二年生からレギュラーとなり、日本一になる目標を掲げ、がんばり続けた結果、早慶戦は負けな

しで、全日本選手権では二年続けて優勝することができた。特に、大学四年では、全日本選手権兼欧州選手権派遣選考会ダブルスカルに出漕して優勝することができた。そして、日本代表に選ばれ、まさに勇んで、デンマーク・コペンハーゲンで開催



2003年フランス・ヴィシーにて（エイト）

された欧州選手権に望んだが、結果は大差のビリで、世界のレベルの高さを肌で味わうことになり、この悔しい思いは、その後の会社生活の間中くすぶり続けた。

大学卒業後、東京海上火災保険（株）に入社しボート部に所属、全日本、国体、実業団等の試合に出場したが、仕事や家庭生活に追われボートには集中できなかつた。五〇歳の時、今後の人生をどのように過ごすかを真剣に考えていた時、ボート仲間よりFASAの主催するWorld Rowing Masters

の生活で、日々の激しいトレーニングにより、心身とも大いに鍛えられた。早慶戦、全日本選手権、更に国内の試合に、二年生からレギュラーとなり、日本一になる目標を掲げ、がんばり続けた結果、早慶戦は負けな

Regatta を知り、欧州選手権での悔しい思いが蘇り、再度世界への挑戦を決意した。その後、自主トレーニングを再開して体を鍛えなおし、二〇〇三年九月フランス・ヴィシーにて開催された世界マスターズレガッタに会社

の仲間と参加したが、残念ながら準備不足もあり最下位であった。しかし、再び世界の舞台に來ることができて大いに感激し、さすがに世界のレベルの高いことを再認識したしだいである。その後、ドイツ、アメリカ、イギリス、クロアチアと出場するにつれて、遠征の慣れとともにトレーニングの方法を工夫し、成績は徐々に向上した。

そのような折、私の出身大学で元会社の先輩（元メルボルンオリンピック日本代表）より、「岐阜経済大学の客員教授兼ボート部監督」を引き継ぐよう依頼された。大変名誉なことであり、私の生きがいであるボート競技において、ささやかであるが貢献できればと思い快く引き受けた。しかし、理論的な裏づけの自信がなかつたので、スポーツを科学的に習得したいと考え大学院を目指した。幸いにも、早稲田大学大学院・スポーツ科学研究科の樋口満教授が世界マスターズレガッタに参加されていたので、同教授に相談したところ、当大学院を受験するよう促され、それから一年間、苦手な英語を主として学習し、何とか合格することができた。子供三人は大学院を卒業し社会人となっていたので一念発起し、勤務先は退職の上、還暦大学院生（卒業時六〇歳）一筋に、若者と共に二年間勉学に勤しんだ。大学院ではスポーツ科学、主として運動生理学、生化学、スポーツ栄養学などを一途に学び、今後のボート競技の指導の一助とし、世界を目指す若者のパフォーマンス向上に役立てたいと考えた。

たクラブ（今年で創部一〇年）であり、その運営方法はかなり独自性が強く、引継ぎには苦勞と苦戦が続いている。何とか私のカラーを出したいと考え、大学院で学んだスポーツ科学の知識を生かしたいが、いまだ実現していない。今後更なる努力を重ね一歩一歩前進し、更にチャンスがあれば、ナショナルチーム等の指導も行ってみたい。

私にはもう一つ夢があり、「世界マスターズレガッタに八〇歳以上で出場したい」との思いである。以前アメリカ・プリンストンにおける当大会において、地元のパトマック・ローイングクラブとの懇親会で、八七歳の選手夫妻と出会い、「本当に人生は楽しい、ボートは楽しい」との発言に私はオーラを感じた。私もそのような心境を感じたいとの思いが強く、ぜひとも八〇歳以上の出場を達成したいと思っている。現在は大学における指導や対応であまり十分にトレーニングできていない悩みはあるが、ボート部員と一緒にトレーニングをすることで部員と若さを共有し、私の夢や思いを伝えながら、将来に備えたいと思っ

ている。

第三者を介する 生殖医療について

—ひとりの産婦人科医として—

吉村 泰典

昭和42年卒



ヒトはあくまで生物であり、ヒトもまた生物の例外ではなく、生殖によって子孫をつくり出す。その一方で、あくまで哺乳動物であるヒトはその生殖能力に限界があり、生殖により次世代をつくり出すことができない場合もある。超少子化社会を迎えたわが国においても、子どもを望むカップルの約一五%が不妊症に悩んでおり、女性の社会進出に伴う晩婚化によって不妊を訴え、医療機関を訪れる女性が多くなってきた。

科婦人科学会の見解に準拠し、医師の自主規制の下で、配偶者間および非配偶者間の人工授精や夫婦間の体外受精が限定的に行なわれてきた。しかし平成一〇年には、実弟の精子および実妹の卵子を用いた体外受精が行なわれたことが報告され、さらに平成一三年五月には夫婦の受精卵を妻の妹の子宮に移植し、妹は妊娠し無事出産したことが明らかとなった。その後も第三者を介した生殖医療実施の報道のみならず、精子の売買や代理懐胎の斡旋などの商業主義的行為が、わが国においても多数みられるようになってきている。また平成二〇年には日本人夫婦がインド人女性に代理出産を依頼したが、子どもが生まれる前に離婚したため、子どもの国籍が不明な状況に陥っている事態も起こっている。インドでは貧しさを背景に、商業主義的な代理懐胎が水面下で拡大されているとされ、女性の搾取に日本人が加担していることは悲しむべきことであるとの指摘もみられる。

このように、わが国の生殖補助医療をめぐる現状は社会に著実に普及している一方、その急速な進歩によりそれを適正に実施するための整備が不十分であり、発生する様々な問題に対応することができない状況にある。生殖医療は世代の継承に関与しており、その治療結果が個体にとどまらず人類に継承されていくという特殊性をもっている。自己決定に基づく生殖医療であっても、子を希望する夫婦とはまったく人格の異なる一人の人間の誕生がある点で、他の医療と根本的な違いがあることを認識することが大切であり、生まれてくる子どもの同意を得ることとはできないということである。さらにこれら医療は、生まれてくる子、クライエント夫婦ならびにその家族のみならず、社会全体にとっても倫理的かつ法律的な種々の問題を内包している。

代理懐胎をはじめとする第三者を介した生殖医療は、わが国で永年築かれてきた親子・家族の社会通念を逸脱する可能性もあり、生まれてくる子の福祉が守られるような十分な配慮が必要であることは言うまでもないことである。また、これら自己完結することができない生殖医療行為に関しては、幸福追求権や自己決定権のみでは実施できるとは思われえない。つまり、卵

子提供や代理懐胎などの医療行為は医学とはまったく次元の異なる問題であり、人権、社会的倫理、法的な観点から議論されるべきである。これら施術の応用の是非は、メディカルプロフエッションとしての学会によって決定されるべきではなく、社会的判断が必要となり、最終的には立法府にて広く議論されるべき問題である。施術を容認する方向で社会的合意が得られる状況となった場合には、学会が医学的見地より実施のためのガイドラインを整備する必要性がでてくる。

時空を超えた絶対的な倫理というものはなく、倫理観とは時代とともに、また技術開発とともに変化するものである。しかし生殖医療において忘れてはならないことは、これら先端医療技術によって生まれてくる子どもの将来や基本的人権である。われわれ医療従事者もクライエント夫婦も妊娠を希求するあまり、生まれてくる子どもの幸福を十分に考えているとはいえない状況にある。通常の医療であれば、学会や施設内のガイドラインに従い、医師と患者が十分にコミュニケーションを図り、信

頼関係を築き、インフォームドコンセントに基づいて治療を行えば問題は生じない。しかし、生殖医療においては、子を希望する夫婦とはまったく人格の異なる一人の人間の誕生がある点で、他の医療との根本的な違いを認識することが大切である。

日本産科婦人科学会理事 長

沖繩と私

若尾 典子

(旧姓・松浦)
昭和42年卒



「アメリカだつて主権在民だろ？日本国憲法だつて、それははっきり謳っている。…あんなたちの民主主義というのは、アメリカだけの民主主義か、といってやったんですよ」

沖繩の那覇市長だった平良良松さんは、アメリカ軍事支配に

抵抗して、こう発言したという（『明日をひらく・沖縄と憲法』ひろぎ社、一九八五年所収）。対談した私は、日本国憲法が適用されていなかった沖縄で、日本国憲法を活かす行動が、命がけで行われていたことを知った。

沖縄が日本に復帰したのは一九七二年五月十五日。その半年後、私は沖縄に移り住んだ。連日のように報道される基地被害の実態に、「ここは戦場か」と戦慄した。初めて直面する「戦争」だった。しかし、沖縄の人々にとり「いまの戦争」は、沖縄戦から続く。

映画「ひめゆりの塔」が首里公民館で上映された翌日、近くの文具店のおじさんに、「ここ（首里）は戦争のとき、大変だったのね」と言った。映画で、幼子の手を引いて逃げていた母が、ふと気づくと、子どもの腕だけを握っていた場面が脳裏に焼き付いていたせいもあった。すると彼は、私が映画を見たことに気づき、いつものなつっこい笑顔が消え、目をそらし、遠くを見ながら、ポツリと言った。「あんなもんじゃ、なかったさー」六月二三日は「慰霊の日」、沖縄戦に散った死者への「悼み」

を沖縄の人々が共有する日である。本土決戦を遅らすために「捨石」とされた沖縄は、一九五二年、あらためて本土から切斷されアメリカ軍事支配下におかれ、一九七二年の復帰後も、在日アメリカ軍基地の七割が狭い沖縄本島に集中するほどに、アメリカ軍基地の重圧を一方的に押し付けられてきた。

ようやく普天間基地の返還が合意された。だが同時に、辺野古への基地建設が決まった。あれから一三年、いまだ辺野古に基地は建設されていない。ある人が、「一三年間もたっている。もう一刻も猶予は許されない。すぐに建設すべきだ」と発言した。なぜ、一三年間も建設されないのか。沖縄の人々が平和を希求する行動を積み重ねているからである。この現実をみない人が「専門家」としてマスコミにのるところに、「ヤマト」の深刻さがある。

基地被害は、沖縄だけではなく。基地あるところ、どこにも存在する。ただ「みえない」だけである。このことを私が実感したのは、二〇〇七年、広島で暮らしていたときに起きた米兵性暴力事件だった。広島での

事件は、すぐに女性の自己責任問題にすり替えられた。ここにも、事実をみることでできない「ヤマト」の恐ろしさが露呈している。

世界最高の軍事力を誇るアメリカは、それゆえにテロによる軍事力のターゲットとなり、市民を守ることはできなかった。武力への依存が武力の連鎖を生む恐ろしさを、九・一一は全世界に示した。それゆえアメリカは、政治の「変化」を必要としたはずではなかったか。

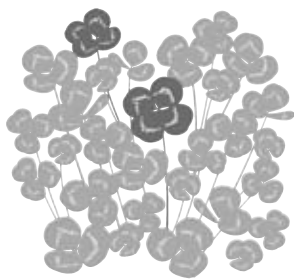
私たちの「いまの平和」も、沖縄の人々の非暴力に支えられている。沖縄の復帰運動は、アメリカ軍との闘いだったが、沖縄の人々は武力に依存しなかった。「平和憲法のもとに復帰する」ことが、沖縄の人々の願いだったからである。九条は、沖縄の人々によって活かされてきた。だから、復帰後の日本は、内部に政治的武力集団を抱えていない。

もちろん沖縄の人々は、基地の存在を、被害という視点からだけ問題にしているわけではない。沖縄基地を発ち戦地へと向かう米兵らにも「チムグリサ」（心痛む）する。そんな沖縄の人々

の平和への希求は「痛みの共有」にある、というのは、琉球大学の島袋純さんである。指摘されて私は、九条を思った。九条は、敗戦当時、日本人々が「痛みの共有」をした「果実」ではないか、と。そして日本人々は、九条を維持してきたという点で、「痛みの共有」を実践してきた経験をもつ。

しかし、政治が「利益の共有」として動いてきたことによって、「沖縄の痛み」を切り捨ててもきた。とすれば、いま、求められていることは、新たな「痛みの共有」である。沖縄の痛みを日本の痛みとして提示できるか。問われているのは、私たちである。痛みを共有できる政治をつくりだし、辺野古基地建設を迫るアメリカに、平良さんの言葉を返したい。「あなたたちの民主主義というのは、アメリカだけの民主主義か」と。

大学教員



■一五歳の春に故郷を離れ、岐高そして名大に
今年で私も還暦を迎える。一五歳の春、ふるさと飛騨金山（下呂市）を離れて岐高に進学するために忠節橋の近くに下宿するところになった。あれからもう四五年。子供の頃、ふるさとの豊かな自然の山や川で飛び回るのが大きかった。ターザンごっこ、昆虫採集、山クリ拾いだ。家のそばに馬瀬川が流れ、鮎釣りに興じた。中学では「飛騨の小天

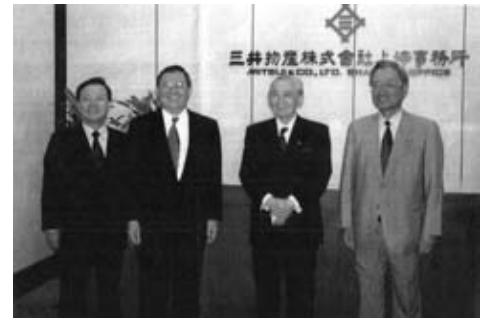


留学時代（天安門広場にて）

「飛騨の小天狗」
中国を駆ける。
星屋 秀幸
昭和44年卒

「狗」を目指して剣道部で体を鍛えた。私の亡父は鍛冶屋で戦前、戦中と続いた「関の刀鍛冶・刀匠名は義長」であった。溪流での鮎の友つりが唯一の楽しみで八七歳まで現役として溪流で「名人芸」を私にも指南してくれた。貧乏な家の五人兄弟の末っ子に生まれ兄弟は皆、中卒就職であったが、一人ぐらいは大学までと家族の温情で進学が道が開かれ、父と同じく職人を目指すはずの私は波乱の人生を歩むことになった。

一九六九年（昭和四四年）は学園紛争が激しく東大入試が直前に中止になった。幸いな名大に何とか入学できた。しかし名大でも直ぐ全学ストライキとなり、休講が続く。学生寮にいて連日デモに動員された。学生運動になじめず、逃げ出すように台湾に渡り、偶然、旅先で台南 Y M C A 総幹事の王英忠氏と知り合い、そこでボランティアで日本語教師の助手をする機会を得た。台湾青年と交流し、異国の歴史を知り、中華文化の洗礼を受けた。王英忠氏から台湾で最も尊敬される日本人として、戦前、戦中、戦後、難難辛苦の中、画期的な「烏山頭ダム・嘉南大圳」の水利事業



竹下登元首相、森ビル・森稔社長と（左端が筆者）

を完成させ荒地を大穀倉地帯に変えた土木技師八田与一氏の歴史秘話を聞き、いつかアジアの人たちと触れ合う仕事をしたいという思いが湧いた。

■三井物産入社、

北京留学と天津駐在

大学専攻は土木科だったが、海外で仕事をするには商社だと思いい、七四年三井物産に入社した。営業見習いで厳しくしごかれながらも、「アジアの時代到来」を確信し中国に行く機会を窺った。七九年、会社制度で念願の北京留学のチャンスを得た。当時の中国は「文革」の後遺症で社会は疲弊し、人々の生活は貧しく日本とのギャップに愕然とした。二九歳にして二年間、中国語を学んだ。帰国直前に習い

立ての中国文で「我的家郷（我が故郷）」なる作文を寄稿したら「人民日報」に掲載され、外国人として初の快挙と地元「中日新聞」でも大々的に報道され、両親は新聞沙汰で息子がまさか世間を騒がせたのではと心配したという。

留学後の八一年、新婚早々に天津駐在を命じられた。当時の天津の日本人総数は二〇人足らずで家族帯同は私だけだった。七六年唐山地震で天津も大被害を被り、五年を経過するも復興は進まず何万人もの市民が不衛生な仮設の小屋に住んでいて悲惨な状態だった。天津駐在では生活環境は劣悪だったが夢中になって仕事に取り組んだ。渤海湾石油開発用のジャケットの据付工事、ヘリリース事業、カラーテレビ国産化事業など。中国の会社リーダーは堂々として見識があり尊敬できる人物が多く、中国の急激な発展を予感させた。妻には娯楽施設もない殺風景な街で、中国語も分からず不自由な生活によく辛抱してくれたと感謝している。

■厳寒の大慶と灼熱の

タクラマカン砂漠で

八四年帰任後、石油用鋼管の

輸出を担当した。中国の陸上油田は遠く離れた辺鄙な地域に偏在し、油田への外国人の立入りは厳しく制限していた。大慶は新中国建国直後に黒龍江省で発見された大油田。大慶は北京から鈍行列車で行くところ三六時間。冬には零下二〇度以下にもなる。

商談の後は、マオタイ酒で酔いづぶれるまで乾杯。更に八〇年代に発見されたタリムガス田は新疆タクラマカン砂漠にある。北京からタリムまで四〇〇km以上、五〇度近い灼熱の沙漠をはるばるとリュックサックに資料と商談提案書をいれてパイプを売り込むのはハードだったがロマンもあった。少数民族の伝統衣装をまとう葡萄園で踊るダンスは旅情をかき立てる。現在ではタリムの天

然ガスは四〇〇〇kmのパイプラインを通じ北京や上海に供給されている。

■中国経済の中心で

上海支店長八年

九五年、四五歳で上海現地法人社長を命じられ家族四人で赴任した。上海高度成長の開始時期で、会社業績も順調で、中国の経営拠点を作った。宝山製鉄との包括的業務提携、米中合弁の上海GMへの鋼板のサプライチェーンの立ち上げなど画期的な仕事にも携わった。一方、地域社会への貢献として上海日本商工クラブの会長に就任し、貿易投資の促進や文化交流などにも関わった。帰任の際、思いがけず上海市の韓正市長から白玉榮譽賞を拝受した。中国は非効率な計



世界一のビル上海環球金融中心（上海ワールドファイナンシャルセンター）

画経済から鄧小平の英断で市場経済に転換した。以来三〇年間、外資導入で発展を継続し日本のGDPを今年追い越す。中国は「文革」という試練を乗り越え、経済強国になりつつある。日本復活の鍵は中国と正面から向き合い、「共存共栄のビジネスモデル」を作るに尽きると思う。

■世界のビル

上海環球金融中心

帰国後まもなく三井物産を退職、上海で森稔社長と知り合えた。縁で転職した。森ビルは東京の不動産開発の会社で、赤坂アークヒルズ、六本木ヒルズ、表参道ヒルズなどを手掛けてきた。早くから上海浦東開発に注目し九四年に高層ビル用の土地契約をした。上海環球金融中心は一〇一階、四九二メートルと巨大な高層ビルで、アジア金融危機などで工事が中断したが一五年目の〇八年に竣工した。上海には高層ビルが多数林立しているが、上海環球金融中心は世界最高のビルとの評価を受け、新名所として毎日多数の観光客が押し寄せている。今年の五月から上海万博が始まり入場者は一億人を突破するだろう。最後に、お陰で還暦まで健康でいられた。今後

もこれまでの経験を生かして何か貢献が出来るよう微力を尽くしたい。ふるさとの皆様、お世話になった方々、そして両親・家族に心からの感謝をしたい。

良きパートナーにめぐまれて

後藤 秀実
昭和46年卒



月日ははやいもので高校を卒業してはや四〇年になろうとしています。この間に多くの友達に出会っております。その友達も高校時代、大学時代、そして就職後と長くつきあっている友達もいれば、途中で音信が途絶えた友達もいます。これらの友達は様々な意味において私のパートナーであります。

パートナーの最小単位は家族であり、家族は最も長くつきあ

う最も重要なパートナーであります。その一方で、私が二五年間という長きにわたって勤務しております現在の職場（名古屋大学医学部附属消化器内科）にも、私の多くのパートナーがいます。医局において最年長である私は、若き医師達によって支えられています。私が専攻しております消化器内科におきましては、昨今の内視鏡などの機器の進歩は目覚ましいものです。このような最新の機器を用いて診断・治療を施行しているのが医局の医師達であります。その医師達の中にも、診断・治療の技術や機器の開発に携わっている者、この技術を教えている者、また技術を習っている者など、それぞれ立場は異なっていますが、すべて私の良きパートナーであります。

初めて良い医療を提供することが出来ます。このように医療には多くのパートナーの存在が重要です。しかし、最も多いパートナーと言えやはり患者さんです。患者さんが良きパートナーとなって頂くことが、最良の仕事ができる状況と考え、常にそのような関係を作ることを願って診療をしております。

大病院の医局には人事交流をしております関連病院があります。私どもの消化器内科は六〇以上の関連病院を有しており、その病院には大学を出たばかりの医師達から私の先輩の医師達まで、多くの私のパートナーが勤務されています。このようなすべての医師達あるいはパートナー達によって、名古屋大学の消化器内科グループは形成されております。

前述しましたように最近の医療機器の進歩は目覚ましいものです。その要因として新しい工学系の知識や技術が、医療機器に導入されたことが挙げられます。現在の消化器の分野で工学系の技術が最大限に発揮された機器がカプセル内視鏡です。私自身この内視鏡の発展に力を入れておりますので、工

学系の先生方と一緒に話し合うあるいは仕事を増やす機会が増えています。名古屋大学工学部や名古屋工業大学の先生方をはじめとして他大学あるいは医療機器関連会社の開発の方々などが、私の良き相談相手でありパートナーになっていただいております。この関係はこれからも続けていきたいと考えております。

私は幸いにもアジアにも良きパートナーを作ることができました。台湾、香港、韓国、中国、シンガポール、タイの医師達です。特に台湾大学には十回以上も訪問しており、その結果若い医師達による交流を始める事ができました。今後も内視鏡手技や研究などを通じ、彼らと仲良く仕事ができればと思っております。

このように、良きパートナーの存在があったからこそ、今の自分があり、今まで楽しく仕事できたあるいは現在もできているのだと感謝しております。そして、これからも良きパートナーを求めていくつもりであります。



日本の医療改革は
岐高同窓の協力で

太田 秀樹

昭和47年卒



■はじめに

医療崩壊が叫ばれている。世界のいかなる国も経験したことのない超高齢社会は、健全な社会保障の存続に翳りを落とし、国民皆保険医療制度を堅持できるかの不安は募る。

かかる状況下で、在宅医療が医療改革切り札として脚光を浴びている。新聞に目をやれば、「在宅ケア：」、「介護保険：」、「在宅ホスピスケア：」と、ヘッドラインには在宅医療に関する記事が目立つ。

在宅医療の話題があがると「昔は往診をおねがいできたのにね」と、往診をなつかしむ声を聞く。昭和四〇年代まで、往診は町医

者の当り前の役割だった。発熱や腹痛などで、気楽に往診を受けられた。しかし、今、国が推進しようとしている在宅医療は、当時の「往診」とはいささか異なる。

現代の在宅医療は、訪問診療と訪問看護を基本要素とする。訪問診療とは入院中の回診の役割を担い、病室を患者の自宅と看做して行う。極論すれば、病院の壁がなくなり、地域全体に病院機能を持たせようとしたものである。あらゆる医療系サービスに機動力を持たせ、求められる場所に必要な医療を二四時間体制で届ける。これが在宅医療なのである。

■在宅医療推進の社会的背景

二〇一五年から、七〇〇万人とも言われる団塊世代が高齢者の仲間入りをし、一〇数年後には三五〇〇万人（国民の三人に一人）の高齢者が暮らす国となる。介護なしに命をつなぐことができないう要介護高齢者は五〇〇万人。そして、三〇年後には、年間一七〇〇万人が命を落とす多死時代が到来する。ところが、その年に誕生する赤ちゃんは八〇万人以下。一人の子供の誕生に對して二人の年寄りが増える

というびつな社会となる。

合計特殊出生率とは、女性が一生の間に生む子供の数である。先進諸外国と比較しても著しく低く、1.3～1.4程度。この数字は、三組の夫婦、男女六人が四人の子供しか残せないということの意味する。すでに人口減少社会に突入しているが、高齢者を支える生産人口を維持することは、もはや絶望的で、従来の感覚で高齢者の医療・介護をイメージすることはできない。

一方、三〇年さかのぼると、二人に一人の高齢者が自宅で看取られている。今日の日本社会を暗示するような『恍惚の人』（有吉佐和子著）がベストセラーとなった時代である。高齢者に介護が必要となったら、老人施設や医療施設に収容され、効率を求める集団的処遇のなかで召されることになるが、この状況は、人間の尊厳に照らし合わせて、本当に幸せなのであるうかと、国民も疑問を感じるようになってきた。在宅医療の意義を、単に財政論から議論すべきではない。日本人の生き様にかかわる医療だからである。

■医療のパラダイムシフト

科学技術の進歩は、医療技術

にも過剰な期待を生むこととなる。遺伝子が解明され、臓器移植も可能となったが、不老長寿は幻想である。人は若い、必ず死を迎える。長寿を目指す医療から天寿を叶える医療へ、命の量から質へ、パラダイムが大きくシフトしている。急性期医療から終末期医療へ、根治医療から緩和医療へ、医療への期待も変わってきた。施設医療から住み慣れた地域での医療へ、在宅医療に新たな意義と価値が生まれてきたのである。

平成一九年、国立長寿医療センター大島伸一総長は、ナショナルセンターのミッションとして在宅医療を推進すると言明し、在宅医療推進会議を召集した。その下部に小生が作業部会を組織し、望めば、誰でも在宅で最期を迎えられるよう、システム作りを検討した。全国規模で在宅医療の実態調査を行い、在宅医療に熱心な医師は在宅医療啓発に向けたさまざまな市民的活動に熱心であることもわかったが、ここで、驚きの事実を知ることとなる。なんと、在宅医療推進の地域のリーダーには岐高卒が圧倒的に多いのである。

東京都国立市で医師会長を務

める新田國夫氏（昭和三八年卒）は、東京都における在宅医療推進の核となっている。東海地区での在宅医療推進の要となっているのは、小笠原文雄氏（昭和四二年卒）で、彼は大島伸一総長と医学部同窓という縁を持つ。さらに、各務原市の長縄伸幸氏（昭和四一年卒）、岐阜市の高木寛治氏（昭和五〇年卒）らも、在宅医療の先駆的実践者で全国にその名を轟かせている。

■おわりに

自治医科大学に勤務したことから、栃木県で在宅医療に力を入れる町医者始めて一九年がたった。在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワークのメンバーとしても、在宅医療の普及に尽力しているが、訪問看護を機軸とし、グループで推進する二四時間体制のシステムは、はからずも平成一八年に制度化した在宅療養支援診療所の要件をすべて満たすものであった。試行錯誤のなかで行ってきた在宅医療が、日本の医療モデルのひとつとして評価を受けたのである。現在、社団法人 全国在宅療養支援診療所連絡会事務局長を仰せつかっているが、本連絡会の組織化に、新田氏、長縄氏、小

笠原氏ら岐高同窓による強力な支援があったことはいままでもない。

在宅医療は日本の医療不信を払拭し、医療再生の入り口になると信じている。心を一つにして協力しあう岐高卒は、たとえれば、まさしく「三本の矢」である。地域の、岐阜の、そして、わが国の医療改革が、岐高同窓の手によって成し遂げられるような、そんな予感がしてならない。

社団法人
全国在宅療養支援診療所連絡会
事務局長

異国に見つける日本、 そして岐阜

坂井 佳史

昭和47年卒



アメリカより始まった海外勤務が、延べ五カ国、そして通算

一九年になりました。時の過ぎる速さに驚くことは無くなりましたが、散歩に出て遠くまで来てしまい、気がつくと夕暮れ時で心細くなった気分似ています。そんな時、ふっと通り過ぎる風景に日本を見つけると、つい心懐かしく思います。

例えば、古い建物に囲まれて学生が多く住むボストンは京都に似ており、丘陵と湖が続くイギリス湖水地方は信州安曇野の如くあり、海辺から山裾まで別荘やホテルが連なるフランス紺碧海岸は熱海か。また、アドリア海に沿ってクロアチアの狭い道を行けば、静岡県三ヶ日を思い出しました。

そして今、縁があつて暮らすオーストリア。アルプス山脈に接して海を持たない小国は、当に欧州の岐阜かも。谷間を通る清流に並んで自動車道を進むと、人口一五万ほどの小都市ザルツブルグが見えてくる。ザルツァハ川が新市街と旧市街を分け、川の横にはミラベル宮殿、そして美しい公園が宮殿を取り囲む。公園から旧市街の端にある山を見上げると、頂上にはホーヘンザルツブルグ城が聳えている。この様に山、川、公園、城が揃

うと、つい岐阜を想ってしまうのは、私だけでしょうか。

ご存知のようにザルツブルグはモーツアルトが生まれ育った街であり、そのことを一九世紀より喧伝してきたとのこと。モーツアルトの生家は勿論、昔ながらの街並みを良く保存し、モーツアルトに由来する音楽祭が有り、そして毎夏に音楽祭が開かれる。古いこと、小さなことを恥とせず、街に誇りをもつ姿勢に感心します。

また、風景や街並みに日本を見るだけでなく、鮭を始めとする日本料理の海外進出には眼を見張ります。欧州でも彼方此方に日本料理を売りにするレストランが在り、美味しそうに食事する人々が賑わう。時折見掛ける回転寿司は、ランニング・スシ (Running Sushi) と呼ばれることが多いのだが、なぜか鮭が徒競走する姿を想像して面白く感じます。

ただ、本格的な日本料理を提供する店は稀で、例えばコリアンダーが入った味噌汁など、不思議な料理が多くあります。そうそう、北欧の鮭は鮭ばかりで、ご飯の量が矢鱈多く、全て食べると胸焼けしてしまふ。そこで、

適量にしようとか飯を横に避けておいたら、終いにはお茶碗一杯になるほど。数年前、日本政府が海外で正しい日本料理を提供する店のみを承認するスシ・ポリスなる制度を検討したと聞きます。しかし、姿を自在に変えて世界に広がった日本料理にこそ、むしろ学ぶべきところが多いのでは。

さて、此処で私の住むウィーンを紹介したいと思います。古くより音楽の都として知られるこの街では、夜毎に幾つもの音楽会が催されます。冬は舞踏会の季節で、燕尾服やイブニング・ドレスの着飾った男女が明け方までワルツやポルカを踊り狂う街。幾つもの宮殿と無数のカフェ、その合間をゆつくり走る馬車、今も街の至る所に世紀末の印象が残ります。

オーストリアと日本の歴史を振り返ると、一八六九年一〇月一六日に外交樹立を目的としてアントン・ペッツ男爵が来日、明治天皇に拝謁している。その際にはウィーンで製造されたピアノ、ベーゼンドルファーを献上。そして一〇月二〇日には、このピアノを用いて同行の使節団員による御前演奏会が催され、

屏風を隔てて陛下はヨハン・シユトラウスやメンデルスゾーンの曲を聴かれたそうです。

そして、ウィーンには東京と同じく二三区があり、その中でも一三区は岐阜市と姉妹都市の関係にあります。また昨年五月には、ウィーン・フィルが本拠とする楽友協会ホールにて、岐阜交響楽団の遠征公演がありました。楽団員だけでなく、岐阜から応援に来た人々もあり、和服を着た男女も多く見られた。また、日本人だけでなく、オーストリア人や他国の人の姿も多数有り、ニューイヤール・コンサートで有名な、あの黄金の大ホールが一杯になりました。

最初に演奏された團伊玖磨作曲「長良川」では、途中で「おばば、どっこいさやるな」の旋律が流れ、驚くと同時にとても嬉しく思いました。

その後はウェーバー「クラリネット協奏曲第一番」、ドボルザーク「交響曲第八番」、そしてアンコールにシユトラウスのポルカ「雷鳴と稲妻」が演奏されると、物凄い拍手。全ての演奏が素晴らしく、岐阜県人であることを誇らしく思った一夜でした。

余談になりますが、ホールの中でひとときわ目立つ和服の婦人が居ました。聞けば、岐阜から来た芸者さんとのこと。小柄なのに着こなしも、結び上げた髪もキリッとして、周囲の視線を一身に集めていました。幕間や終演後には次々とオーケストラの人が彼女に声を掛けており、オーケストラと並んで其の夜のスターだった。

かつて、大先輩の駐在員から「海外に暮らすのが長くなるほど愛国的になるよ」と言われたことがあります。確かに岐阜を愛する気持ちが益々強くなっています。ウィーンに岐阜の良さを知らせることが出来たのなら、日本の中で岐阜をもっと自慢したいと思う。地方都市の衰退を見聞きしますが、都市の個性を打ち立て、永く隆盛を保つザルツブルグやウィーンは参考になるのでは。

過去を懐かしむばかりでは駄目ですが、高校生の頃、岐阜市民会館で開かれるコンサートに出掛けることは大きな楽しみでした。両親と一緒に聴いたオーケストラではサン・サーンズやサティの名前を知り、友人と聴いたのは五つの赤い風船や井上

陽水を始めとするフォーク・ソングだった。そしてまた、建造物として美しい市民会館の中に在った喫茶店で、デートしたことも忘れ難い思い出です。こうした施設が将来にも活用される、そんな豊かな時間を過ごせる街は素敵だと思います。

何だか題目とは随分異なる内容になってしまいました。どうぞご容赦下さい。

保健所長として 開業医として

浅野 純一
昭和52年卒



私は、岐阜大学医学部を卒業後、岐阜大学医学部小児科に入局し、当時の折居忠夫教授のご高配により、鳥取大学脳神経小児科に国内留学をさせてい

ただきました。

鳥取大学では、さまざまな小児の神経疾患、てんかん、発達障害の勉強をさせていただきました。その後、岐阜大学病院で助手として、さまざまな小児神経疾患の診療に当たるとともに、当時の岐阜市中央保健所・岐阜市南保健所で、四か月健診や一〇か月健診で発達に心配のあるお子さんを経過観察し、正常・異常かをスクリーニングする仕事をさせていただきました。

大学で医学博士の学位を取った後、折居教授のご高配で、行政（当時の岐阜市中央保健所）に勤務する機会を得、岐阜市保健所長を四年やらせていただきました。保健所長の仕事の醍醐味は、システムを作れることで、現在の発達相談センター「あおぞら」の立ち上げ、小児夜間急病センターの立ち上げに協力できたのは、何よりの喜びです。保健所長時代の一番の思い出は、ある岐阜市内の幼稚園の送迎バスの運転手さんが、ガフキー五号の結核患者さんだった事件です。

当時の中市民健康センター所長（現在、羽島でご開業）の五年卒浅野直美先生の強力なバックアップで、保護者説明会を何度も行い、幼稚園児百数十名のツベルクリン反応を二度行いました。幸い幼稚園児の感染者はありませんでした。

四五歳になった時、このまま行政に残るか、開業するかで、悩みました。やはり臨床の楽しさが忘れられず、思い切って現在岐阜市の茜部で小児科を開業しました。今年の十一月で開業六年目になりますが、毎日楽しく、診療に当たっています。先輩の先生のアドバイスで、脳波計を導入し、五〇人近い人かんのお子さんや、軽度発達障害（ADHD）や高機能自閉症児の診療もしています。小児科医は、お子さんはもとより、お母さんとの信頼関係がなければ、やっていけません。お子さんや、お母さんの笑顔を活力にして、頑張っています。

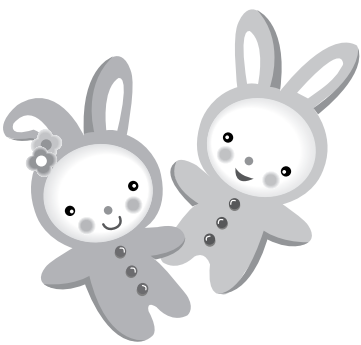


災い転じて 福となつた？

阿部 明美
(旧姓：安田)
昭和52年卒

始めに苦い思い出。大学を落ちたこと。私は井の中の蛙だった。自分の実力を客観的に見ることもなく、受験対策を練るわけでもなく、脳天気受験して当然ながら落ちた。あの頃、気力は尽き果てていた。とにかく岐阜を出る。東京は嫌だ、京都へ。それだけがはっきりしていたことで、受かっていた大学に進んだ。災い転じて福となる？ なったかな？

以来、岐阜を離れて暮らしてきました。離れて暮らしながら、心の奥底には、いつも岐阜があった。今もある。そびえ立つ緑深い金華山、頂上には小さな岐阜城、光を反射して「こうこう」と音を立てて



流れる長良川。そして岐高。高校生の私がいる。テニスボールを打つ音が聞こえてくる。

日々の暮らしに忙しくほとんど帰らなかつた。帰らなかつた分だけ、心の中心にこの風景がしっかりと根付いていった気がする。

岐高はあこがれの高校だった。入学前の春の日、ひとりで電車に乗って訪れた。中に入る勇気もなく学校の周りを一周して、ひどく満足して帰ったことを覚えている。

岐高での三年間、友だち、恩師、部活、恋愛、そして勉強。青春のすべてを体験し、私には生涯最高のひとときだった。

友だちには昨年久々に再会した。温まった旧交は今後さらに温まる予定。人生の雑事をそろそろ終えていよいよこれからまたあの頃のようににぎやかにやるつもり。

恩師代表は浅井克彦先生と山本昇先生。浅井先生の授業は、私の職業上の原点となっている。山本先生は三年間心の支えだった。

部活動は軟式テニス部。運動神経はたいへん悪い私だが、岐高のテニス部だからなんとか全うすることができたと思う。とにかく

く下手だった。そしてとにかくテニスが好きだった。真っ黒になつてどたとたと(本人の気持ちとしては颯爽と) 白球を追う。このうえもない充実感だった。真夏にやかんから飲む水のおいしかったこと。精神的に追い詰められた日、ひとりで早起きしてコートに来て、重いローラーをかけた。典型的な青春ドラマの一場面を、大まじめに体験できたのもテニス部のおかげ。もうひとつのおかげ。下手なわりには肩幅だけりっぱに成長した。「肩幅が広がって前がみえねえなあ」 社会人一年生のとき、いしむるな先輩がいた。前の席は私。恥ずかしくてテニスをちょっと恨んだ。これもなつかしい思い出。恋愛と勉強は省略。

現在栃木県に暮らしているが、私の日常で「岐阜」という言葉に出会うことはめったにない。「岐阜」という言葉にいたってはほぼ皆無。「私の出身は岐阜なんです」聞かれてもいないのに、自立的につけ加える。可能なら「高校は岐阜高校、岐阜です」と続く。岐阜に生まれ、岐阜に育ち

岐高を出たこと、これが私のアイデンティティの基礎となっている。岐阜ハンザイ!

アジアの混沌 ベトナム編

川島 均
昭和52年卒



ベトナム ファンティエットにて(左が筆者)

海外駐在も四ヶ所目で通算二年、香港からバンコック、青島、そしてホーチミン。商社と言う職業柄、海外駐在は当たり前ですが、「またアジアか」と言いつつ実はアジアが大好きな私。で、つけたタイトルがアジアの混沌…ベトナム編であります。さて、私岐阜高校を昭和五二年に卒業、川島均と申します。最近、「不毛地帯」と言うドラマが人気ですが、かく言う私も

老岐正に憧れ、商社に就職。私の場合にはドラマの様な華やかな仕事とは異なりアジア中心の泥臭い仕事、商売求めてアジアを翔る商社マンとは言い過ぎて、アジアをうろつくフーテンの寅さん、と言う所でしょうか。アジアと言いましても極東日本から西は中近東、南はインドネシア、中印の二超大国を含み、懐も奥行も深い地域にて暮らす人々も実に様々。東南アジアの国々は多民族国家ではありますが基本的にコアの民族を中心に国が成立しています。ベトナムは京族が九〇%、タイがタイ族、ミャンマーはビルマ族。中・印の様な超大国の場合は国民意識の確立にはイデオロギーが不可欠ですが、東南アジアの場合はその点

が実に緩やか。主民族を核に少数民族がふわふわ集まる感じで、これがいかにも南国風。しかしそれでも核は必要で、タイの場合は王室、ミャンマーは軍事政権。ベトナムの場合は四〇年に亘る民族独立の戦いの中で国民意識が確立されたと言えるかと思えます。悲惨な戦争の歴史を持つベトナムですが実に活力に満ちた国です。私が勤務している工場は八五〇人の従業員の内九割が女性ですがシーズンともなれば毎週二、三組のカップルが結婚式を挙げ、それが産むわ、産むわ。中国ほどの産児制限が無いからですが、人口が国力である事を強く実感する国です。ですから街中を歩いてもお年寄りや殆ど見かけない。街中を歩く、と今簡単に書きましたが、ホーチミンの街中を歩くには普通の日本人であればかなりの気合と根性、テクニクが必要でこの街だけで二〇〇万台ものバイクがあり、まさに街中はバイクの洪水。それがアジアの混沌宜しく交通法規も何のその、一方通行の逆走から信号無視、何でもありです。歩道もバイク走行は可です。歩道もバイクから身を守るには常に周りを注視しつつ、ゆっくりと(走ると危険。バイクは歩く速度を予測して歩行者をよけます)、ゆっくりと歩く事が肝要。貴方がけてバイクが突っ込んできても慌てず、騒がず。相手がよける事を信じてゆっくりと…保険は無いので十分注意を。自分の身は自分で守る、海外安全管理の基本を身をもって実感できる事でありましょう。バイクはまさにベトナム人の生

活には欠かせない乗り物で、子供の学校の送迎にお母さんがバイクで来るのはよく見る光景。東西問わず母親は強いものです。ベトナムでも女性の存在感は圧倒的で、四〇年の戦乱の中、家庭と国家を支えたのが彼女達です。ですから強くて当たり前です。日本では「亭主関白神には（山の神）勝てず」ですがベトナムはそれ以上。「ニヤツヴォニョーイ」、意味は「妻が一番、神様二番」となります。東南アジアは基本的に母系社会ですがここベトナムも同様で道沿いの屋台で昼から暇そうにコーヒーを飲んでいるのは全部男、傍らでてきぱき働いているのは皆女性。これがベトナムの街角の風景です。我社もベトナム人トップは女性で朝の会議では二名の男性幹部をガンガン叱り飛ばしています。しつかりモノのベトナム人女性に対抗するのは至難の技でありましょう。

そんな「カカア天下」どころか神様より強いベトナム女性。「日本人男性K氏五二歳、日本に妻子を残し単身赴任中、ホーチミンのとある酒場の女性と…」名門岐阜高校の会報にこんな話是如何なものかとのご意見もありましようがまあお聞き下さい。神様より強いベトナム女性ですが体型的には小柄で細身。京都はタイ、クメールに比べ色も白く東南アジアの中では美人の国でしょう。東南アジアでは大体オトコは相対的にナマケモノが多く、(アジアの男性諸氏、ゴメンナサイ!)よって普通に仕事をしているだけの日本人男性を見るだけで「彼ってなんてマジメなの!」となってしまう訳です。無論何よりも重要なのは「カネを持っている」と言う事実。ベトナムの最低賃金は一〇〇ドルくらいですから日本の物価感覚で言えば一〇分の一以下。日本のオジサンを持つお金が幾らかはそれぞれでしょうがベトナム人から見ると高給である事は間違いないです。そんな日越経済格差に加え単身赴任による日本の奥様との遠距離恋愛ならぬ遠距離倦怠感が相乗効果を発揮、ホーチミンの夜の巷に沈没する日本人男性が毎年のように出るのも当然といえは当然。飲み屋のネーチャンの甘い言葉に騙され、晴れて迎えた定年退職。長年働いて頂いた退職金を彼女の言うベトナムの新事業につき込むと言う話も枚挙に暇があり

ません。新会社を立ち上げ、口八丁手八丁の彼女らを事業の共同経営者にしようものならそれこそケツの毛まで抜かれてハイ、サヨナラ。相手は四〇年の戦乱を生き抜いた海千山千のベトナム版肝っ玉カーチャンに育てられた百戦錬磨のムスメたち。日米安保の下、平和ボケで育った日本のボンボン・オジサンの敵う相手ではありません。カネの話で揉めようものなら、ありとあらゆる禁じ手、反則、泣落し、究極技のスットボケをくらひ、素っ裸にされて叩き出されるのがオチであります。

人、屋台、バイクが渾然としたホーチミンの夜。まさにアジアの混沌であります。この混沌の夜の街に、ベトナムのネーチャンにムシラレ、日本の嫁さん家族に見捨てられた寂しいオジサンがどれだけ彷徨していらっしやることやら……。

そんな可哀相なオジサン方のご冥福をお祈りしつつ、筆を置く事と致しましょうか……。

へ? そういうお前が一番危ない? (ご意見ごもっとも!)

アジアの混沌・ベトナム編 結論 「家はカカ(嫁)でもつ」 やっぱ嫁さんと家族が一番で



人間教育

熊崎 盛敏
昭和52年卒

すな!
(注:「嫁さんが一番」のくだり以外はギャグ話としてお読みくださいませ)

「電車の中で、幼稚園と小学校低学年くらいの年齢好の子ども達が遊んでいました。昼間の電車でしたので、あまり混雑していません。そのため通路を走り回ってきやあきやあとはしゃいでいました。それを見かねた年配の女性が『電車の中は多くの人がいるので、走ったり、大声を出したりしたらだめですよ』と子ども達に注意をしました。すると近くにいた若い母親が『子どもなので仕方ないんです』と、ばつが悪そうに応えました。年配の女性は、その言葉にやや表情を険しくして『それはおかしいですよ』と言い、続けて『子どもが走り回っていたら、まず母親のあなたがわが子に注意をするんです。多くの人がいる電車の中では、迷惑になるからだめですと教えるんです。それに対して、周りの私たちが、子どもなので仕方ないからいいですよと応えるのです』と話されました。

同じことが学校でも観られることがあります。授業中にノートも開かず他事をしている子どもがいます。担当の教諭に尋ねると『あの子は何回言ってもきかない子ですので仕方ありません』と応えます。指導者が仕方ないと言うのは、責任の放棄に他なりません。私たち教師は、そういう子どもへの対応に苦慮しながら自分の指導力を高めるのです。

親や教師など、子どもを取り巻く大人には、時代の流れに流され見失ってはいけない子育ての根っこがあります。その一つ

が、親として、教師としての責任です。子どもに対して、愛情をもって接するというのは、責任のある言動を大人が示すことではないでしょうか

私は、現在教師をしています。教職に就いて三十年あまりになります。その間、教育の本質を追い求め、その難しさに打ちのめされてきました。

近年、私が特に胸を痛めていることに「家庭教育」と「不登校」があります。前述の文章は家庭教育を含めた大人の在り方について述べたものです。私も子どもをもつ親の一人です。成人となった二人の子どもと高校生の子どもも三人がおります。三人の子どもは共に随分大きく成長しましたが、私の親業は成長どころか迷うことの連続です。

現在、小中学校の子ども達の保護者は、私の教え子の年齢になっていきます。機会を見つけては「父親の在り方・母親の在り方」を語ります。先日、父親の在り方として次のような内容を話しました。

一、わが子を信頼する
父親は子どもに対して自信をもちじっくり見つめる事。

二、父と母は接し方が違う

父と母は、子どもを愛するという点では首尾一貫、あとは別。個性の違った夫婦が少しずつ違ったふれ方をする中で子どもは巾の広い厚みのあるものの見方・考え方を獲得する。父親は自分の考え方に基づき自然のままに技法的でなく子どもとふれる事。

三、生き方それ自体から学ぶ

遊園地へ出かけることもよいことです。でも、それ以上に父親の生き方にふれることにより子どもは強く感化されます。仕事の様子、苦しみの様子、生き抜こうとする様子をつつみかくさず子どもにふれさせる事。

四、家の歴史を語る

先祖の苦学の様子、生活するための努力の様子を語ることは、自分は一人でないことと共に家族や自分のために生き抜こうとする勇気を与えます。父親がこれまでに伝え聞いてきた祖父等先祖の話をもっとと丹念に語る事。

これらの源は、人間教育にほかなりません。何か特別な内容を子どもに語るのではなく、生きてきた上で「人として大切にしてきた内容・大切にすべきと

考える内容」を語ることです。

ただ、そうして子どもに語ってきたいても思いがけない困難に出くわすことがあります。それが「不登校」です。これは現在、学校教育が抱える大きな課題であり、家庭教育においても最高に難しい課題ではないでしょうか。

不登校は、真面目な子が陥ることの多い問題です。

不登校は、心に隙間の少ない子が陥ることの多い問題です。

不登校は、周りに気を遣う子が陥ることの多い問題です。

親は、何が原因かを追求し、明確にしようとしています。

親は、学校に原因を求めようとしています。

親は、学校へ行きたくないとか子どもを無理やり学校へ引っ張っていかうとしています。

親は、自分の生き方に基づき、学校へ行くようにと子どもに語りかけます。

親は、藁をも掴むつもりで情報を得ようとしています。

そして、親は途方にくれます。しかしこの時、本当に困っているのは「子ども」なのです。

成長しようともがいているのは「子ども」なのです。



岐高近辺 いまむかし どうなった? 高橋 弘子 昭和52年卒

親として、教育者として、常に目指してきたのは「人間教育」でした。人としていかに生きるかでした。
いま思えば、それは「人のために学びなさい」、「困難に立ち向かい乗り越えなさい」とわが校歌で教えられたことに他ならないのです。

さて、只今私の手元にあるのは、昭和四九年一月二日の毎日新聞。「わが校の歩み」というシリーズ第一回、「岐高早校」の記事である。記するのは当時の生徒会長、渡辺威氏、俳名渡辺閑古氏である。名物先生紹介のところには、当時知らぬ人はいない、ガンタこと岩田望教諭、英語の先生である（彼は、仮定法をいふ過去完了、うどしゅどくどまいプラハブペッペ、などと教えていらした）。

それでは、名物生徒?のところには、何を隠そう私が写真入りで載っていた。内容は、なんの事はない、当時写真部文芸部演劇部の集まっていた「旧図書館」の区域で飼っていた、柴犬系雑種犬「武蔵」の世話係としての紹介である。この夏休みの間、自宅が岐高から歩いて五分の私は、「武蔵」の養育係に任命されたのであった。夏休み中、毎日「武蔵」にご飯を持って学校に行ったものである。
当時、岐高の食糧事情は、一般的には、母御からのお弁当、あるいは売店の焼きそばパンなどであったが、その他、度胸のあるやつは部室内での電熱器によるインスタントラーメン作製

とか、出前を取るとかいうやつがいた。あるいは、写真部のようにフィルム、印画紙代を節約するために、ひとに飯をたかるやつもいた。わたしの母は脳天気もので、昼頃になると旧図書館前に、鍋一杯のカレーやシチューを持って来て、まるでマザーテレサか被災者への炊き出しのごとく、カレーを配っていた。なんだか一種のコミュニオンみたかった。文化祭前になると、写真部は深夜になっても部室を出ず、うちの母御のにぎりめしが差し入れられた。演劇部は「清水邦夫」の新作をやるために、テントウムシフォルクスワローゲンを半分にぶった切って舞台上に運び込んだ（これは今後、私が早稲田で芝居をやる時の原風景になる）。

さてそんな岐高だが、皆さんは最近いつ岐高に行かれたかな？私は未だに岐高から歩いて五分の所、（つまり昔のまま）の所に住んでおり、朝な夕なに、岐高の周りを犬の散歩でうろうろしている。従って岐高周りの商店街の今昔を語れる。まずは、西野町の電停辺りから話そうか。……と言っても電停はもう無い。あの真っ赤なちんちん電車は廃

止されてしまった。西野町の交差点にあった「亀や」、ソフトクリームだのパンだの買いましたね。あそこはもう店じまいしました。「亀や」の看板は残っているけど。「亀や」の反対側の

「餃子の王将」。安くて旨くておなかいっぱい食べられる王将です。他の名前に変わり長くラーメン屋が営業していたが、今はコンビニの99になって、近所のおばちゃんの御用達になっていく。王将がなくて、クラブの後何食べてんだろ、今の岐高生。そこで、現役岐高生にインタビューしてみた。インタビュー相手は我が生徒。実は、私、ずいぶん前から自宅で家庭教師をやっている。岐高生も時々みているんです。（最近、東海だの滝だの鶯谷だの私立の生徒が増えています。親は大変ですね）。彼に言わせると、岐高近くでは、肉屋のマルマンで売っているコロッケを食べるのがせいぜいらしい。あとは、丸デブのラーメン。食糧事情は悪いと見える。校章を売っている校門前のやなぎやはまだあります。その辺に「スコール」という飲み物とか、「当たり前」のあるアイスクャンデー売っている店があったと思

うんだけど、みなさん、名前思い出せませんか？

遠方に行かれて、久々に岐阜に帰られる方に案内しますと、まずJR岐阜駅に降り立って下さい。ぎよぎよとするような金ぴかの織田信長像がむかえてくれます。西を見れば四三階建ての高層ビルが建ちました。それに引き替え、私らの青春のバルコはもう無く、丸物も新岐阜百貨店もありません。高島屋ができましたが、かわりにG線（ゲーセン）は消え去りました。柳ヶ瀬では、すがきやは無くなりましたが、正村のお好み焼き、ロンドンのパンは残っています。自由書房は、神田町通りの本店は閉めました。高島屋に広いフロアを持って健在です。

ところで、このように昔のことを思い出しては地図にして、当時の暮らしの様子を語り言葉で残す、というの面白くありませんか。実は、私、二足のわらじで岐阜大学の「地域資料・情報センター」というところで、「まちづくり」資料研究の仕事もしておりまして、最近では金華や京町、加納の古老のお話なんかを聞いています。私らまだ古老という年じゃありませんが、

当時の住宅地図を見て、昔話なんか面白いかもしれせんね。なお、ついでに宣伝しますが、「地域資料・情報センター」では、色々過去の資料集めております（なんでもいいのよ）。ご興味のある方は、高橋までご一報ください（岐阜大学地域科学部地域資料・情報センター cccd_inf@cc.gifu-u.ac.jp）。

われらが後輩の岐高生は、今でもなかなか武勇伝があるらしいです。数年前、岐高祭の出し物として、私もディベート大会に参加したことがあるのですが、なかなかのものでした。今年のセンター試験の前日には、三年生の応援に、大雪の残る中、二年生応援団及び有志が頭から水をかぶっておりまして（あいかわらず、バンカラなようです）。早朝、七時頃に犬の散歩で堤防を歩けば、運動部が走り、合唱部が練習をしている声が聞こえます。活気ある光景です。三〇年ずーっと見えてきても岐高生は岐高生。変わらないように思えます。



同窓生との再会に 想うこと

西田 二郎
昭和52年生

岐高を卒業後、予備校／大学は東京、そして就職先は豊田市のメーカーということで、Jターンとなり、かれこれ、岐高を三三年も離れていることになった。高校時代の生活は、ひたすら『親単』、『山貞』そして、『チャート』のテスト等、勉強に追いまくられる一方で、卓球部に入ったものの、続けるのか？勉強に専念するのか？のケジメがつかず、学業と部活動の両立を多くの同窓生が成し得てきた「文武両道」とは程遠く、中途半端なものであった。

高校の友人とも、卒業後はそれぞれ別の道を歩む中で、その後も付き合いが続く様な絆は、浪人したこともあり、有志の同窓会などにも全く顔を出さず、切れたままであり、人間関係、友人関係は、専ら会社関係の中で身を置いているというのがこれまでの状況であった。

こういつた状況を大きく変え



写真1

るようになったのが、二〇〇九年であった。
 五〇歳を超えることになり、もう一度人生を見つめなおし、新たな歩み始める機会を探ろうとしていた矢先、次々に岐高の同窓生に再会することになったからである。

先ず、年次に名古屋地区勤務者ということで、小島(武)君、川端(久)君、豊田(哲)君と再会する事が出来た。小島/川端 両君は、一年菅原学級でのクラスメイトであり、豊田(哲)君は、当時、話した事もなかったが、私が卓球部、彼がバレー部であり、同じ体育館で練習に励

んでいた事などを思い出し、すっかりお近づきになることが出来た。

次に、細々と年賀状のみのやりとりが続いていた、三年高木学級でのクラスメイトの坂井田(実)君からのお誘いにより、六月の岐高同窓会総会に参加し、五二年卒同窓会代表の松波君、三年の時クラスメイトだった石樽君、中高と二續だった栗本(真)さんを始め、二三名の同窓生と再会。

又、七月には、豊田(哲)君の仲介で、二年山本学級時のクラスメイトだった東君と柳ヶ瀬の弥八地蔵前で三年ぶりの再会。その時に、伊藤(辰)君とも、当時は話した事もなかったのに、お近づきになることができた。

そして、これらのことが縁になり、八月一四日に二三人もの有志の集いにお誘いいただき懐かしい顔と再会。女性も一〇人の参加があり、私は、一、二年に男女クラスだった強味を發揮して、高校時代の面影が十分残っている面々と旧交を温めたのは勿論である。(写真1)

いずれの再会の場でも、同窓生と顔を見合わせたときに「ジロウさんでしょ!」と言われ、



写真2

名前/ニックネームで呼び合う、何とも言い難い懐かしい親近感に包まれたものである。

一〇月には、石樽君の企画した、第一回(?)五二年卒同窓生ゴルフコンペに参加。これまた、卓球部で一緒だった掛札君、岡田(隆)君や、真野君に三年ぶりに再会。

こんなに気楽で心置きなくゴルフを楽しむ事が出来るなんて、本当に楽しいひとときであった。(写真2)

岐高同窓生との再会が、また新たな再会を呼び、どんどん輪が広がっていき、そこへ自分からも入っていく。。「同窓生って本当にいいなあ」と思える、この居心地の良さは何なのだろうか。

勿論、全く住む世界が違うメンバーで飲んで、語りながら刺激を受けているという事もある

だろうが、やはり、岐高出身という事からくる親近感?もつと言えば、百折不撓の伝統ある岐高で、知らず知らずの内に身に付いている連帯感なのか、あるいは、何事も真剣にぶつかっていくというDNAが醸成されているからなのか?そして、それが今回の再会を通じて、新たな絆を生むことに強い影響を与えているのか、本当に不思議な気持ちです。

こういったことから、一〇月に二二年岐高同窓会運営委員会のキックオフがあり、幹事の一人として、総務部(全体のサポート)を仰せつかり、関谷君、服部(正)さん、石樽君、宇佐美君をはじめ、皆さんと同窓生の名簿のメンテ、再整理を始めた。進めていく中で懐かしい再会、そして新たな絆が生まれてくる喜びがある反面、連絡を取った時に、「実は、三年前に…」というような計報も入っている事、すなわち同窓生名簿に、色々な思い出がある時代を一緒に過ごした仲間の名前が、物故者として載るといふ残念な事実があることも認識せざるを得ない。

昭和四九年三月、高校入試の合格発表。確か、受験者は定員を割っていたと思う。自分

岐阜高校と私

水谷 透

昭和52年卒



にとつてはどちらに振り分けられるのが重要なことであった。そう私たちは、あの忌まわしい学校群制度初の受験者である。よりよい入試制度にしようと考えられた学校群制度なのだろうが、当事者にとつては迷惑以外の何物でもなかった。運良く岐阜高校に入学することができた私はよかつたが、ある同級生は悔し泣きしていた。本当に迷惑な制度だった。ともかく私は岐阜高校一〇一年目の入学生となった。

高校でも剣道部に入学しようと完成したばかりの体育館に向うと、「剣道部はあつちだ」と言われ、旧体育館に行った。こんどは「剣道部はむこうだ。道場があるだろう」と言われ首を傾げながら戻ると、二つの体育館の間に物置と勘違いした小さな格技場があつた。この道場は現在もそのままであるが今年度取り壊される。この道場で仲間と頑張り、二年時に県大会で団体二位の成績を修めることができた。伝達表彰で話題になることを楽しみにしていたが、残念なことには剣道部の活躍は知られることなく終わった…。

昭和五五年六月。高校の数学

教師志望の私は、岐阜高校で二週間の教育実習を行った。指導教官の〇先生は、初日から授業をさせて下さった。初めての授業を終え、満足しながら控え室で休んでいると、突然〇先生が現れ、「K先生が二日酔いで、ダウンしているから、三年の選択授業を何でもいいから一時間やってきてくれ」と言われ「面食らった。とにかく、一時間を無事に済ませたが、懐かしい思い出である。私の家内は、当時の三年生であつたようだが、接点は全くなかつた。また、K先生としたが、当時の岐阜高校の卒業生ならお分かりだろう。私は、K先生に習つたことがないのでお酒好きは噂でしか知らなかつたが、事実であつた。ちなみに、〇先生は美術の才能もお持ちで、岐阜高校の玄関に先生が描かれた絵画が飾られている。また後に先生のお孫さんを岐阜高校で担任することとなつた。

時は流れ：平成一七年三月。久しぶりに岐阜高校に足を踏み入れた。旧体育館が取り壊され、駐車場になったため、あの狭い道場は最前列となりとても目立っていた。駐車場係の先生に

誘導されて道場の前を通過し、車をグラウンドに停めた。今日は、長女の高校入試合格発表、親子でやってきた。車の中で待つ私は、合格をメールで確認したので、家内と娘を岐阜高校に残し、一人だけ帰る予定だったが、ちよつと学校を覗いてみたくなつた。

高校教員になつていた私なので、普通だつたら学校を見てみたいなんて思わないが、当時は学校現場を離れた勤務になつていた。学校に戻りたくてしようがなかつたからだろうか、車から降りて、自分の目で再度合格を確認し校内を散策した。知り合いの先生数人と出会い、娘



岐阜高校剣道部（高校時代）

がお世話になりますと挨拶をした。やはり学校はいいなあ…と感じた。

一週間後、内示があり「岐阜高校勤務」を告げられた。学校現場に戻りたいとの希望がかなえられたのだが、よりよつて今年、岐阜高校…家に電話すると、電話の向こうで娘の悲痛な叫び声が聞こえた。そりゃそうだ、自分の父親が自分の学校なからう。俺だつて嫌だよ。

四月から、親子一緒に岐阜高校生活が始まつた。車に一緒に乗っていけばお金もかからないし、あと一時間はゆつくり寝られるのに娘は朝六時台のバスに乗って出かけてゆく。一緒に帰れば早く帰れるのに、僕より少し早く学校を出て、かなり遅れて帰ってくる。岐阜駅でバスの乗り継ぎが悪く、一度家に帰った私が夜八時過ぎに再度岐阜駅まで迎えに行くこともあつた。時間が勿体ないと何度思つたかしのれないが、部活帰りに友達との時間をとりたい娘の気持ちも分らないではない。

昔と違い今はPTA会員名簿も配られないので娘の友達たちにも父親のことを知られることは

ほとんどなかつた。関係を知っている友達たちもさすがは岐阜高校の生徒で、さらつと流してくれていたようだ。（私たち親子には幸いだったが、最近の名簿を作らない風潮が学校と生徒の関係をより希薄なものにしていくような気がしてならない。岐阜高校ではそのようなことはありませんのでご安心を！）

さて、久しぶりに進学校に戻つた私だが、最近の生徒の様子に少し驚いた。学校の休み時間やバスの待ち時間、電車の中など単語を覚えたりする生徒はほとんどいない。家では勉強できないから、塾の自習室で勉強する。これは未だに不思議でしょうがないが全国的な傾向のようだ。

平成一九年三月。今度は、長男「謙介」も岐阜高校にお世話になることができ喜んだ。息子は私が岐高の教員だと知つての受験であるので、親子関係についてはオープンだつた。娘は二年たつても親子関係を内緒にしていたので、「弟が入学してかどうする？」と聞いたら「姉弟であることを内緒にしておるか」と笑つていた。「お前の卒業式の時には、水谷家四人が

体育館に全員集合するんだなあ」と話していたが、それが実現することはなかった。

平成一九年五月八日。午前八時前、岐阜高校に警察から電話があった。「1235」のステッカーが貼ってある自転車の生徒の保護者に連絡を取りたいとのことであった。

謙介の自転車だ。学校に電話をしたら、その父親が電話に出たのだから警察は驚いていたが、私の驚きはそれどころではなかった。

この日のできごと、自分の気持ち、家族の気持ちは上手く表現できない。岐阜高校と私の関わりで最も辛い日だった。

「今日、学校まで車に乗っていくか?」「ううん、いいわ」その朝の最後の会話だった。

平成一九年五月二九日午前七時四二分。突然の交通事故から三週間。これまで頑張ってきた謙介は私と娘の到着を待つかのように最後の頑張りを見せてくれた。親子四人が揃って、手を握り、静かに謙介に語かける中で、最期の時を迎えることができたのはその頑張りのおかげである。

この三週間、学校の事は気に



取り壊される前の北舎と桜

しなくてもいいと言っていた。しかし、謙介の回復を信じればこそ、「これから半年、一年の長い戦いになるんだから、今から普通に生活しなくちゃいけない!」と考え(そう信じたかったのだ)、一週間後には、学校に復帰させてもらっていた。元気な生徒達を見ると、不意にとっても辛くなることがあったが、これは今も変わらない。

私ももちろんのこと、家内と娘の精神的なショックは非常に大きかった。なかなか立ち直ることができない中、支えてくれたのが家内の岐阜高校時代の友人達、娘の高校の友人達である。この事件で、友のありがたさ、当たり前前の生活の素晴らしさを痛感した。岐阜高校の有り難さもしみじみと感じた。

この春、謙介の同級生たちは岐阜高校を卒業した。「[した]はずだ: 原稿を書いている今は、まだ、センター試験前」この学年は進路指導担当として接したが、親の感覚で生徒を見ることも少なくなかった。誰もが希望の進路を実現していると嬉しいのだが、どうなんだろう? 夏には新校舎が完成だ。旧校舎から新校舎への移り変わりを間近で見ることになるとは思ってもみなかったが、デジタルカメラをポケットに忍ばせ、時折校舎を撮影している。

さて、新しい岐阜高校と私はどんな風に関わっているのだろうか? :

「班日誌」と
高校生活、地域医療

村上 啓雄
昭和52年卒

「高校時代の宝物「班日誌」」
昭和五二年卒の村上啓雄(むらかみのぶお)です。一〇年間続いた学校群制度の最初の学年でしたので、岐阜高校に入学してきたのは運のみでしたが、胸を



膨らませて入学した当日に配られたクラスメンバー表で、男女共学のはずなのに自分が男子クラスに入ったことを知り、とても大きなショックを受け、そのまま男ばかりの教室で過ごした三年間の高校生活。確率的には一三名の男子学生に一名が男女クラスを経験せず卒業という計算でした。そんな背景でおそらく同じ思いをし、昭和四九年度一年三組でクラス内の同じ班に配属された男ばかり五名(東真人君、岡田吉隆君、川島均君、坂井和則君、それに私。私以外二年生からは男女クラスに進級)により、なんと交換「班日誌」を綴っていたことはほとんどの人に知られていませんでした。川島均君の音頭で始めた「班日誌」でしたが、二年生からそれぞれバラバラのクラスに分かれて、約二ヶ月間のプランクで途絶えかけたものの、結局卒業するまで三年間続いたことは今か

ら考えるとよくもやって来られたなあと思議な気持ちです。一〇冊、六四〇ページに及ぶ大作は今でも大切にしまっており、最初の二ページは昭和四九(一九七四)年五月一八日に書かれていますから、もう三六年経過しており、かなり紙が黄ばんだ状態ですが、時々この仲間+aで最近でも年一、二回は集まり、日誌を読み返してはニヤニヤしたり、恥かしくて顔を赤くしたり、集まって飲んで思い出話に花を咲かせるためにとてもよい酒の肴になっています。そのまんまの本音、ウイットに富むコメント、時には格好をつけ、また時には弱音を吐きながら、勉強、クラブ活動、音楽(ピットルズ、クラシックとNHKみんなのうた)、プロ野球(巨人対中日)、時事問題や大学受験のことなどを思いのままに書き綴り、励ましたり、意見したりして仲間のコミュニケーションをしたものです。もちろんいろいろ、男女交際の記載もたくさんあり、お互い冷やかしかったり、うらやましく思ったり、とてもメンバー以外にはお見せできない部分がありますし、また「班日誌」を男同士で続けてい

たことを聞かれれば、奇妙なやつらだと思われるかもしれないが、われわれにとつては高校時代の大切な思い出であり一生の宝です。この「班日誌」を今後どうするのかは決まっています。集まった際に、コピーしてそれぞれに墓に埋めてもらおうかなどと話し合ったところ。お蔭様で今のところ五名とも健康状態に不安がないため、期待をこめつつ三〇年後あるいはそれ以上「班日誌」を現状保存する責任を痛感しています。これからも生涯の仲間としてメンバーと末永くお付き合いさせていたきたいと思います。

〈地域医療に貢献する〉

卒業後は岐阜大学医学部に進学し、医師となりました。かつて岐阜市日野にあった国立療養所岐阜病院に、研修医の時から二年五ヶ月間勤めた以外は岐阜大学医学部附属病院に内科医として通算二四年五ヶ月勤務しております。まさに岐阜市内を出たことのない視野の狭い人間（井ノ口の中の蛙、大海を知らず）となつてしまいました。現在の専門は感染症であり、とくに新型コロナウイルス対策では、昨

年四月の発生からの数ヶ月は医師になつて以来最も忙しく仕事をしたと言つてよいでしょう。幸い、手洗い、マスク、うがいなどの個人予防策と、国民皆保険制度によつてどの地域に住んでも、数時間以内に適切な診療を受け、抗インフルエンザ薬を使用することができるとわが国民は、重症になる方や命を失う方は世界中で最も少ない結果となり、今はとても安堵しております。しかし、人類が今までに克服できた感染症は「天然痘」のみであり、今後いつまた新たな感染症が出現するかわからない、すなわち眼に見えない小さな小さな病原体との永遠の闘いをしていく上で、その領域を専門にした者としては、さらに身の引き締まる思いであります。

さて、あまり多くの人に認識されていないことと思いますが、平成二〇年末の時点での岐阜県の医師数は人口一〇万人あたり一八四・二人で（全国平均二二四・五人）、全国のワースト七位となつています。勤務医、とくに小児科、産婦人科、麻酔科、外科の医師たちの中には、三六五日ほとんど一日も休まず仕事をしている者も岐阜高校の同窓

生も含め数多く存在しています。この少ない医師数の環境のなか、岐阜県内での医療が崩壊しないようにするため、岐阜大学医学部に「地域医療医学センター」が平成一九年四月に発足しました。医師数を少しずつでも増やすために医学部の入学定員を増やしたり、また岐阜県内での医師勤務を奨励するために地域枠推薦入試、岐阜県医学生修学資金などの制度を整えたり、まさに岐阜大学医学部と岐阜県、また地域医療振興協会（自治医科大学卒業生で構成）が強固に連携して、現状では医師数は少ないが、質を落とさないような医療の確保を目標に取り組んでいます。最近では岐阜高校から毎年十数名の入学者を迎えており、頼もしい限りです。現在までのところ、岐阜県内では患者さんのたらい回しなどの悲惨な事件の報道はなされていませんが、今後そのような出来事が起こらないように努力し続けなければならないように思っています。岐阜県内で長年医療を行ってきた私にとつては、このセンターでの活動を通じて、都市部も山間部もすべての地域を含めた岐阜県の地域医療のために少しでも役に立てれ

ばと思う毎日です。

「岐高のごとく」

小川 康 則
昭和62年卒



岡山県議会で質問に答える（平成21.10）

あるとき、今春社会に出た若者達は平成元年生まれが中心と話を聞き、軽い衝撃を受けました。自身をかえりみても、職場の後輩から「平成ヒトケタ入省の人たちは」と世代批評の対象になっている様子。どうりで髪に白いものも増えるはずですが、卒業とともに岐阜を離れて三年。転勤の多い仕事に就いたこともあって、同級生との交流はおおかた年賀状頼りとなっていました。最近、EBCという

ソーシャル・ネットワーキング・サービスを知り、近況のみならず日々の動静までもを伝え合うようになりました。高校時代には不思議と接点のなかった方と知り合ったり、海外から一時帰国した友人があれば、有志で集う会を即席で開いたり、再び「岐高づいてる」このころです。久方ぶりの再会には当時のエピソードが最高の肴です。「林間学舎でA君が」「岐高祭でBさんが」と話題は尽きるころとありますが、座が興じれば、「あのときC先生に叱られたのは、ホントはこういう意図だったのではないか」などと思いを巡らすこともしばしば。過ぎ去った日常の一コマに、あらためて意味を見いだしたり、感慨を覚えたります。できるのも年の功というものでしょう。

本会報への寄稿依頼を頂いたのも、そんな折でした。これも何かの巡り合わせと思ひ、そのとき友人と振り返つた岐高の思い出のうちから、今回は二つを書き記したいと思います。

岐高の思い出。その一つは、自由と規律が絶妙にバランスしている学校であつたということ。何ごとも程々であれば好

きなようにして構わないが、度を超えた途端にカミナリが落ちる。しかも、その境界線はあらかじめ示されているわけではない——これが私達が享受した自由でした。境界線は生徒が自ら推し量るしかない。当然、フライングやオーバースタートも多く、そのたびに被雷するのですが、実はそれも想定内の範囲内。試行錯誤を繰り返すうちに、生徒一人ひとりに規律が内面化されていく。そんな古典的な人格教育の理念が滲んでいたことに、いま気付かされます。

古文の担当であった岩田先生が、弛緩した教室の雰囲気を感じて、黒板に象形文字を書きながら、「教」という字は、大人が手に棒を持つて子どもを叩く姿を表しているんです」と講じて「ヤリとされたことも鮮明に覚えています。子どもから大人への微妙な移行期にある高校生に、教育の持つ厳しい一面を、諧謔の仮面を被って伝える。こんな芸当がすんなりと受け入れられる学校でした。

もう一つは、生徒の知的好奇心を信じる学校であったということです。当時も岐高は有数の

進学校でしたが、受験指導に汲々とする雰囲気はなく、むしろ先生方の個性が前面に出た授業のびのびと行われていました。担任でもあった日本史の西尾先生は、年度当初、石器と土偶の解説に時間を掛ける余り、現代史はおろか近代史も完了せずに一年を終えることが常となっていました。シラバスがとかく重視される現在にあつては、多分許されないことでしょう。しかし、

例えば、教科書での「逃散」という一語の使い方にこだわり、出版社への抗議にまで及ぶ先生の姿に、私達は歴史というものの奥深さを感じとっていた気がします。また、英語の太田先生の授業はしばしば脱線することで有名であり、宿題をこなしてこなかった生徒に、前夜からそのときまでの行状を逐一口述させて一時限を終えてしまったことすらありました。しかし、興に乗ったときの話術は圧巻であり、octopus（タコ・八本足）とOctober（十月）の語源をラテン語に求め、さらにその数字のズレからローマ皇帝の話に飛躍する博覧強記ぶりは、生徒を学問の深みへといざなうて余りあるものでした。後に進学して教

養学部で講義を受けたとき、何ともいえない既視感があり、その源をたどったところ岐高での授業に行き着いたことを思い起こします。

私は、大学を出て総務省（当時は自治省）に就職し、以来、地方行政の仕事に携わってききました。地方赴任の機会も多く、これまで広島県、札幌市、京都府に勤務し、現在は岡山県に勤めています。教壇に立った経験はありませんが、予算編成や事業評価などを通じて教育課題にかかわることも多くなりました。そんなとき、いつも頭に置くのは、「岐高ではどうであったか」ということです。むしろ土地柄も時代も違いますので、そのまま当てはめるわけにはいきませんが、しかし、そこには変わらぬ価値や基準があると信じています。

私達が身を置いた岐高の素晴らしさが、今後も後輩へと確かに伝えられ、さらに多くの人々の共感を得るところとなる。そして、いつか高校教育の在るべき姿が、「岐高のごとく」との枕詞で語られる日が来る。こんなことを夢見ながら、これからも日々の仕事に当たっていきたくて考えています。

最近の出来事から
岐高と英語と
太田先生
岡本 千晶
(旧姓:佐藤)
昭和62年卒



一昨年の秋、ドイツから日本へ戻った直後、電話があった。岐高時代の友人カヨコちゃんからであった。ちょうど、ドイツの取材先で撮ってきた写真で講演資料を作っている最中だったのだが、久しぶりに声を聞いた嬉しさからつい話し込んだ。現在、家人の仕事の関係で一年の大半をフィリピンに暮らし、それに加えて、自分の仕事のために日本と欧州を行き来しているの

で（私はフリーランスでドイツ語の翻訳や通訳、記事を書くなどの仕事をしている）、岐高時代の友達と話す機会が残念ながらあまり無い。なので、久々の

楽しいお喋りだった。この電話がきっかけになって翌春（二〇〇九年四月）帰省した折、彼女と岐阜で会うことになった。数えてみたら一年ぶり……！ 在外邦人ゆえ郷里で旧友に会う機会もそう頻繁にはないのだが、それにしても一年ぶりかと思われた次第である。

カヨコちゃんが高校で英語の先生をしていることもあって、この時、英語の太田宏先生が御病気で亡くなられたときの話を、あらためて聞いた。

先生は二年時のクラス担任であった。今さらながら不義理のしっぱなしであったことを後悔した。

岐高時代の私は、『親単』『山貞』の小テストでしょっちゅう落ちてはペナルティを書かされる不出来な生徒の典型であった。不合格だとテスト範囲内の単語や例文を全て、五回だか一回だか書いて提出しなければならぬのだが、結構な頻度で落ちていたため或る日、書くのに嫌気がさし、正門前の文具屋さんでボールペンの芯ばかり五本買ってきてセロテープで繋げ、一度に五つ単語を書けないかしら？と放送局の部室で試したことが

ある（当時は放送局に所属していた）。この方法はしかし五本の芯に筆圧を均等にかけるのが難しく、上手いかなかったため、次に、「半分以下の労力で片付けること」を目指し、カーボン紙を紙と紙の間に挟んでその上から書く、という方法も試してみたりした。

今なら、「ペナルティ対策より、覚えることにエネルギーを使いましょう」と大人の判断を、するところなのだが、当時は、「いかに効率良くペナルティを片付けるか」ということのほうに真剣だったのだから、一体どれだけ勉強嫌いだっただか、と思う（ちなみにカーボン紙の法は、筆圧が強くないと下の紙に写らなくて手が疲れてしまい、結局一つずつ書くのが一番早いという結論に至った）。

太田先生は私から見て、最も「岐高らしい先生」のお一人であった。厳しくて怖かったが、授業がとにかく面白かった。テキパキと説明して勢いよく板書をし、毒のあるジョークをガンガン連発する。授業中はクラス全員が爆笑、爆笑、また爆笑で、笑い声が絶えなかった。英語嫌いな私が授業だけは楽しいと感じ

じていたのだから、某予備校が先生を高給で引き抜きに来たという噂は、恐らく本当のことだったのだろうと思う。

もともと、私が先生の凄さをホントに実感したのは、高校を卒業し、大学も卒業して、名古屋のラジオ放送に就職してからであった。人を笑わせるというのがいかに難しいことか。番組や司会の原稿を考えながら四苦八苦するという経験を通して、遅れ馳せながらようやく、太田先生のとてつもないなさを理解できたのである。

人を笑わせるのは難しい。エネルギーもテクニックも要る。太田先生は生徒を爆笑させながら、英語を教えていらしたのだ。それも、岐高で。

一体どれだけ熱くパワフルでいらっしやっただろうかと、今思い返してもあらためて、「すごい！」と尊敬してしまおう。

先生が亡くなられた時（これは後で知ったが）、私はドイツに居た。家人の転勤に伴い、アナウンサーを辞めてドイツへ行き、大学に入り直して数年経った頃だった。社会人になってから勉強不足を痛感していたので、ドイツ行きが決まった時、大学

に再入学することにしたのだが、独語は文字通りゼロからの出発。アー・ベー・ツェーからのスタートだった。F大学に合格するまでと在学中の数年間は毎日毎日、独語と格闘の日々で、校歌の「明け暮れ学ぶ」を地で行く生活であった。

独語漬けの第二の学生時代はその後、独語を使う職業へと繋がって今に至るが、あの頃の頑張りを下支えしてくれたのは、岐高で獲得した「ある種の免疫」であったのかもしれないと今になって思う。ハードなことに対する耐性、と言ってしまうと単純に過ぎるが、『親単』や『山貞』、厳しかった先生方、怠けたら容赦なく叱られる環境、山ほどの宿題にテスト：そういういた岐高的なものに培われた何かである。「百折不撓」という言葉が私は今も大好きなのだけれど、「免疫」とはつまり、この言葉の意味するところに他ならず、ともすると私の場合それは、岐高時代に最も怖いと感じていた太田先生によって、より一層意識させられているようなところがあった（実は、今もそうである）。

欧州には予想外に長く住み、結局その間、一時帰国もほとんどしなかったため、亡くなられたことは後になって知った。岐高であれほど英語嫌いだっただが、今は独語で仕事をしています。すともしも御報告できたなら、先生は何と仰ったかしらと、ふと思うことがある。よく頑張ったなと褒めて下さるだろうか。それとも、「馬鹿だなあ、岐高時代は一体なにをやった?!」と、やっぱり反省させられるだろうか。何はともあれ私は目下、比国で英語を学んでいる。それも岐高時代とは異なり、かなり自発的に。「少しは成長したな」と、とりあえず苦笑いぐらいはして下さるに違いない。

カヨコちゃんとの再会時、一緒に岐高へ行った。もう何年ぶりだか分からないほど久しぶりに、正門から校舎を見上げ、記憶の中とほとんど変わらぬ玄関や職員室周辺の様子に、ここだけ時間が止まっているのかと錯覚しそうになった。在外歴が長くなったせいだろうか（いや、年齢のせいか?）、懐かしくてたまらなかつた。楽しかったこと辛かったことがギッシリ詰まった岐高での三年間は、文字通り掛け替えのない、大切な宝物で

ある。岐高高校で学べたことを、幸せに思っている。

最後になりましたがこの場をお借りしまして、岐高再訪の機会を下さったカヨコちゃん、そしてお世話になりました先生方、心からの感謝を申し上げます。

第一線の現場を あきらめず……

河村 清美
昭和62年卒



社会正義の実現に関わりたい、市民の代弁者になりたいとジャーナリストを志し、名古屋テレビ放送（メーテレ）に入社して丸一八年がたちました。入社試験は二〇〇〇倍、採用された総合職は男性九人、女性は私一人でした。ラッキーなチャンスをつかんだ私は入社後、情報番組のディレクター業務を経て



メ〜テレニュースセンター 職場での仕事風景

に参加……。一六年間
で大事故、大事件、大
惨事をことごとく経験
した私です。県警、司
法、行政、経済、医療、
遊軍など全ての記者ク
ラブを担当し二〇〇三
年から二年間、名古屋
テレビ初の女性支社担
当記者となりました。

私は記者業務の傍ら、
ドキュメンタリーの制
作にも取り組んでいます。

報道局に異動。それから一六年
間、テレビ記者として社会人
生を歩み続けています。
私の記者生活について先輩記
者は「五〇年かけて直面する重
大事件をわずか十数年で経験し
たあなたは異例だ」といいます。
九四年に中華航空機墜落事故が
起き、徹夜で名古屋空港の取材
にあたり、九五年には阪神淡路
大震災が発生、直後にヘリで神
戸入りを果たし、被災の様子を
伝えるニュースを全国に発信。
数日間、眠ることなく飲まず食
わずの取材活動でした。そして
国民を震撼させたオウム事件。
松本被告が逮捕されるXデーを
山梨県の旧上九一色村で終日張
り込み、取材団として取材活動

臓器移植法成立の際には、移植
が必要な岐阜の女性患者の渡豪
を密着取材し、日本の移植の現
状と課題をテーマに番組制作。
また国内最大級ともいわれた岐
阜市椿洞の産廃不法投棄事件の
番組も手がけました。奇しくも
同窓である細江茂光市長率いる
岐阜市の産廃行政を追及すると
いう構図で、複雑な心境で取材
に奔走した私でした。ニュース
番組では税金無駄使いを糾弾す
るコーナー「怒〜なの!」を立
ち上げ、民間放送連盟賞を受
賞したほか、医療事故の数々を
独自取材し、スタンプ放送をし
てきました。自分達が発掘しな
ければ永久に光があたることが
なかっただろうニュースを社会

に発信した時、私達の報道で社
会が良い方向に動き出した時は、
この上ない喜びとやりがいと達成
感を感じています。

二四時間眠ることのないニュ
ース。テレビ局は万が一に備え
すぐに取材、放送ができるよう
にスタッフが休むことなく働い
ています。私の人生は常に時間
と闘ってきたといっても過言で
はありません。現場にいち早く
駆けつけ、正確な情報を取材し
速報で社会に発信する日々です。
記者はリポーターであり、書き
手であり、ディレクターであり、
時にはカメラマンの四役を担っ
ていかなければなりません。一
六年のキャリアとはいえ、さら
なるスキルアップを目指し精進
する毎日です。そんな私にもう
一役増えたのが……二九歳。結
婚し翌年には出産という人生の
転機が訪れたのです。二度目の
出産では幸運なことに双子を授
かり、三人の男の子の母親とな
りました。にぎやかな育児ライ
フを楽しみながら、時には悩み
ながら夫婦二人三脚で子育てに
も奮闘中です。社会で話題のワ
ークライフバランス、「仕事と
育児の調和」ってあり?とよく
聞かれますが、流行中の「イク

メン」の夫と両親の強力なバッ
クアップの下、かろうじてバラ
ンスを保っています。夫や両親、
職場の理解と協力体制がなけれ
ば早朝、深夜、宿直を伴う不規
則勤務をこなしながら育児を両
立していくことは難しいと痛感
しています。実際、この地方の
テレビ局には子持ちのテレビ女性
記者がほとんどいません。仕事
と育児を両立している私のよう
な人間こそが、直面している現
状と課題について社会に発信して
いく使命があると感じています。
必要な環境、法整備を訴え、
女性の自立、仕事と育児の両立
をめぐる課題の解決に一石を投
じられたらと思っています。

話元に戻りますが現在、私
は夕方のニュース情報番組「U
P!」の統括デスクを任されて
います。統括デスクは緊張感を
常に持ち、次々に飛び込んでく
る情報を冷静に見極めて精査。
その上で記者やカメラマンを迅
速にかつ的確に配置していく、い
わばニュースセンターの司令塔
です。放送局間で視聴率競争が
激化している中で、どのニュー
スが最もインパクトがありキャ
ッチなつくりになるか、視聴者
が必要としている情報は何か、

速報性はどうか?などスタッフ
と侃々諤々、夕方の生放送直前
まで議論を重ね、連日ニュース
番組を作り上げています。ニュ
ースセンターの全責任を負うと
いう重責を伴い、大変な役割で
はありますが、長年私が記者と
して培ってきたニュースセンス
を最大限に生かせるやりがいの
ある仕事だと自負しています。
メディアをめぐるのはBS放
送開始に伴う、テレビの多チャ
ンネル化など環境の変化もさる
ことながら、報道のあり方その
ものも厳しく問われている時代
です。視聴者をミスリードしな
いように、激動期の今、テレビ
局だからこそできることを模索
しながら、社会に情報を発信し
続けていきたいと思っています。そし
て、取材を通して出会った多く
の人達。出会いは一期一会、大
切な私の財産であり、宝物です。
多くの出会いとわが子の笑顔を
パワーの源に今後も第一線の現場
をあきらめることなく働き続け
たいと思います。

皆さま、メ〜テレを見ていた
だいた際には、同窓生の三人の
子持ち女性記者が奮闘している
ことをぜひ思い出していただけ
ればと思います!

人生は 予測不可能だが 予言されている？

北川 千晶

昭和62年卒

私は現在、あるメガバンクの支店長をしています。

名古屋から東京の支店に移り、既に支店長として三年近くになります。年齢的にも女性であることも、まだ珍しい存在であるため、社内外で話をする、またはインタビューを受けることも増えてきました。当然、周囲はキャリア志向の強い女性と捉えがちですが、いつも心にあるのは

「どうして仕事に向かない私が、こんなことになってしまったのか……」という、むしろ悔恨に近い思いなのです。

岐阜高校時代。学校から見れば私はお荷物生徒だったに違いないのですが、私から見れば、自由でいられる最高の居場所でした。今だから言えますが、家

と学校は近いはずなのに頻繁に遅刻し、そのうえ内緒で自転車通学をしていました。試験で白紙を提出したこともありましたが、担任の先生に意見をぶつけたことも。でも、個性的な先生方と友人に囲まれ、私はいつもそこに暖かさを感じていたのです。

当時私は、海外のロックに夢中で、同級生とコンサートやディスコに出かけたり、本の貸し借りをしながら熱く語ったりと、勉強以外のこととにかく集中。土曜日も、学校帰りに柳ヶ瀬の喫茶店で昼食をとりながら夕方まで粘り、そのあとは更にセンサーやパルコに立ち寄って帰りは夜。全く本来の勉強をする素振りも見せない私に、親も最後はあきらめていたのではないのでしょうか。

その後、早稲田大学に進学したのですが、やはりここも自由な気風。結局、高校・大学七年間を通し、「まわりに影響されず、自分のペースで進んでいく」という信念に近い、変えがたい爆弾が宿ってしまうことになったのです。

銀行のようにルールが多い職場で、家族は私が働く姿さえ想像できず、そして何より、自身が続けられるとは思っていませんでした。しかし、「我が道をゆく」と思い、なかば「我が道しか行けない」という諦めが、四〇代となったいま、あの高校時代の私と変わらず一貫してここにあるように思います。

それが、いまの職場で「支店長は本当に強い」と言われるところまで来てしまい、考えてみれば、いまの自分は到底予測できなかったが、やはり予言できたのかもしれません。

まだまだこれから突然、「やーめた！」と仕事の階段から飛び降り、全く違う人生を歩むかもしれない。でも私の中の爆弾は、高校時代の私と将来を何かしら繋げることになり、やっぱり予言されているのかも。

今なお惑いの 中にあり

中尾 晃一郎

昭和62年卒



卒業の翌年、二度目の大学受験のために卒業証明書を受け取りに行つて以来、一度も母校に足を運んでいない。それもあってか、高校時代の記憶はほんやりと霞がかかったようで鮮明に像を結ばない。新入生の春、男子クラスの同級生たちがどいつも秀才に見えたこと。初めてできた彼女とふたりで下校したものの、忠節駅で別れるまでほとんど会話もできなかったこと。土曜の午後に部活をさぼり、クラスメートと覚えてたのマジシャンに興じたこと。どれも断片的な記憶である。きつと先生方は折に触れさまざまな人生訓をお示しくくださったであろうが、

何ひとつ覚えていない。もったいないことである。大学進学後も同様で、合格して燃え尽き、学生時代はろくに講義にも出席せずクラブ活動とアルバイトに明け暮れ貴重な時間を浪費してしまった。それでも人並みに就職できたのは、ひとえにバブル経済時代の恩恵であろう。

私が本当の意味で何かを学び始めたのは、NHKに入局し、取材という行為を通して多くの人々の生き方、考え方を目の当たりにするようになってからだ。そのきっかけは、初任地の金沢に赴任して最初に取材したある若手農業経営者のことばであった。

その人は当時三〇歳。高齢化と担い手不足が深刻化する農業にあつて、農地を集約して大規模化、効率化を図ったり、いわゆる「どんぶり勘定」だった農業経営に企業経営の手法を取り入れたら、気象会社から天気の情報を買って作業計画に生かしたりと当時としては先進的な取り組みをしていた。取材を進めるなかで私は素朴な疑問を投げかけた。「多くの費用と労力をかけてまで、従来のコマ作りのやり方を変えるのはリスクの方

が大きいのではないかと？」私より少し年上のその人は、私の目をまっすぐに見据えてこう答えた。「私はいま三〇歳。この先六〇歳まで現役を続けるとして、一生のうちあと三〇回しかコマを作れないのです」。強い衝撃を持って胸に響いた。農業を将来性のある魅力的な産業として確立するにはさまざまな試行錯誤が必要だ。しかし、そのために与えられたチャンスはわずか三〇回。一度として何かに挑戦せず漫然と過ごす年があつてよいはずがない――。

帰りの車中で、そのことばを自分にあてはめてみた。社会人一年目の二四歳。定年まで三〇年以上。正直実感は乏しかったが、「三〇年しかない」と考えることがとても大切なことのように思えはした。ひとりでも多くの人に会って、ひとりでも多くの人生に触れ、学ばなければならぬと固く意を決めた。

多くの人を取材した。新潟県中越地震で生活に壊滅的な被害を受けながら、山を降りず、ふたたび牛を飼いはじめた山古志の人たち。三〇年かけて自力で山を開いて道をつけ、資材を運んで天文台をつくりあげた星空

オタクのおじさん。一六歳でオリンピックに出場した後交通事故で瀕死の重傷を負うも奇跡の復活を遂げ、後遺症と戦いながら三二歳まで競技を続けた女子陸上選手。私のインタビュに「まだまだですわ」とイタズラっぽい笑顔で答えたニキピ面の高校球児は一七年後、ワールドシリーズで日本人初のMVPを獲得した。いずれも己が決めた道を一筋に進み、大地に大きな根をおろした人たちである。

放送人として二〇年近くが過ぎ、年齢は四〇を超えた。いつの間にか折り返し地点を回っている。近頃、「あの人のことば」が頻繁に頭に浮かぶようになってきた。

自分は何を為してきたのだろうか。自分は何者かになり得るのだろうか。自分の職業とはいったい何であろうか……

四〇歳を「不惑」という。このころには自分の生き方、考え方に自信を持ち、惑いがなくなるという意味らしいが、私はとてもそうはいかない。恥ずかしながら、いまなお深い惑いの中にある。

昭和62年卒業生を代表して

松尾 真吾
昭和62年卒



らを少しお話しさせていただきます。

京都での大学生活を終え、まずは地元の金融機関で五年ほど人生勉強をしました。同僚には、何人かの同級生もいましたが、勤務地が離れているせいか、それほど岐阜高校で同級であったことを意識した場面はなかったように記憶しています。その後、二八歳で家業である生花卸小売業を継ぎ、同時に地元のまちづくり団体で活動をしてきました。ここでは、多くの岐阜高校の先輩・同級生・後輩に出会い、色々と助けていただきましたし、様々な場面で岐阜高校の卒業生とお会いし、岐阜のまちでは多くの岐阜高校の卒業生が活躍していることを実感することができました。今回の同窓会総会運営委員会でも、そこで出会った先輩方からはアドバイスをもらい、同級生には進んで協力してもらっています。本当に同窓の絆には感謝するばかりです。

そんな私の今の楽しみは「社会見学」という名の家族旅行です。子供が小学三年生と五年生になり、これまでの遊園地や動物園・水族館巡りをやめて、せっかく美しき国・日本に生ま

れたのだから、四七都道府県のいい所を子供に見せてあげたいという思いから日本各地の史跡名勝を巡ろうというもので、これまで親子四人で二五都道府県を制覇してきました。今年の初めには、私が岐阜高校の同窓会に関わっているからということ

で、岐阜高校の卒業旅行以来二四年ぶりに広島へ。学友と訪れたはずの「厳島神社」や「原爆ドーム」でありましたが、残念ながら、若き一七歳の時の修学旅行でどこをどのようにまわったかはどうしても思い出すことができません。宿で先生に怒られていた、いや指導を受けていた仲間のことばかりが記憶に残っています。今の岐阜県の公立高校の修学旅行は九州・沖縄が主流と

いうことを聞いていたこともあり、子供たちには「次は、いつ広島に来ることができかわからないので、よく覚えておくように」と言ったところ、子供の答えは「ドラゴンズに入ったら、カープとの試合で、いつでも広島に来るからいいよ。パパも招待してあげる」でした。一〇年後を楽しみにしています。(ちようど、岐阜高校同窓会総会運営委員がまわってくる年ですから笑)

最後になりますが、この同窓会の運営のために、昭和六二年の卒業後初めて自分たちの手で同級生全員に連絡をさせていただきました。同級生が日本各地で、そして世界で活躍していることが改めてわかるとともに、誠に残念ながら八名の同級生が既にお亡くなりになっていることがわかりました。共に学び、共に汗した同級生のご冥福をお祈りいたします。

競馬放浪記

松波 和徳

昭和62年卒



ついにやって来た! ドバイ・ナドアルシバ競馬場

私と競馬との出会いは、ダービースタリオンというファミコ

ンのゲームでした。当時O医大在学中のN尾君のアパートに遊びに行った時に何やら夢中になってゲームをやっていた、そこで少しやらせてもらったのがきっかけでした。そして、N尾君の「ヒシマサルが見たい」の一言（私にはなぜか「ドイマサルの歌」が頭に浮かびました）で、当初の予定を変更して京都競馬場に行くことになり、競馬デビューを果たしました。家に帰ると早速ゲームを買って毎日：：すっかり競馬にはまってしまいました。

元々旅行好きだった私は、ただの競馬好きではなく、旅行を兼ねて日本全国の競馬場を回るようになりました。最初に行ったのが、今は廃止となっていた高根県の益田競馬場です。当時としては珍しい女性騎手がいるというところで有名でしたが、驚いたのが観客席と馬の走るコースの間に一般道が走っていたこと、予想屋という電話ボックスぐらゐの屋台におじさんがいて一〇〇円を渡すと当たり馬券（実際はただのそのおじさんの予想です）を教えてくれること、これで地方競馬も大好きになりました。その後も、お藤元の笠松、

旭川、大井、川崎、金沢、園田（兵庫）、姫路、福山、高知、佐賀、そして函館、マルセイユと並んで三大「海の見える競馬場」（友人達の間で勝手にそう言っている）の一つである荒尾（熊本）と全国の地方競馬を巡りました。それから北海道には「ばん馬」という馬にソリを引かせる競馬があり、何度か行きました。これは普通の競馬とは違う面白さがあります。直線二〇〇mでのレースで途中二ヶ所山が作ってあって、それを越えながらソリを引いていきます。山の手前で一度休憩するところの何とも言えない間が面白いです。そして、スタートからゴールまで一緒に歩きながら声援を送ることができるのも魅力です。中でも大好きだった北見の競馬場は廃止になってしまい、今では帯広でしか見る事ができませんが、是非一度行ってみたいと思います。

もちろん、中央競馬も行きます。中央競馬が行われる競馬場は全国で一〇ヶ所あるのですが、競馬歴二〇年近くも経つのにどうしても行けなかった競馬場がありました。それは海の見える競馬場の一つである函館競馬場

でした。というのは、競馬の開催時期が六月から七月で、これがちょうど税理士試験の直前時期に当たり、税理士試験に合格できない私はどうしても行くことができなかったのです。そんな私も結婚を機に試験勉強にも身が入るようになったので、函館競馬場を自分へのご褒美としてようと決め、最後のひと頑張りをすることにしました。その目標設定が良かったせいか、ようやく三年前の税理士試験に合格晴れて翌年の函館競馬へ行くことができました。

さらに、国内だけでは満足できず？というわけではありませんが、妻が気をきかせてくれて、新婚旅行でドバイ（UAE）の競馬場へ行くことができました。毎年三月末頃、世界一賞金の高いレースが行われ、日本からも何頭か出走する大イベントがあり、それに行ってきました。ヨーロッパでは社交場なので、ドレスを着ないと入れてもらえません。私たちもその日のためのドレス持参で新婚旅行に行きました。競馬場もとてもきれいだっし、日本のいつもの競馬と違い、まさに祭典という感じで、妻とも「こんなの二度と



いつか本当の馬主に……：ドバイにて

味わえないよね」と話していました。おまけに武豊さんが乗った日本の馬も勝って、その日はとても盛り上がりました。こちらもオススメです。

競馬と旅行といえば、まだネタがあります。現在友人四人でペーパーオーナーゲーム（実際の馬主ではなく、勝手に現在走っている馬のオーナーになっているのですが、毎年年末にどこかへ旅行へ行きながら、そのドラフト会議（どの馬のオーナーになるか？）を行っています。これ

もかれこれ一二年になり、振り返るとお台場の日航ホテルに始まり、下呂温泉、浜名湖、山代温泉、大分の宝泉寺温泉、伊勢志摩の相差、城崎温泉、函館そして韓国の釜山といろいろと行きました。海の幸を満喫したり、廃止になるブルートレインに乗ったり、韓国のカジノで年越しを迎えたり、お寺に行って「ゆく年くる年」の撮影準備に出くわしたり、と本当に楽しんでいきます。子供も生まれたので、昨年末は琵琶湖になってしまいました。が、どんなに近場でも続けているとみんなで誓い合っています。

ギャンブルというイメージが悪いですが、こんな感じなら楽しそうに思いませんか？サラブレッドは本当に美しいし、京都競馬場の芝なんて感動するほど綺麗です。行った先の温泉や食事で楽しさ倍増です。ほかにも妻とカーキャンプをしながら行った新潟競馬場、大好きなオペラオーに会いに行った北海道の牧場と思えば深いところはまだまだたくさんありますが、これからもこの旅行記をできる限り綴って行けたらなあと思っています。

ドンドンドン、ジー！「グローリアス！」
ほほう、栄光の、か。
ドンドンドン、アーイ！「イモータル！」
はあ？ 芋を食べる？
ドンドンドン、エーフ！「フォーチュネイト！」
ああ、幸運な、か。
ドンドンドン、ユー！「ユナイテッド！」
そうそう、連帯感は重要やね。

岐高応援団の技（演目？）の一つ、「ジーアイエフユー！」。最初聞いた時は何じゃそりやと思った。ああ、GIFUで岐阜か。他は「雷神」とか、「待ったどうした」とか、純和風なのにね。



わが青春の G・I・F・U
松葉 岳哉
昭和62年卒

一年生の時なので、United 以外は意味を知らなかったが、さすが岐高の先輩方はインテリやなあと思った。「百十余年の伝統を誇るうゝ、岐阜県立岐阜高等学校校歌あり、アーイン、ツヴァーイ、ドラーイ」に至ってはドイツ語やもんね。そういえばお見合い会社でツヴァイってあるけど、二人はカップルって言う意味か。ツガイとかけてたりして。
それにしても、Immortal は難しい単語を選んだものだ。仕事柄、また、インターネットなどでも英語にふれる機会は少なくないが、今までの人生で、使った事はおろか出くわした事も無い。似た意味なら Eternal なんかが一般的？やんか。でもそれだとアーイにならんわな。Iではじまる良さそうな意味の単語ならば、Importantとか、Impressiveとか他にもあるのに。何かこだわりがあったんやろうね。と、書きながら考えたんやけど、もしかして、百折不撓=Immortal ちゃうことやないかー違つかね？
もし、作者の方、もしくは由来をご存知の方がいらっしゃいましたら、同窓会総会運営委員

ドンドンドン、ジー！「Great！」
ドンドンドン、アーイ！「Incredible！」
ドンドンドン、エーフ！「Fantastic！」
ドンドンドン、ユー！「Ultra！」
最後はUltimateもありかも。なんか、アメコミのヒーロー系ですね。

(2) とにかくすごい編
ドンドンドン、ジー！「Global！」
ドンドンドン、アーイ！「International！」
ドンドンドン、エーフ！「Foreign！」
ドンドンドン、ユー！「Universal！」
GとIは意味がかぶってますな。インターナショナルとユニバーサルは、声に出してみると、アクセントが真ん中であって叫びにくいです。

(1) 国際派編
会までご連絡下さい。
で、これを機にいろいろなバージョンを考えてみました。

ドンドンドン、ジー！「Gorgeous！」
ドンドンドン、アーイ！「Imperial！」
ドンドンドン、エーフ！「Fashionable！」
ドンドンドン、ユー！「Unbelievable！」
最初はGoldenもあります。なんか、ディスコのVIPルームみたいですね。最後は松田聖子風に言っていただけでも、なら差し支えありません。

(4) 叶姉妹編
ドンドンドン、ジー！「Greedy！」
ドンドンドン、アーイ！「Impatient！」
ドンドンドン、エーフ！「Fanatic！」
ドンドンドン、ユー！「Unsatisfied！」
貪欲で、短気で、熱狂的で、なかなか満足しない。こういう人が上司だったりすると、大変よね。

(3) モーレツ編

ことが出来ます。これも三年間英語の授業を担当していただいた太田宏先生のご指導の賜物です。

中学三年の夏に古賀悟先生にお会いし「拓郎をインターハイに出場させるケンね」という博多弁の勧誘に一念発起。そして「文武両道」を夢みて岐阜高校に入学したのも束の間。秀才が集まる岐阜高校では、もっぱら「文武両道」の「武」のみを担当することとなり、あまりの出来の悪さに授業中に「Only to practice JUDO」を復唱させられることとなったのが事の顛末です。

このとおり、私の高校三年間の思い出は柔道に尽きます。古賀先生は、赴任されたすべての高校で柔道部をインターハイに導いた名監督。さすがに岐阜高校では難しいだろうという周囲の評判ではあったが、古賀先生の魅力と勧誘により多くの部員が集まり、毎日一時間足らずの短い時間の中で活気に溢れる稽古をしていました。

このとおり、私の高校三年間の思い出は柔道に尽きます。古賀先生は、赴任されたすべての高校で柔道部をインターハイに導いた名監督。さすがに岐阜高校では難しいだろうという周囲の評判ではあったが、古賀先生の魅力と勧誘により多くの部員が集まり、毎日一時間足らずの短い時間の中で活気に溢れる稽古をしていました。



高校三年夏、高校選抜で、西ドイツに遠征
前列右が筆者、二列目中央が総合格闘家の吉田秀彦氏

私の高校時代の一番の思い出は高校二年の冬に行われた全国高校選手権予選。その年の夏に石川県で行われたインターハイ個人戦重量級で五位に入賞した私はまさに絶頂期。河村、服部、立木といった一年生も力をつけ全国大会出場も夢ではないと期待された大会でした。

岐阜県予選では大垣高校等の強豪校を撃破し、全国大会出場を賭けた地元岐阜市で開催された東海大会。当日は「進学校の出場はか?!」と注目を浴びTV中継もされました。

そして最大のヤマ場は愛知の強豪、同朋高校戦。私はなんとか二人を抜き三人目を引分ければ、全国大会出場を決めることができる一戦。対戦相手は同朋高校のポイントゲッター。体力も限界に近いが負ける相手ではない。周囲の期待もいよいよ膨らみ、スポットライトを浴びる大舞台。ところが、試合開始間もなく思い切りよく仕掛けた得意の内股は、見事に返され私の体は宙を舞った。「一本!」。大歓声とため息。一瞬にして全国大会出場の夢は潰えたのでした。

そして翌日の英語の授業。心の中で涙を流しながら「I come to Gifu High School only to practice JUDO」を復唱したのでした。

卒業後も柔道とは縁があり、大学、実業団と続けることができました。平成五年には夢の全日本選手権の出場を果たし、現在は、清水建設株式会社にて勤務をしながら母校の早稲田大学の柔道部監督として学生の指導にあたっています。

目標は「日本一」。指導方針は、もちろん「Only to practice JUDO」です。

目標は「日本一」。指導方針は、もちろん「Only to practice JUDO」です。



部署の仲間と 前列左端が筆者

織となっており、チーム一丸となって日々社会インフラプロジェクトの創出、開発を目指し奮闘しております。マレーシアの特徴として、マレー系六五%、中華系二〇%、インド系一〇%、その他五%の多民族国家として成り立っており、宗教(イスラム教、仏教、キリスト教他)及びその生活習慣、価値観につき実に様々です。

岐高で採まれて

脇田 善匡
昭和62年卒

岐阜高校卒業後もずっと脳裏に焼きついている恩師の言葉が二つあります。国語の恩師(伊藤先生)の「君達はローリング・ストーンであり続けなさい」と、地理の恩師(横山先生)の「石橋を叩いても渡らない県民体質はダメ。外へ出て行って活躍し、出て行く限り戻って来ることは考えな」です。私の両親が

自営業を営んでいた生活環境下、高校時代は外の世界を見る経験はなく、漠然と岐阜で骨を埋めて頑張っていくんだろうと思っ てましたが、岐阜高校卒業後もずっとその言葉は私の記憶の中に残り、それが就職先として総合商社を選択するという自分の進路に影響を及ぼしたんだろうと回顧しています。

私は二〇〇七年五月より三井物産マレーシア、クアランプール支店に駐在中。当支店は邦人、現地スタッフ合わせて二二〇名程の社員が在籍しており、邦人一人、現地スタッフ八人の組織となっており、チーム一丸となって日々社会インフラプロジェクトの創出、開発を目指し奮闘しております。マレーシアの特徴として、マレー系六五%、中華系二〇%、インド系一〇%、その他五%の多民族国家として成り立っており、宗教(イスラム教、仏教、キリスト教他)及びその生活習慣、価値観につき実に様々です。



取引先と 左から3番目が筆者

従い、顧客は勿論のこと、現地スタッフにおいても多様な価値観をそれぞれ持ち合わせており、その社員を一束に纏め上げ、組織を戦力化するには当然のことながら苦勞が伴います。斯様な環境下、組織のリーダーとして皆と一体感をもって運営できていると思えるのは、現地社員が総じて我々に協力的であるのに加えて、最も多感な時期に岐阜高校という多種多様な仲間が集まるところで過ごせたことが、何物にも代えがたい基礎になっっているんだと感じます。

今振り返ってみると、実に色々な仲間がいたと思います。勉学において頭の切れる人だと心底より思える友人。ファッションに拘り続けた友人。やっていたことは少し破天荒なところはあったけど妙に人を惹きつける友人。決して飾ることはせず、仲間からの信望がとにかく厚い友人。個性ある友人については枚挙に遑なしで動物園のようですが、地頭が強く、確固たる信念、軸を持っている仲間にも囲まれていたと思います。そのような仲間達と過ごした経験があるからこそ、多民族国家の人達との協働においても自然体で臨んでいるんだと実感しています。

昨今の日本でのTVニュース、新聞報道を当地にて触れる度に日本の元気の無さが気に掛かります。確かに、ここアセアン諸国において、日本の存在感はとりわけ中国の台頭によって相対的に弱まっていることを実感す

るケースもあります。然し乍、アセアン諸国はマレーシアと同様、多種多様な民族、価値観の人々より成り立っており、画一的なビジネスモデルは通用しません。地に足つけ、時には泥臭くても、顧客が本当に必要としているサービス・事を創造し続けることが求められております。斯様な厳しい環境下、岐阜で得られた経験と百折不撓の精神を糧に、新規ビジネスの創出、開拓に向け頑張り度いと、本寄稿を書きながら思いを新たにしました次第です。

最後に、岐阜の卒業生の皆様とそのご家族のご多幸と共に、皆様が各々の場において直面している課題、問題に挑戦し続け、新たな活路を創造されることをここにアラランプールより願っております。



私の研究は、一言で言うと、福祉国家における規制のあり方に関する研究です。福祉国家には、国民の福祉のために現金の給付をおこなう「給付国家」としての側面と経済活動の規制をおこなう「規制国家」としての側面があります。現在の福祉国家に関する研究が、前者、つまり給付国家としての側面に偏ったものであるという問題意識が、まず、あります。社会学の創始者のひとりであるエミール・デュルケムが「自由は規制の産物である」と指摘したとおり、規制に関する研究は、極めて社会的な問いであります。

分析と制度構想のふたつの研究に分かれます。まず、現状分析については、エスノグラフィックな手法を用い、「搾取される若者たち」(集英社)、「働きすぎる若者たち」(「自分探し」の果てに) (NHK出版)などを執筆しました。なぜ、エスノグラフィックにこだわるかと言うと、自分(たち)だけで何とかできるだろうと言う人がいる。そんなことはないということ、つまり、個人を超えた社会による規制が必要であるということをお分かってもらうためには、彼らが自分(たち)だけでどこまでできるのか、その臨界点を描き続ける以外に方法はなく、それを描くには、エスノグラフィックな手法がもっとも適していると考えているからです。

エスノグラフィックとしては、読み手に「自助努力」の限界を予感させるような、そんなエスノグラフィックを書きたいと思っています。そういった地道な作業を通してしか、人々の「共感」を得ることはできない、そして、共感することが、社会が変わっていくための第一歩だと考えて



わたしの研究と 高校生活

阿部 真大
平成8年卒

います。

研究と並行しておこなっている音楽評論の仕事は、私のエスノグラフィアとしての側面と大きく関わっています。私は、ロックを、臨界点で鳴らされる音楽だと思っています。身体も精神も消耗しきったときに人々が求める希望の音楽。それは、聞き手の共感を呼び起こすものでもあります。自分のエスノグラフィアもそんなものであったらいいなと思います、そこから色々なことを吸収しよう、音楽評論の仕事が続いています。成果として、『世界はロックでできています』(講談社)などがあります。

続いて、制度構想です。これは、国際比較、歴史研究が主なふたつの大きな柱となっていて、今後の日本社会における規制の具体的なあり方について、外国から、歴史から学ぼうと考えています。

まず、国際比較については、アメリカにおける「キャリアアラダー戦略」の実践を、翻訳書である『キャリアアラダーとは何か』(J・フィッツジェラルド 筒井美紀、居郷至伸と共訳 勁草書房)で紹介しました。今後は、スウェーデンにおける社会保障

システムについての研究を進めていきたいと思っています。実際に現地で研究することも視野のなかに入れていきます。

また、歴史研究については、さらにふたつの柱があります。ひとつは近代家族における世代間継承の問題、もうひとつは自営業の規制に関する問題です。前者については、共著書である『ケア その思想と実践4 家族のケア 家族へのケア』(上野千鶴子他編 岩波書店)で、遺留分制度の分析をおこないました。後者については、商店街の歴史について、共同で研究を進めています。両者ともに、今後の研究の主軸となっていくものですので、精力的に展開していきたいと思っています。

以上が、私の研究の紹介なのですが、これらのベースは、高校時代につくられたと思っています。まず、エスノグラフィアに關しては、見知らぬ場所へ乗り込んでいって見知らぬ人に話を聞く、その際に要求されるコミュニケーション能力を、岐阜高校では培うことができました。

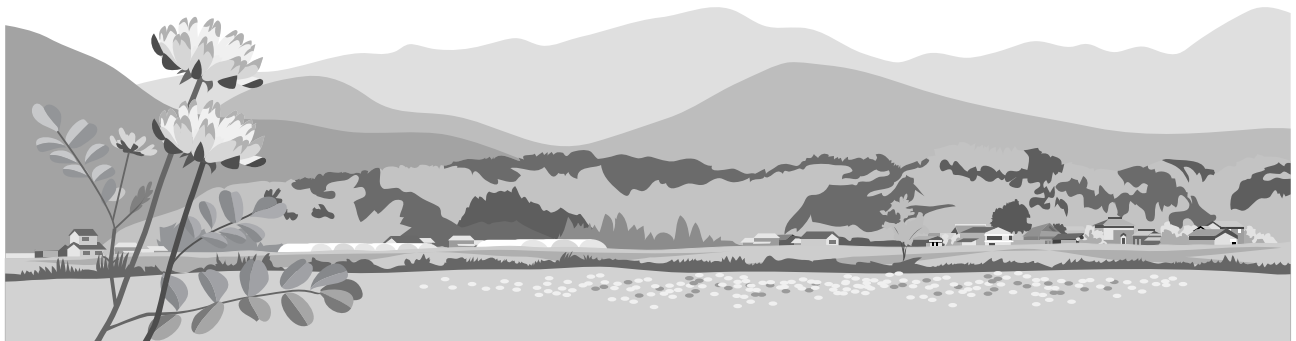
スポーツマンタイプにミュージシャンまで、何かひとつに飛びぬけていないと埋もれてしまう、クラスには、そんな(いい意味での)緊張感がありました。自分と違う他人に興味をもち、彼らの話を聞いて、いいところに学ぶ。そんな姿勢が自然と身に付いたのも、「ヒトクセあるやつ」に囲まれたこうした環境のおかげだったのではと思っています。

また、国際比較研究をする際に必須となる英語のスキルも、岐阜高校で鍛えられたと思っています。『山貞』(構文集)は、それだけで凶器になるのではないかと考えるくらいの分厚さだったので、見方によっては「時代遅れ」に映りかねないこれらの参考文献を徹底的に教わったことは、最近はじめた翻訳の仕事に最大限にプラスになっています。安易に「日常会話」に走らない岐阜高校の英語教育は、真のプロフェッショナルを育てるための基礎教育であったのだと、いまさらながら気づきました。

岐阜高校では今の研究のベースとなる知識を色々と学びました。でも、私が、高校時代にもっとも夢中になり、その後の思考のベクトルを決定づけられたのが、数学の授業でした。

数学は、一見、文系の学問とは関係が薄いように見えるのですが、それは大きな誤解です。みんなに共通の問いがある。それを解くのはいくつものやり方がある。各人がそれをみんなに分かるように説得的に論じる(ひとりよがりではない)。その是非について議論する。そして、よりよい解決策を導き出す。これは、すべての学問に通じる「基本姿勢」です。その基本姿勢を学ぶのに、数学ほど適した科目はありません。岐阜高校の数学の授業は、難しい問いを前に、先生も生徒も平等でした。そしてともに悩み、格闘し、学び合いました。研究に行き詰まると、私はいつも、あの、緊張感みなぎる数学の授業のことを思い出します。難問に挑戦する「百折不撓」の精神。そのときの高揚感が、私の研究生生活の原点になっています。

社会学者



百折不撓の精神で

柴橋 正直
平成10年卒



1 はじめに

栄えある諸先輩方を前にして、岐阜高校同窓会会報に寄稿する機会をいただき、心から感謝申し上げます。昨年の夏、岐阜から国政へ送り出していただきました。街頭に立っている時も、自転車で遊説している時も、数々の会に参加させていただいている時も、多くの諸先輩方からお励ましの言葉をいただき、岐阜高校の温かさ、懐の深さを感じました。

2 岐阜高校の校歌

浪人時代の五年間、岐阜高校の校歌ほど身にしみる歌は、他にありませんでした。「国家のた

めに明け暮れ学ぶ」は、「この国を愛し、この国のために働く」という私の志と常に一致し、「華陽の健児心雄々しく、百折不撓つとめてやまず」は、「絶対に当選できない、諦める」と言われた時、雪の降る中演説した時など、どんなに辛く苦しくても必ず道は拓ける、見ている人は見せてくれている、と励まされました。心は折れませんでした。全国に誇れる校歌だと思います。

3 斉藤隆夫代議士の如く

齊藤隆夫代議士は、昭和の時代に凜然と立つ政治家でした。

一九四〇年二月二日、肅軍演説を行います。事前に、鎌倉の海で演説の練習を行い、練りに練ったものでした。「国家百年の大計を誤るようなことがありませんならば、これは現在の政治家は、死してもその罪を減ぼすことにはできない」と軍部と議会を鋭く批判しました。そのため、議員を除名されましたが、一九四二年の選挙で、斉藤代議士はトップ当選を果たしました。百折不撓の精神は、斉藤

隆夫代議士の政治家としての信念にこそあると思います。そして、私も斉藤代議士のような政治家でありたいと心に誓っています。

4 最後に

諸先輩方から連綿と歌い継がれてきた校歌を、これからも大切に心にとめながら、政界の荒波を百折不撓の精神で乗り越え、国家国民のために頑張りたいと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

衆議院議員



経産委員会研究会にて

同窓会のホームページのご案内

岐阜高校同窓会では、会員の皆さまのためのホームページを開設しております。

総会の案内、過去の記録や会報も掲載し、また、地区同窓会や学年同窓会や母校岐阜高校のホームページともリンクしております。

●住所変更及びメールアドレス登録はHPで!

住所変更された場合やeメールの登録は、同窓会のホームページから行ってください。

HPには随時新しい情報が掲載されますし、メール登録をされた方には毎年、同窓会総会などのご案内を差し上げます。また、会員の皆様からの有益な情報や学年同窓会開催案内などをお寄せください。可能な限りHPに掲載いたします。

●岐阜県立岐阜高等学校 同窓会 HPアドレス

<http://www.gikou-dousoukai.jp/>

団体名	連絡先
岐阜 (支部) 岐阜県同窓会	〒514-8501 岐阜 岐阜二丁目
岐阜 (支部) 同窓会 (支部)	〒517-0001 岐阜47
岐阜 (支部) 岐阜同窓会	〒517-0001 岐阜県同窓会1991年同窓会